
さーちんぐわーど

ふみふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さーちんぐわーど

【Nコード】

N3203I

【作者名】

ふみふみ

【あらすじ】

平凡な変わらぬ日常が夢から覚めるとそこは一変、見知らぬ世界。調停者シルスの言うなくしものとは？

意志を持つ最強の剣と共に異世界探し物旅！

初めて書いた小説なので読みにくかったらすみません(´▽`)

はじまりその夜

背中にゴツゴツとした感触、重い瞼を開けば視界には灯りひとつない闇夜。

気だるいながらも自分の手で自らの頬をつねってみた。

痛い！

うわゝ。夢オチじゃないよゝ。ってかふざけんなよ！あのちびっこめ！！

現実逃避するように俺は数時間前の記憶を探った。

俺の名は木戸明久。社会人1年目の23歳。

まあ、実年齢より若くみられることが多いかな。

顔の作り自体は悪くないはずなのにどうしてこう地味なのかしらとは母親による俺評価。

客観的に見て俺の両親は若い頃は美男美女カップルだったんだろうなと容易に想像のつく外見をしている。

華やかな二人に比べその二人から生まれたはずの俺は華やかさの字すら無い。

しかし俺にはそんな事より思ってたより伸びなかった身長の方がよほどショックだった。

二人とも平均以上の長身なのにそれから生まれた俺は165センチって一体。

劣性遺伝大集合な俺ではあったが元来の気質によってまあまあ活気のある日々を送っていたある夜のこと。

疲弊した身体には睡眠が一番とばかりにベッドに飛び込む俺。

ようやく仕事にも慣れてきて全体的な流れとつか概要が掴めてきたのはいいがそれまでの緊張がここにきてプツリと切れかかっていた。

何となく身体がだるい。風邪でもひいたかな。

いつもより数時間早い就寝。

明日には疲れもスッキリ一日の始まりだ。

そんな夢の中に突如現れたのはくすみ知らずな金髪天パ陶器のような肌をした幼稚園児くらいのチビッコだった。

背景はひたすら続いているんじゃないかってくらいの白。

まっ白白なその空間にはアホ面を引っ提げて立ち尽くす俺とチビッコの姿のみ。

何だこれ？

「はじめまして。ぼくはシルス。」

チビッコはペコリとおじぎする。突っ込みどころがありすぎてよくわからないがいい大人の俺が無視するのもよくない。

「ああ。はじめまして。おねはきどあきひさ。」

名刺は今無いのでチビッコの目線までしやがみ軽く首を曲げた。

「ゆめのなかでごめんなさい。ぼく……、あきひさにたのみがあるんです……。」

しやがんだ俺にチビッコは涙を見せ飛びつく。

突然の事に尻もちをついた俺は状況もわからず、でも泣いている子供を冷たくあしらうのは気がひけてよしよとその背中をかるくさすってやる。

すると鳴き声は無くなるどころか益々ひどくなった。

「わかったよ。とにかくなきやんでくれ。」

子供の扱いなんて知らない俺はこっちが泣きたいほどだ。

一人っ子で育った俺は身近にこの年齢がいたためしがない。だからたいして何も考えずにそう言ってしまったんだ。

数時間後には後悔でこっちが泣きたい目にあうなんてこの時の俺は知る由も無い。

「ほんとに？」

俺の胸に顔を埋め鼻をすすりながらも訊いてくるチビッコに俺はこくこくと頷く。

「やった！ありがとうあきひさ！」
なに！？顔を上げ笑顔を見せるチビッコの顔にはもう涙のかけらもない。

嘘泣きか？！だまされた。

チビッコは俺から離れると立ち上がりニッコリと悪魔の笑みを浮かべパンパンと軽く両手を合わせた。

その手からニヨキニヨキと現れたのは1メートルを優に超す長剣と銀色に輝く腕輪。

「あきひさにはこれからさがしものをみつけてもらいます。このうでわ、つけてるともくてきちをおしえてくれまゝす。」

そう言っただけでまだ呆けたように尻もちついたままの態勢だったおれの左腕にチビッコはその腕輪をはめた。どこにもつなぎ目がないにも関わらずその腕輪ははめる時にはスルリと俺の腕にはまり、抜け落ちないように僅かな隙間だけを残しぴったりなサイズになってしまった。

これって外せないんじゃない。

「それからこのけん。あきひさがおもいうかべたかたちになつてくれるよ。けんをもつてるかぎりあきひさはむてきだよ。」

そういつて強引に俺の手にその剣を押しつける。

ずしりとくるかと思つたその剣は思いのほか軽くて、包丁ぐらいにしか感じられない。

間近でみたその剣は持ち手部分が金色で細かい彫刻が彫られていて一見してタダものではない。

そして同じ金色の細かい鎖が持ち手と鞘を封印するように幾重にも巻きつけられていた。

これではすぐに剣を抜くことができないのではないかという俺の疑問を読み取つたかのようなタイミングでチビッコは言う。

「このけん、いしをもつてるからおねがいしないでぬけないよ。じやあね！がんばってはやくみつめてかえってきてね。」

チビッコは満面の笑顔で矢継ぎ早に言葉を紡ぐとバイバイと手を振

る。

「えっ!!なっ?!ああっ!!!!!!」

突然俺の足元に黒い穴が開く。

マンホールほどのその穴に俺は成す術もなく声と共に落下していった。

暗転。そして現在に至る。

旅のおともにおっちゃん

どうする俺。

落ち着いて状況分析から始めよう。

どうやら俺はどこかの小高い丘にある一本の大木の幹に寄りかかって座っているらしい。

穴から落ちたのにコブも何も無い。

手元を探ると右側の幹に立てかけられていた例の剣を払ってしまったらしく俺の頭に直撃した。

「いつつう！」

剣は俺に容赦ない攻撃をするとそのまま俺の足元へ転がった。両手で頭を擦りながら俺は痛みに呻いた。

（起きたか？若者よ）

突然俺の頭の中に渋い美声が。

驚き思わず右に振り返ってみるも誰もいない。

（痛そうだな。不可抗力とは言えすまない。）

まさかまさか、そろーりと転がった剣に目をやる。

「剣から声なのか？」

まさかとは思うがそういえばあのチビッコが何か言ってたよな。

意志を持つてる剣だとかって……。

これはやっぱりそうなのか、日本人なら物に魂が宿るとかって考えもありっちゃありなんだろうけど……。

（うむ。私はこの剣に生まれ変わった者でアルトという。）

「生まれ変わった？」

意味が分からない。

困惑する俺に剣は少し間を開けて言葉を紡ぎだした。

（私は元々人間だった。最強の剣士を目指し世界各地を放浪し遂にはその名を戴くまでとなった。しかし、私はあまりに多くの者を殺めすぎた。生涯を終えた私にシルス殿が与えた評価は人としての転

生ではなく最強の剣として・・・物としての転生だった。(

サラリと語ってくれるけど、俺なら人間だった時の記憶を持ったまま物になるなんてすごい嫌だ。

あのチビッコはそんなに性格悪いのか。

見た目は純粋な天使様だというのにはあれは化けの皮ってヤツか。

無性にチビッコへ憤りを感じてしまう。

「はあ？シルスってあのチビッコだよな。あいつ一体何さまなんだ。

」

(シルス殿は人間の世界を終わらせないように調節する者。調停者と呼ばれている。若者は優しい人間だな。)

シルスがただけ偉いんだか俺は知らないし知りたくもないがなんか剣のおっさんが気の毒に思えてきて俺はおっさんを心の友とネーミング。

「若者って程俺は若くないし。俺は木戸明久23歳。遠慮なく明久って呼び捨てでどーぞ。でさ、俺の方もアルトのおっちゃんって呼んでいい？」

こんな状況だけど俺は笑顔でおっちゃんに言う。

(おっちゃん！？私はまだ35...まあ、いい。私も明久殿と呼ぼう。及ばずながら共に使命を全うしようぞ！)

熱いおっちゃんは人間同士だったらここで堅い握手でも交わしそうな雰囲気。

俺はそんな使命いらない。

めんどくさくない程度にぼちぼちがんばりますか。

ふと現実にはちかえる。

「今何時だろう？」

(さあなあ。夜には違いないだろうが。獣の気配はしないようだから明け方まで寝たらどうだ？)

案外暢気なおっちゃんはそんな事を言ってくるが生憎おっちゃんの一撃で眠気なんてとっくになくなっていてる。

「もう眠くないよ。それより食料と寝床を確保しないとなあ」

それにはまず金だ。

近くに町とかあるのかな？

夜が明けたらまずは丘の周りをグルッと回って町のありそうな方向に下りてみよう。

それから職探しをして…またここで野宿か。

冬とかでなくてよかった。

生憎今の俺は寝間着代わりに着ている長袖Tシャツに下は黒のスウエットという姿。

どうせ異世界なんてところに送るなら服装も考えてもらいたい。

「あーっ！！」

衝撃の事実思わず叫ぶ。

(ど、どうした?)

「靴がない…」

寝た時のままの格好なわけなので当然俺は素足のままだった。

「ひ弱な現代人をなめるなよ！」と届かないだろうけど空に向かって叫ぶ。

(靴…さすがに私も靴にはなれぬ)

おっちゃんのスमानさそうな声。

ん？そーいえば、チビツコが剣について他にも言ってたな。

意志を持つてるってのは分かった。

おっちゃんいい人そうだし旅の共として心強そうだ。

「おっちゃんつてしゃべる他になんかあるのか？」

俺の問いかけにおっちゃんは大人が子供に言い聞かせるかのように呆れ気味。

(明久殿はシルス殿の話を全く聞いてなかったのか…私は剣以外にも構成物の半分以上が金属製のものなら変化可能、重さも変えることができる。変える際には剣を手にした状態で頭に思い描いて変われと命令していただきたい。ちなみに今は本来の姿で、重さのみ軽くしてあるのだが…)

「なーる。だから見た目の割には軽かったのか。」

ふむふむ。金属製のもの…って基本刃物だよなあ。

刃物を常に持つてる俺って変質者に間違われなだらうか。

ファンタジーな世界だったらいいけど、日本みたいな所だったらおっちゃんには申し訳ないけど果物ナイフあたりにもなってもらってポケットにでも入れとくか。

「試しに何か変身してもらってもいい？」

（構わぬよ。）

それじゃあと俺は剣を握り頭に思い浮かべる。

「変われ！」

効果音をつけるならドロンって感じに剣から煙を吐きだしておっちゃん俺の手の中で変身した。

（どうだ？明久殿。ところでこれはなんというものだらうか？）

「そか。おっちゃんは日本の事知らないのか。これは鉄下駄と言ってる本来は肉体強化に使うんだ。」

そう俺の手に今あるのは下駄の本来なら木でできてる部分を鉄に変えた鉄下駄だ。

鼻緒の部分は擦れると困るので黒い布にしてみた。

しかしなあ。出てきたのは確かに思い描いたものと同じなのだが手にしているのはひとつだけ。

片足分しかない。

これでは履けたとしても意味がない。

靴はどうあっても無理そうだ。

裸足…。ホームレスとかに間違われなれないといいな。

「元に戻れ！」

ドロンと煙を吐いておっちゃんは元の剣へとその姿を変える。

（やり方はこれで分かっただらうか。後、会話なのだがな）

「ん？何？」

（今の私は明久殿が声を出さねば会話ができぬが、思念同士の会話というのもできるにはできる。ただその場合、明久殿の思考は私に全て漏れてしまう。もし思念での会話の方が楽ならそちらに切り替

えるが…)

「それは嫌だ！とりあえずは今のままでいーよ。」

例え変質者扱いされようとも頭の中を覗かれるのよりかはマシだ。

おっちゃんはい言ひ触らしたりとかしなさそうだけどそれでもやっぱりその機能だけはきつと思わないと思う。

いや、使いたくない。

そんなこんなおっちゃんとしてるうちに周囲が段々明るくなってきた。

丘の上なだけあって遙か彼方から朝日の登るさまは一見の価値ありだ。

360度の巨大パノラマはおそらく俺の住んでいた東京いや日本ではないだろう。

いつになったら帰れるのか。

その間、無断欠勤になってるならチビッコにクレーム入れてやる。

「とつとと終わらすぞ！」

(うむ)

自棄気味に気合いを入れて立ち上がり俺は一步を踏み出した。

まちへ

木の周囲をゆっくりと周り丘の下に広がる景色を目に映していくとふと一ヶ所に明らかに人工的な門らしきものが飛び込んできた。

「お！門がある！」

（そうか。では明久殿まいろうか。）

「おう！」

裸足の俺とおっちゃんは早朝から丘をトコトコ下り始めた。

マイナスイオンもいっぱい吸って心なしか排気ガスで汚れた肺も綺麗になったんじゃないかってな気分では俺は門の前にやってきたはずなのに。

着いたとたん金髪青い目のモロ外人な門兵二人に俺は両サイドをがっちりガードされてしまった。

「や、俺怪しい者じゃないですよ。訳あって旅を…」

「うるさい！黙れ！」

「うるさいって、だってコレ明らかに捕まえる気満々じゃないですか！」

俺は声を大にして叫ぶ。

門兵二人は互いに顔を見合わせ、俺の腕を取るとそのまま何処かへ連行しようとするので俺はおっちゃんだけは手離さないようにあらん限りの力で振り切ろうとした。

「聞いたことの無い言語でしゃべるな！叩つ切るぞ！」

門兵の片方が俺の腕を後ろへ捻り上げる。

「痛ッ！痛いつつーの！大人しくするから！！！」

涙目になりつつも俺は抵抗を止める。

門兵によっておっちゃんが取り上げられようとしているのをくやし

涙で眺めるしかなかった俺の前で剣もろとも地面に倒れる門兵。剣に引つ張られるようにベチャつとなつた20代だろうと思われる門兵は信じられない目で俺を見た。

「なんて重さの剣だ。お前こんな剣をよく軽々と持てるな。」と忌々しそうに言われた。

あ。どーやらおっちゃんが機転をきかせて剣の重さを変えてくれたらしい。

ナイス！おっちゃん！！

結局門兵二人は、俺の両腕を体の前でグルグルに縄で縛りその手に二人係りでおっちゃんを持たせた。俺の手に渡る時には剣は卵10個パツクくらいの重さへと変化していた。うは〜。

「ホント理由教えてくださいよ〜」泣きの入ってる俺。

「…聞いた事のない言語ってことはどこかの少数民族か？」

俺の事はガン無視なんですな。ってゆーか、さつきから気になつてまさかと思いたい事実。

今俺には洋画の吹き替えばりに門兵の話が日本語で聞こえていたりする。が、俺が話してるのはまさかの日本語のままだったり。

どーすんだよ！？現実逃避すらできないこの状況に俺はホント泣きたい。

コミュニケーション取れずにどーやって就活すればいいのさ！

さつきからおっちゃんはだんまりしてるし。

ミソの足りない俺の脳をこれ以上虐めないで欲しい。

続 まちへ

俺に話しかけてくる言葉は分かるのに日本語しか喋れないという
事実には俺は現在パニックっている。

「どーしたらいいんだよ！」

どーせ相手にはガン無視されてる状態なのでそのまま文句を垂れ流
す。

(明久殿。もしや彼らと言葉が通じないのか?)

落ち着いた様子のおっちゃんの問題に俺は八つ当たり気味に答
える。今まで何も言わなかったのは我関せずで寝てたわけじゃない
よな!?

「信じたくないがそーらしい。おっちゃんは気付かなかったのかよ
！」

(私には言語の違いは関係ないのでな。すまなかった。なれば私の
思念を飛ばそうか?)

「何それ」

(私はどの言語にも対応している。明久殿と会話するように他の者
にも言葉を直接脳に送ることができるぞ。)

「えっ!そーなの!?!」

日本語を理解できるだけでも素晴らしいのにその翻訳機能は異世界
も含む全世界!

おっちゃんすげーよ!グローバルすぎ!

俺の中のどよーんとしてたテンションは急浮上。

「おっちゃんさすが!じゃあ早速…」

(しかしよいか?この世界がどういったものか分からない今、私
の念話を聞いた彼らが私達を更に不審に思ってしまう可能性もある
か?)

確かに。門兵の姿を見る限り設定は中世ヨーロッパなのか?な鎧を
着ている。

魔法とかあるファンタジーな世界なのか今いち判断しにくい。もしなかったら俺って魔女裁判にでもかけられてしまつかも。それはマズイ。

「おっちゃんならどーする？」

（うむ。私ならば、まずは相手の親玉が出てくるまでは言葉が通じない振りをしたままの方がよいだろと思うが。とりあえずどのよくな事態になるうとも剣を持ちうる限り私は明久殿を守る故、命の心配は無用。）

おっちゃんの素敵台詞に俺は感激してしまった。

命の心配をしないとすれば、門兵にどこに連れていかれるのか気になった俺は大人しく付いていく。急に静かになつた俺に門兵は観念したとでも思つたらしい。

「ほらよっ！進め！」5分程歩いた場所にあつた小屋に放り込まれる。

「えっ？あつ！」

手が塞がってる俺は受け身もとれず顔面からダイブ！

「痛っ……………くない!？」

あれれ？今確かに手の代わりに顔打つたはず。

（私を持っている限り明久殿に傷ひとつ負わせはしない。）

「おおー。おっちゃんありがとう」

俺が女、おっちゃんが人間ならロマンスでも生まれそう。

だが、生憎俺は男でおっちゃんは剣。恋愛要素皆無。

周囲を見回すと小屋は10畳くらいの広さでやたら埃っぽい。

それもその筈、窓が遙か頭上にちっこいのがひとつと今俺が入ってきたドアのトコにひとつしかない。これじゃ換気できないだろう。

しかもちっこい窓からじゃ部屋へ十分な明かりが届くはずもなく薄暗い。衛生環境最悪なこの部屋にいつまで居させられるのか。

まだ探し物のサの字すらないってのに。早く俺を帰らせてくれっての！

「誰だ？」

「いつ!!」

突然声をかけられビクつとなる。小心な俺。

「なんだお前も捕まったクチか。」

縛られてる俺の姿に目をやって男は近づいてきた。

しつかりとは分らないが黒っぽい髪をした西洋人の姿。身長は俺

より10センチくらい高い。「なんだまだ子供じゃないか」

男はそう言っつて口許に笑みを浮かべた。

なぬ？誰が子供！？俺か？

身長だけで判断しやがって。

西洋人種だからなのかさつき門兵しかり皆、背が高い。だからっ

てなー、東洋人なめんなよ!

「立派に成人してるっつーの!」叫ぶ俺にいぶかしむ男。

「聞いたことのない言葉だな。」

「そりゃそーだ!この世界の人間じゃないからな!」

「こちらの意味はわかってるのか。」

「そーそー分かるんだよ!っつて、えっ?」

俺は驚いて男の目をまじまじと見た。

「どうだ?俺の言っつてることがわかるか?」

何も考えず俺はコクコクと頷く。

「そうか。…こんなにキツく縛られて可哀想に。」

よくよく見れば男は別段縛られてもいない。この扱ってもしや俺

だけ?!ひでえ。

「それにしてもその剣は素晴らしいな」

縛られてる俺の手の中にあるおっちゃんに気付いた男は感嘆のため

息を洩らす。暗室の中にあってもおっちゃんの剣は人目をひくらし

い。

「やらないからな!」一応念のためおっちゃんを男の視線から隠そ

うとしてみたが、男は笑って俺の肩を止める。

「盗ったりしねーよ安心しろ。っつて無理か。ほんじゃ信頼への一歩

として、まずは互いの名前から知っつこうぜ。俺はシーダ。15歳。

賞金稼やら護衛あたりを手広くやってる。お前は？」

15歳だと！

15でこの身長？！

170はゆうにあるじゃねーか！

しかも15ならまだまだ成長期なんじゃないか？

なんつーうらやましい。

165でこの先成長もしなさそうな俺。

確かに子供に見えるかもな。

つてこの世界、女はどれくらいが普通なんだろう？

この様子だと女の平均より低い可能性も出てくる。

日本だつて俺より背の高い女はごまんといたし。

(明久殿。…明久殿！名前は言わないのか？)

おっちゃんの声で我にかえつた俺は男の話を年齢から先全く聞いていなかった。

「あつ。俺、明久！」

「アキヒサ？」

「そうそう。アキヒサ！」

俺の反応にシーダはとっても嬉しそう。なんでだ？

よっぽど一人で寂しかったんだな。

俺はシーダに答えるように満面の笑みを浮かべた。早くここから脱出したいがシーダとの出会いは決して悪くない。

俺はその後、シーダからここに連れてこられた理由やこの国について知ることとなった！。

続々 まちへ

シーダの説明によると、この世界は西の大陸アルギダ国と東の大陸ガラキスタ国の2つその他小さな国々に大きく分けられているらしい。

主要な言語はそんなわけで2つしかない。就学したことのある者はどちらの言語も一通り習うそうだ。だからそのどちらでもない言語を使う俺はかなりの不審者扱い。

でもってどちらの国も魔法は一般的ではないが一応あるらしい。

とゆうのも、魔法力とゆうのは生まれながらにあるものらしく、生まれてすぐに専門機関に預けられるからまず一般の人間は魔法などお目にかかれないそう。占術や霊の存在なんかは広く認知されているように政治に占術が関わったりする事もある。

剣や弓矢は騎士や賞金稼ぎなら持っていてあたり前。一般市民でもちよっとした短剣程度のものは持っているのが普通だと言われ俺はホツとした。

その様子を見てシーダは俺には聞こえないくらいの声で「けどこんな技物を持って歩いてるヤツなんていないけどな。」と言っていた事などももちろん俺は知らない。

小さな小競り合いは度々あるが戦らしい戦はここ数十年ないそうだしきなりしょっぱかれるような世界だから普通に戦争とかあって戦々恐々とすることになるかと思っていた俺はかなり安心した。

やっぱラブ&ピースをモットーにしている身としてはできるだけおっちゃんを剣として働かせたくない。だってさ、前世で人をいっぱい殺してしまったから物になってしまったというおっちゃん。ここでまた

ザクザク斬つたら今度は何になつてしまうのか想像すらつかない。

で、一番重要な今俺らが捕まってる理由についてシーダがおそらくという前置き付で言うには、西のアルギダの姫巫女とかゆう人物が

先日「これから後に国が滅ぶような天災がおきる。解決の鍵は黒髪の少年。見つけねば滅びの道を歩むこととなる」なんてことを御告げで言ったらしい。

そんな理由でアルギダでは黒髪の18歳未満の人間は問答無用で王都のとある場所に集められているのだという。

集められた人には給金も出るし、もし探し求めていた人物であったならば今後の生活の面倒までみようという話らしいので反発する人間も少ない上に髪をわざと黒に染めたりする者もいるくらいなのだそう。

だが生憎今の俺には探し物を見つけるといふ最優先課題があるのでここでのんびりするわけにはいかない。1秒でも早く解放されねば（明久殿は23だから相手にそれを伝えられるならばその条件からは外れるな。）

そう、そーなんだよ。おつちゃんの言う通り伝えることさえできるなら問題は万事解決ですよ！

伝えられねばね！

うーん。どーする俺？！悩み巡らせていた俺は小屋の扉の鍵がガチャガチャと音をたてていることに気づいていなかった。

「おい！食事を持ってきたぞ。」突然の背後からのダミ声に俺は文字通り飛び上がった。

「わあ！！」俺は扉を背にして床に座っている状態だったので後ろからの声に前のめりになる。結果、正面にいたシーダに飛び付くような格好になってしまった。

「アキヒサは怖がりだなあ」笑って俺の肩を抱きしめるシーダから慌てて体を起こす。

後ろを見ると先程俺の腕を捻り上げた門兵が二人分の食料が入った籠をぶら下げて小屋へと入ってきた。

腹が減っては

「飯！やった！」

現金なもので俺の胃袋が籠から出てきたロールパンぐらいの大きさの見た目フランスパンを見たときたんぐウ〜と鳴った。

シーダと門兵は正直な俺の腹の音に思わず苦笑。

だって生理現象、しょうがないだろう。

おっちゃんもそうだったが年下のシーダにまで保護者な目で見られてしまう俺って一体。

心の中ではシヨックを受けていたけどもそれより何より飯だ飯！

腹が減っては戦どころか脱出もできない。

門兵は籠から出した1m四方の白い布を床に敷き、そこへ食べ物を広げた。

パンにハムのような薄切りにカットされた肉、色はじゃがいも見た目はサツマイモな穀物を蒸したものなどこの国の食文化が日本とかけ離れていないことに感謝。

二人で食べるには多すぎるんじゃないかっていう量が置かれる。

「さあ、アキヒサ！食べるよ。腹減ってるんだろう。」

シーダはそう言って俺にパンを勧める。

「いただきます！」両手を合わせて俺はパンを受け取るとそれを口へと運んだ。

うまい！激うまだよ！

外は固いの中はふんわりもちもち。バターたっぷりなそれは俺の食欲を倍増させた。

痩せの大食い在地で行く俺の食いつぶりに二人は驚嘆しているようだが俺はそんな二人に目もくれずひたすら咀嚼。

物事に熱中すると周りが目に入らなくなる俺は一口を食べたことによつて止まらなくなった。

我に返ったシーダもこのままでは全部なくなると思ったのか急いで

食べだした。

あれほどあつた食料も15分とかからず跡形もなくなり、門兵は布を籠へと戻す。

食休みしている俺に向かってシーダが気持のいい食べっぷりで驚いたと洩らす。

はははとカラ笑いでごまかす俺。

普段はこんなに食べたたりしない。サラリーマンの細々とした給料じやエンゲル係数高すぎであつという間に破産するからな。

誤解でとらえられているのだ、これくらいバチは当たらないだろう。和やかに俺とシーダが談笑していると門兵が話を遮ってきた。

「これからお前達を王都ムスカへと連れていく。背の低いお前から先に出ろ！」

「背が低い言うなつての！」「この連中はどれだけ俺のコンプレックスに触れれば気が済むんだ。

とゆうか今、何て言った!?

王都へいくとか言つてなかつたか。

まずい!

王都になんぞ行つてる余裕は俺にはないんだ。

1秒でも早くここから出て就活しないと!

どこにあるかは分からないが、チビッコもあたりをつけて落しているだろう。

きつとこの辺りにそれはあるはず。

王都がここから近いかどうか分からない今、ここから離れるのは非常にまずいのだ。

俺は脳内で軽くパニックつておっちゃんに助けを求めろ。

「ここから出たい。人を傷付けずに脱出できないか?」おっちゃんの出番だ。シーダが門兵に囁くように何か言っているが俺にそれは聞き取れない。そんなことより俺はおっちゃんの返事を切実な思いで待つ。

(了解した。扉が開いた時、私が目くらましをしよう。明久殿は合

図をしたら目を瞑って走れ)

俺の切なる願いに頭の中の声が答える。

分かった。俺はおっちゃん言うとおりに大人しく腰を上げ、門兵に促され扉の外へと向かう。

扉が門兵によつて開けられると闇に慣らされていた俺は急に差し込んだ明かりに目を細めた。

(今だ！目を瞑って走れ！！)

おっちゃんの声に俺はギョツと目を瞑りあらん限りにダッシュした。「まてっ！！止まれ！！！」

門兵の声が一瞬耳にはいるがガン無視。止まってたまるか。

大学と就職してからの半年ほぼ運動していなかったが中学高校と陸上部だったころの腱脚は健在だったらしい。

目を瞑っていても感じる、風を切る身体が気持ちいい。どこまでも走っていけそうな解放感！

調子に乗って更に加速しようとする俺。

とその時！

「あぁっー?!」

腕を縛られたまま走る俺はまさかのまさかおっちゃんも予想できなかったであろう、何もない地面に躓くというドジを踏み、勢いそのままにゴロゴロと転がった。

急いで態勢を立て直そうと身体を起こした俺の首筋に触れる冷たい金属の感触。ひいっ！

「動くな！動いたら首と胴体が離れることになるぞ！」

俺は動きを止め、信じられない思いで声を絞り出す。
だつてまさか。

「シーダ！なんで・・・」

なっ、なんなんだよ。

短い間だったけど共に囚われの身だったシーダ。

俺よりだいが年下のくせにやけに大人びていたシーダ。

でも俺たちそんなに悪くない関係じゃなかったか？

首に触れる冷たい輝きがそんな俺の気持ちを裏切るように存在していた。

腹が減っては（後書き）

亀の歩み。

なかなか進まず。

でも今年中におわらせます（希望）……（）

扉が開き明かりが差し込む。

門兵に連れられてその人物が小屋に転がされるのを俺は気配だけで追った。

どうやら男らしい。ここからはちょうど影になってしまつて顔は見えない。

何やら聞き覚えのない言語でしゃべっている。

俺は8つの頃から学院で学んでいるがそんな俺でもその言語は全く聞き覚えがない。

不思議な発声の言語だ。詩人の詠む詩に似た音程。

好奇心が抑えきれず俺はその人物に近付いて行つた。

「誰だ？」

こちらの言葉が通じるか分からないが一応声をかけてみる。

相手は俺がここにいたことに気づいていなかったらしく、びくっと肩を震わせた。

「何だお前も捕まつたクチか」

俺の視界に入った相手の姿は小柄な黒髪の少年だった。

僅かな光で確認できるその顔だけは見た目12、3歳といったところ。

背丈と合わせてもそのあたりだろうと俺は相手を安心させるように笑みを浮かべた。

「なんだまだ子供じゃないか」

しかしその子供の手に握られている剣は異彩を放っている。

まずその長さ。

俺の胸あたりまである。

現在アルギダの商業都市で1、2を争う鍛冶屋職人をもつてしてもこの長さの剣を打てるものなどいるのだろうか。剣は長ければ長いほどその鉄を鍛える技術が高くなる。全ての刃を均一に叩き鍛える

為には鉄を熱する窯も大がかりなものになってしまふ。

そして一番目を惹くのが持ち手に施された細かな彫刻と持ち手と鞘を繋ぐ鎖の存在。

あれではとっさに剣を抜くことができない。剣としての役割自体を否定するかのような造りなのだ。

「立派に成人してるっつーの！」少年が叫ぶ。

意味は分からないがどうやら何か文句を言っているらしい。

「聞いたことのない言葉だな。」

「そりゃそーだ！この世界の人間じゃないからな！」

俺の言葉に少年は間髪いれずに何か答える。このタイミングはもしかしたら。

「こちらの意味はわかっているのか。」

「そーそー分かるんだよ！って、えっ？」

少年は驚いて俺の目をまじまじと見た。やはりそうか。

「どうだ？俺の言ってることがわかるか？」

少年はコクコクと頷く。

「そうか。…こんなにキツく縛られて可哀想に。」

本来の姫巫女の伝令はこんなものではなかったはず。

地方に行けばいくほど本来の伝令が大きく歪められて伝わっているようだ。

俺の聞いた内容は「誠に勝手なことだとは思いますが、皆が平和に今後生活するために黒髪を持つ少年に暫しの間、協力していただけるように要請していただけますか。その間の生活やその他の問題に關してはこちらで最大限の協力をさせていただきます」だったかな。だいたいあの姫巫女に強引に何かを進められるとは思えない。

こんな扱い受けたら協力どころか俺なら絶対、協力してやるものかと思う。

少年の姿は俺に同情心を起こさせた。

なぜだか無性に守ってやりたいと思う。

部下が見たらきつと目を剥くだろう。

「それにしてもその剣は素晴らしいな」

先ほどから気になってきた剣の存在。

こんな風に縛りあげられているという事は少年は剣を使わなかったのだろうか。

「やらないからな！」

少年は子供がお気に入りに入りのおもちゃを取り上げられまいとするかのように身体を擦じった。

俺は笑って少年の肩を止める。

「盗ったりしねーよ安心しろ。って無理か。ほんじゃ信頼への一歩として、まずは互いの名前から知るところぜ。俺はシーダ。15歳。賞金稼やら護衛あたりを手広くやってる。お前は？」

現在の俺のプロフィールはシーダという名前と職業賞金稼ぎということにしていた。

まあ、本来の俺の名前はシーダ「ヴィトシュワーヌ」ホン「ハウゼン」。

こんなでも一応貴族の末席にいる。

東国のはるか外れの少数民族の血をひく黒髪が美しかったという母は俺が物心つく前に病死してしまった。子宝に恵まれた家系なのと妾腹の為、継ぐべき家も特にはない。

職業はアルギダの国王直属の親衛隊で副隊長をしている。

副隊長と言ってはなんだが、普段はあまり王都にすることはない。隠密任務という名目で旅をしていることがほとんどだ。

よっぽどの事がない限り呼び出しに応じる気もさらさらない不良騎士だが、国王と姫巫女には多少の恩義があるので協力しているうちにいつの間にやら親衛隊副隊長などという肩書をつけられてしまった。

「あつ。俺、明久！」少年は慌ててそう言った。

「アキヒサ？」

「そうそう。アキヒサ！」

少年はそう言うてにっこり微笑む。つられて俺も笑みを浮かべた。

見たことも無い剣を持ち、聞いた事の無い言語を話す黒髪の少年。ひよっとするとひよっとするんじゃないか。

俺は少年を見つめながら僅かに期待の蕾を膨らませた。

それから俺は何も知らなさそうな少年にアルギダについて簡単に説明を始めた。

黒髪ということは母と同じ東国の血を引いているのかもしれない。

しばらく俺が一方的に話してそれをフムフムと相槌を打つ少年。

話している途中で扉を開ける音が聞こえたが、俺の話に夢中になっていた少年にその音は聞こえなかったらしい。

「おい！食事を持ってきたぞ。」

突然の背後からのダミ声に少年は文字通り飛び上がった。

「わぁ！！！」

少年は扉を背にして床に座っている状態だったので後ろからの声に前のめりになる。結果、正面にいた俺に飛び付いてきた。

「アキヒサは怖がりだなあ」

笑って俺は肩を抱きしめ少年を押さえた。

扉のところには、25、6ぐらいのがつちりとした体形の門兵が二人分の食料が入った籠をぶら下げて小屋へと入ってきた。

「飯！やった！」

少年の胃袋が籠から出てきたパンを見たとたんグウ〜と鳴った。

俺と門兵の苦笑に少年は拗ねているらしい。

姫巫女の伝令では、黒髪の少年に十分な食料と寝床の無料提供も伝

えられているはずだがこの少年はそれらも知らないようだ。

門兵は籠からだした1m四方の白い布を床に敷き、そこへ食べ物を広げた。

「さあ、アキヒサ！食べるよ。腹減ってるんだろ。」

俺はそう言っただけで少年にパンを勧める。

「いただきます！」

行儀よく両手を合わせて少年はパンを受け取るとそれを口へと運んだ。

ふとした仕草がどちらかという礼儀を重んじる貴族と被る。

少年は剣を含め、今までそれなりに裕福な暮らしをしていたのかも知れない。

数分後、俺は驚きに目を見張った。

俺の身体よりだいぶ小さいその体に次々と食べ物が入っていく。

食べ方は下品ではないが、そのペースは大男も真つ青なほどだ。

慌てて俺も食べ始める。このままでは全て少年の腹の中に無くなりそうだったからだ。

あれほどあった食料も15分とかからず跡形もなくなり、門兵は布を籠へと戻す。

食休みしている少年は特に苦しそうでもない。満腹にはならなかったのだろうか。

「気持ちいい食べっぷりで驚いた」と洩らした俺に少年は恥ずかしそうに笑った。

「これからお前達を王都ムスカへと連れていく。背の低いお前から先に出る！」

「背が低い言うなっつての！」少年が剥きになって叫ぶ。

どうやら背が低いことを気にしているらしい。

少年の年なら特別低いとも思わないが、そういうことが気になる年齢なのだろう。

「ここから出たい。人を傷付けずに脱出できないか？」

少年はまだ何か言っていたがスルーした。

そろそろ俺も門兵に身分を明かそうと思う。

親衛隊の副隊長がまさか寢床と食料が浮くからという理由でここに保護されていたという噂がたったら嫌だが仕方ない。まあ、実際そうなのだが。

俺は懐からアルギダの身分証を取り出し、門兵にそれを見せた。

驚きに目を見張る門兵が俺に向かって最敬礼しようとするのを止めた。

「私がこの少年を王都まで連れていこう。馬車の準備はできているのか？」

「は、はいっ！すぐにでも出発できます。」

「そうか」

少年は言うとおりに大人しく腰を上げ、門兵に促され扉の外へと向かう。

扉が門兵によって開けられる。

急に明るい場所に出ると視界が遮られて盲点となってしまう事を知る俺は目を瞑り腕で直接の光を遮って徐々に目を慣らす。

「まてっ！！止まれ！！！」

門兵の声に俺は明るさに慣れた視界で前方を見、そして状況を理解した。

眼つぶしにでもあったのか目を押さえて膝をつく門兵の腰から剣を抜き、俺は全速力で走る少年を追った。

想像以上に少年は走るのが速かった。このままでは追いつけないかもしれない。

「ああっー?!」

あと数メートルというところで少年が突然足をもつれさせて転倒した。

急いで態勢を立て直そうと身体を起こした少年の首筋に俺は剣を押し当てる。

「動くな！動いたら首と胴体が離れることになるぞ！」

少年は動きを止めた。

「シーダ！なんで……」

少年は信じられないと剣が首に触れているにも関わらず振り向いて俺の目を見る。

裏切られた…。

その目がそう語っていた。

俺は少年の腕を取って立たせるとそのまま無言で門兵の用意していた馬車へと乗せる。

予想していた抵抗も無く、少年は大人しく馬車に揺られている。気まずい沈黙に俺は居心地の悪いことこの上ない。

馬車の中はそんな状況ではあったが、外は王都への道のりを順調に進む。

明日の朝にはおそらく王都の外れに到着できるだろう。

それまでに俺と少年もなんとかなるとよいのだが……。

個室にて男2人

予期せぬシーダの裏切りに俺はかなりショックを受けていた。とゆーより、意味が分からない。

一緒になって捕まっていたはずなのに。

(明久殿。本当に申し訳ない。初めての任務でこの有様。最強の剣の名が聞いて呆れるとはこの事。)

いやいや、おっちゃんは頑張ってくれたと思うよ。

そんな自己嫌悪しなくても大丈夫だって。

おっちゃんを恨むより自分のへボさに泣けてくるよ。

石とかに躓くならまだしも何にもないところでコケるって・・・。

横断歩道の白線に躓く高齢者と一緒だな。シーダもきつと俺の事すげー運動オンチだと思ってるよ。

言葉が通じるならそのところは是非とも否定したいところ。

(かくなる上は、明久殿。私を鞘から出してはいただけなかい？さすればこやつなど瞬殺してみせようぞ)

おっちゃん、瞬殺しちゃダメだよ。

俺が何も言わないのをおっちゃんは何を勘違いしているのか、完全ネガティブモード。

違うから。

俺が無言を貫いてるのはシーダに対するせめてもの抵抗ですよ。

気持ち的にはガンジーの非暴力・不服従を実践してるカンジ。

俺が言葉を紡いだらきつとシーダは俺に言い訳みたいのしてきそうじゃん？

そしたら俺は情に流されてシーダの裏切りとか許してしまいそうな気がする。

でも、正直なところ俺にはこの異世界アルギダに尽くす義理も義務もないと思うんだ。

これが自分の事じゃなくて小説や他人事だったら、頑張れって思う

けどもさ。

ちよちよいと異世界の勇者になって世界救っちゃっても現状の俺は何も救われない。

職を失い、一人暮らし始めたばかりのアパートからは家賃滞納で追い出され、なぐさめてくれる彼女も現在いない。

ないない尽くし。神もへチマもないとはこの事。

馬車の個室に向かい合って座るシーダに目をやる。

明る日差しの下で見てもやっぱり15歳には見えない。男の色気ムンムンですよ。

肌こそ若いとその落ち着きっぷりは推定25と見た。

地球でも西洋系の人は年齢より大人びて見えることが多いがこの国でもやはりそうなんだろうか。

着痩せして見えるがシーダに飛びついた時、思いのほか鍛えこまれた肉体だったことを思い出す。

15でも剣士なんだなあ。

俺は自分のさして筋肉の付いていない身体にへこむ。

こんなじゃ将来メタボ確定。

一方のシーダは肩幅もすっかりあるから騎士の格好とか似合いそうだ。

もてそうだな。俺が女だったらキヤーキヤー言ってるな。

そんなことを考えてボクッとしていたら気配を察知したシーダとばつちり目が合う。

うっ！目で殺される！

慌てて俺は窓から見える外の景色を見て誤魔化す。

羨ましいからってガン飛ばしたりとかしてないですよ。俺は心の中で自分をフォローしてみる。

(シーダなる者。許すまじ！明久殿をそのような目で見おって！)

あゝ、おっちゃんはまだ拘ってるのか。

いい加減俺もげんなりしてきたから勘弁してくれ。

眠くも無いのに俺は居たたまれなくなつて目を瞑る。

ゆさゆさと俺の身体が揺れる。

ん？なんだなんだ、地震か何かか？

段々その揺れが激しくなる。やべーよ。阪神大震災クラスだったらどうしよう。

もし天井の下敷きとかになってるなら苦しまずに逝けますように。そんな俺の思考に割り込んでくる声。

「アキヒサ！起きろアキヒサ！夕飯食べるだろう？」

夕飯の言葉に俺は一気に現実を取り戻す。

うおおっ！目を開けた俺の視界にドアップでシーダの男前な顔が！慌てて起き上った俺はシーダの顔面に頭突きをかます。

「くっ！」

顔を押しさえ痛みには耐えるシーダ。

いや、ホント考えなしでごめんなさい。俺の方も痛いけどシーダの比ではないはず。

「うわ。ごめんなさい。」

ひたすら平謝りの俺。ジャパニーズ土下座が異世界で通じるのか不明だが、俺は椅子の上に正座して頭を垂れる。

「大丈夫だ。気にするな。油断していた俺が悪い。」

シーダはそう言って俺の頭を持ち上げる。

「それより、アキヒサも頭が痛かったらどう？大丈夫か？」

俺は大丈夫。コクコク頷く。

「そうか、よかった。それじゃ飯にしよう。……その前に腕を出してくれ。」

なんだ？腕？

俺は縛られたままの腕をシーダの前に出した。

シーダは懐から短剣を取り出すと俺を拘束していた縄を切り解いた。あれれ？

訳も分からず自由になった両腕。心なしか固くなった関節をゆつくりと解きほぐす。

「アキヒサ。俺の事も含めてお前にはきちんと話しておきたい。食事の後でいいから話を聞いてほしい。」

シーダの真剣な表情から目を離せず、俺はゆっくりと頷いた。

和解

シーダに促されるまま馬車を降りた俺。

どうやら宿屋の食堂で夕飯らしい。おごってくれるのかな？一文も金を持っていない俺にワリカンとか言わないよな？

それにしても、走って転けて忙しかったから忘れてたけどいい加減靴が欲しい。

恐る恐る足裏を見ると…ひい！

な、何にもなつてない！？

俺っていつからこんな超人になったんだ？

流石にホント今更なんだけど、おっちゃんを持つてる限り俺は傷ひとつつかない。

思えば小屋に転がされた時も痛くなかったし、逃げて転けた時も擦り傷ひとつない。

あゝって事はだ。シーダに剣付きつけられた時もシカトして逃げればよかつたんじゃん！

うわ、バカだ俺。ヒヨリまくりだ。

落ち込んでうつ向く俺を気遣うシーダ。

ちげーよ。別にぶつかつた頭が痛いわけじゃないんだって。

シーダの優しさと勘違いにホロリ。

そうだよ。こんなヤツに俺を裏切ったりできるわけないじゃん。

きつと理由があるんだ。

俺は気持ちを切り替える事にする。

宿屋に入ると中は思っていたより広くて盛況なようだ。

空いてるテーブルは僅かしかない。

シーダは俺を空いているテーブルのひとつへ案内する。

「さ、座ってくれ」

椅子を引いてくれちゃったりする。

俺男だし、年上なんだけど〜と思うたけどこの国での作法を知らない俺は促されるままその椅子に座った。

向かい合う席にシーダは座り、ウェイトレスの女の子に何か注文する。

さっき食べたあのパンはあるんだろうか？

あれまた食べたいな〜と考えていた俺の心を読んだようにシーダは言う。

「先程のパンはここアルギダの主食なんだ。気に入ってたようだったからまた頼んだがよかったか？」

ご機嫌になつて俺は頷く。テレパシーが届いたな。

「さつきぐらいの量より多く頼んだが食べれるか？」 頷く俺。

先程からシーダはしゃべれない俺に対して質問形式に会話を進める。これなら俺は頷くか首を横に振るかすればいい。

「おまたせしました！」 ウェイトレスが飲み物を持って戻ってきた。シーダにはアルコールっぽいものが、俺には明らかに甘そうなジュースのようなものが置かれる。

ずっと気になつていたのだが、シーダの中で俺は一体いくつだと思われているのだろうか。

年上に思われていない事は分かる。

しかしなあ。俺だつてアルコール飲みたいし。

こう見えてザルな俺はどんなに度数の高い酒でも飲めるはず。

俺はシーダに教えられたままにグラスを持ち上げないで乾杯のような仕草をしてジュースに口をつけた。

やはり甘い。アルコールゼロだ。

俺はシーダの持つグラスを指さし、その指で自分を指した。それから飲むジュースチャーをしてみた。「ん？これが飲みたいのか？酒だぞ？」 頷く俺。

シーダは持っていたグラスを俺に渡す。

お酒だお酒だ嬉しいな〜思わず自作の歌うたっちゃうぜい！
もちろん心の中でだけ。

俺はグラスに口をつけた。

「焼酎だ！ヤバイよ！異世界でまさか焼酎に出逢えるなんて！」

シーダに意味は分からないだろうけど俺が感激してる事は分かったらしい。

「頼むか？」即、頷く。

苦笑混じりにシーダはウェイトレスを呼び焼酎を頼んでくれる。

それからしばらく、ウェイトレスは俺達の席と厨房とを何往復もすることとなった。

「はあ〜食った食った！」

流石に俺でももういいやと思いい顔を上げる。

と、集中しまくっていた俺の目が驚愕に見開かれる。

だってさ、20人ぐらいの人々に俺ら囲まれてんだよ？！

何事ですか？

「にいちゃん、細っこい体でよく食うなあ！」

俺の隣に立っていた赤ら顔のおっさんが言う。

確かに目の前に積まれた空皿のタワーとグラスで頼むのが面倒になってボトルで頼むことにした焼酎の空ビンが5本ばかり。

1ビンでグラス5、6杯分らしいから単純計算で25杯以上飲んで
いることになる。

流石にオゴってもらおう身なのにやりすぎたかも。

優しいシーダと言えどもこれはご立腹か？

恐る恐る俺はシーダを見る。

そして俺の目に映るのは蕩けるように甘い笑みを浮かべているシーダの姿だった。

「俺はさっきので慣れたけど。まあ、酒までいけるクチだとは思っていなかったが。」
ハイ。すみマセン。

ひとつ屋根の下で

快く奢ってくれたシーダに俺はペコペコと頭を下げた。

「こつ見えて、金は持つてるから気にしなくていいさ。」
男前に男前な発言をされてどーすりゃいいんだ俺？

シーダと俺は宿屋の一室に泊まるらしい。

お！簡素なただけどなかなか居心地の良さそうな部屋だ。

広さも10畳くらいあるしベッドも2つ。二人で泊まるには十分すぎる程。

従者らしき人々が部屋の前まで荷物を持ってきてくれた。

シーダって意外と荷物持ちなんだな。

俺なんておっちゃんの剣以外に荷物らしき物も無し。着のみ着のまま。

そろそろ臭いも気になる。

シーダは従者に礼を言って大型トランクほどの大きさのその荷物を軽々と部屋へ運び込む。

「とりあえず湯あみでもしてきたらどうだ？着替えもあるぞ。」

そう言っつて箱を開けると中からシンプルな白い浴衣もどきを出して俺に手渡す。

「ありがとう。」

言葉は通じずとも感謝の言葉は言っておくべきだよな。

シーダはそんな俺の意を汲み取って笑みを浮かべ頷く。

シーダが指した方向に俺はおっちゃん片手にトコトコ向かう。

木の扉を開けるとそこにあるのは40cm四方の浴槽？らしき物が2つと桶2つ。

端にはタオルほど吸水性はよくなさそうな布が2枚。

日本のように湯船に浸かる習慣はないらしい。

きつとあの浴槽に入ってるお湯で体を洗うのだと思う。

俺は扉の外の壁におっちゃんを立て掛けていそいと服を脱ぎ浴槽に向かった。

そして俺は桶を浴槽に入れ：「あちっ！ば、バカじゃねーか。なんだよこの熱さ！！」叫んだ！

「どうした？！…失礼、入るぞ！」

叫びを聞いたシーダが慌てて俺の元へ。

俺の火傷確実な手を見て状況を悟ったシーダは俺の手首を掴んでもうひとつある浴槽に勢いよく入れた。

「冷たっ！」

今度はさっきの逆でめちやくちや冷たい。

冷たいを通りこして痛いよ！

涙目になりながら俺はシーダになされるがまま浴槽に手を突っ込み続けた。

火傷は冷やせつてのは日本でも常識だけでもっ！これはどうかと思う。火傷が良くなる前に凍傷になるって！

もう何なんだよ！

異世界に来てからこっちロクな目にあっていない。

手の感覚も無くなり暫くしてようやくシーダが俺の手を浴槽から出す。

赤くなった手から先に感覚はなかなか戻らない。

「痛い思いをさせてしまったな。」シーダはそう言って頬を伝う俺の涙を人差し指の背で拭う。

いつの間にやら泣いていたらしい。

それを見てシーダは何を思ったのか俺を床に座らせると器用に桶を交互の浴槽に入れて適度な温度のお湯を作る。

端にあるタオルもどきを1枚取るとお湯を浸けて俺の体を洗い始めた。

なっ！ちよっ、ちよっと待ってくれっ！

只でさえシーダに貧相な俺のマップパを見られてるとゆーのに！

更にこんな羞恥プレイっ！
勘弁してくれ！
嫌々する俺を巧みに抑えシーダは黙々と作業をこなす。

結果として。

動揺している俺を無視してしつかり洗ってくれちゃいましたよ。
俺のムスコ共々ね。全身洗いあげられた上、お姫様抱っこで運ばれちゃいました。

手がヒリヒリしたまま巧く紐も結べない俺は着替えもやってもらって更には心配だからと同じベッドに今寝ております。
もうヤダ。

穴があつたら入りたい。

何が悲しくてこんな目に遭うんだよ！

シーダが親切心からやってくれたのは分かっている。

だから文句を言うのは筋違いだとゆー事も重々承知している。

だからこそ！

どうしたらいい？

この俺の男としてのプライドは！

目にかかる俺の前髪をシーダがそつと指で掬う。

なんかこれってさ……。思いたくない想像に俺は全身見事な鳥肌をたてた。

うわ〜。

俺が女だった場合さ、この状態だけ見た日には情事の後みたいじゃねえ？

自分で自分の思考に撃沈な俺。

「大丈夫か？」

遠慮がちなシーダの声に頷く。

「今から少し話してもいいか？」

再び肯定。

俺だつてこのままつやむやなまま王都に連れていかれたくはない。ホントは布団を頭からかぶつてそのまま寝てしまいたいが、両手が巧く使えない俺はシーダに頼んでベッドから起きて座る。

「まずは俺の自己紹介を改めてやらせてくれ。俺の名はシーダ。ウイトシユワーヌ。ホン。ハウゼン。アルギダの国王直属親衛隊の副隊長をしている。」

あゝなるほど。

シーダは元々アルギダ側の人間だったのか。

つてゆーか、15で!?

アルギダには未成年つて概念無いのか?

日本じゃ選挙権すら無いですよ?

俺はシーダがアルギダ側の人間だったことより、日本とあまりに違う年齢基準に驚きを隠せない。

よっぽど優秀な人材がないのか、他人事ながらアルギダつて国の状況を憂いてしまう。

日本みたいに定年とかあつて団塊世代のベテランが一気に辞めてしまつて産業技術の空洞化みたいな事が起きたとか?

15つていつたらさゝ、思春期とかあつたりしてまず自分の周りの悩みが最優先。

国の事で頭悩ますなんてしねーよ?

それをシーダは15にして肩書付いてるつー事はきつともつと若い頃から気苦労が絶えない生活をしているのだから。

俺はシーダの肩を赤くなつた手でポンポンと軽く叩いた。

「ハゲないように気をつけてな。」

怪訝な表情のシーダ。

うんうん。

やつぱ俺としてはシーダの頭が若くしてハゲるのを見るのは嫌だ。

ちゃんと頭皮マッサージとかした方がいいぞ。

そーだ、手が治つたら俺がやってやるぞ。

「アキヒサが連れられてきた時、何であそこにいたかってゆーとだな、姫巫女の伝令つてのがアルギダ国内全ての土地に出てるんだがその内容の中に黒髪を持つ18未満の者に乞われたら無償で寝床と食料を提供しろつてのがあってな。正直、タダなら利用しない手はないだろうと…アキヒサだって暴れたりしなければ丁寧な扱いを受けたはずなんだ…」

あゝそりゃ、縛られてんの俺だけだわ。

知ってたら俺だって無駄なカロリー消費しないですんだのにな。

アルギダ全土が姫巫女のホントかどうかも怪しい予言みたいのにごい必死なんだつてことが分かる。

俺だつてそうだ。

何なのかも知らないチビッコのなくし物を探している。

ハタから見たら何でそんな必死なの？とか突っ込まれそう。

なんかシーダに対しても割とすんなり納得してしまった。

シーダは格好よくて頭もきつとよくて、地位や名誉もある貴族サマで親衛隊副隊長サマでもある。

でも貴族つて割に親しみやすくって優しい。

俺の想像の中の貴族サマと違う。

それでいいじゃん。

色々俺を助けてくれた男がピンチなんだ俺で良ければ手を貸して当たり前。

国とか関係ない。

それに俺は今モーレッツに眠い！

ウツラウツラ揺れている。

隣でシーダがまだ何か言ってるけど…。

無理！俺は寝る！

そのままの姿勢であつとゆー間に深い眠りへと落ちていく。

コツンとシーダに寄り掛かる。

それに気付いたシーダはヤレヤレといった呆れ顔をした後、愛おしそうに俺の体をベッドへ横たえて掛け布団をかけ子供にするように

おでこと両頬にキスをした。

その様子を後から一部始終を見ていたおっちゃんから聞かされた時、俺は憤死しそうになった！。

ひとつ屋根の下で（後書き）

現在地。

モデルルームで言うところの玄関までやってきました。
次から王都編。

王都到着

遂に着いたよ王都ムスカ！

馬車の中でずっと座っていた為か腰痛い。

エコノミー症候群にも要注意だ。

この世界には低反発クッションとかないから振動が骨に響くっつーか、とにかく疲れた。

馬車から外を確認する。

季節は春。

新緑が目眩しい。

昨夜の宿屋から俺の格好もこちら仕様へと様変わり。

着色してない自然な風合いのコットンパンツとTシャツ。

足は古代ギリシヤ人風なサンダル。

ウエストはゴムがないので紐で縛る形となっている。

丈は大人用しかないとかで折りまくり。

そーなんだよ、俺が心配していた身長の問題を解決せねば。

途中俺が出会った人達を想いおこす。

宿屋には俺と同じくらいの身長だったのはウエイトレスの女の子ぐらいしかいなかった。

まだ中心地ではないらしいけど、外を歩く人に目をやる。

馬車の中からは見下ろす為背がどれくらいか分かりにくい。

そんな俺を向かいあって座るシーダが何か言いたそうに見つめている。

言いたいことがあるなら言えばいいのに。

昨夜俺に話したシーダ。

途中でうつかり寝てしまったけどああやってしっかりと会話しようとしてくれるその姿勢が嬉しい。

だから俺はシーダに少しは協力してやろうという気になったのだ。

ここにいる間、少しでも互いの事を知れたらいいなと思う。

俺は仕方なくシーダの膝を軽く叩いて呼ぶ。

俺の両手は朝、宿の主人から薬をもらって包帯でぐるぐるになっている。

泣きながら冷やした成果か痛みはほとんどなくておっちゃんも握れるようになった。

「ん？どうした？喉でも渴いたか？」

首を横に振る。

俺はシーダを指してからその手を自分の胸に持っていくそして自分を指す。

伝わるかな？

お前の胸の内を話してみろってね。

「そうだな。アキヒサに直接訊いたらいいんだな。」

うんうん。

またもやテレパシー伝わったよ。

「昨日怪我をした時まで服に隠れて知らなかったんだが。アキヒサが左腕につけてる腕輪。それと同じ物を俺は見たことがある気がしてな。さっきから考えていたが結局分からない。アキヒサは誰からもらったのか？」

まあ、もらったかと訊かれればもらったな。

俺は頷く。

但しそいつは調停者とかゆうー神様みたいなヤツでおまけに見た目すっげー可愛いくせにおっちゃんを剣にしてくれちゃったりとやることは結構ひどいチビッコなんだよ。

「そうか。」

言葉を話せない俺に誰からとも訊けずシーダはまた思考の淵にいつてしまう。

何がそんなに気になるのか知らないがそんな大層な腕輪なのかこれ？俺もその存在を忘れかけていたくらいうんともすんとも腕輪は変化が無い。

探し物の近くに來たら教えてくれるんだっけ？

とゆーことはあの町に目的の物は無かったのだろうか。

「あゝ！あれって城じゃん！！」

徐々に人の数が増えてきたな〜なんて思いながら外を眺めていた俺は街より少し高台にあるであろう城の屋根の先っちょを目撃した。なにせ建物がやたら建っているので障害となって見えてもすぐ死角に入ってしまう。

「あの尖っているのが城の屋根にあたる。ここから見えてるのは西の塔じゃないかな。」

シーダが解説してくれる。

おお！

そんなにいくつも塔があるのか。西洋のお城って感じなんだな〜。

よくよく考えてみれば俺って生キヤツスル初めて見るよ。

某ねずみ王国の青い屋根の城なら見たことあるけど、やっぱり本物は規模が段違い！

とにかくでかい！

さっきからちらちら見えるのに近付いてる気がしない。

俺はシーダに目をやる。

さっきふと思いついた悪戯。

気配に気づいたシーダと見つめあった俺は悪代官みたいな笑みを浮かべる。

不吉な笑みにシーダの端正な顔が引き攣っている。

ふっ、ふっ、ふっ。

シーダもまとめて驚くがいいさ。

さあ、王様でも巫女でもかかってこい！

王都到着（後書き）

5000アクセス突破ありがとうございます。

王都にて

暇だ。

ひたすら暇。

(明久殿。何やらコソコソどうした?)

「お！こんな小さくても聞こえるのか」

馬車に長いこと揺られていると流石に外を見るのも飽きてきて俺はおっちゃんどれくらいの声の大きさでしゃべれば会話できるのか調べ始めたところ。

窓の淵に肘を付き心なし下を向いて口元を隠す。

馬車は走ってる間それなりに音がするからシーダですら俺がしゃべっている事に気がつかない。

結果、会話は声さえ出せばヒソヒソ話程度の声でも問題ないようだ。

「おっちゃんにお願いがあつてさー」

(いいぞ。)

「いや、まだ何も言つてないし。」

気の早いおっちゃんだ。

(また脱出はしないのか？今度こそ無事逃がしてみせるぞ?)

「なあ、この近くで剣術大会があるらしいよ」

(ほほう。)

「おっちゃんも行つてみたかないか？」

(是非！…だが明久殿はこれから城に用があるので?)

実は昨夜の夕飯で俺の隣に立って声をかけてきたおっさんとたまたま朝、共同トイレの帰り道にばったり出くわしたのだ。

そんな時、俺がムスカに行くつて言ったらそれなら今日街の闘技場で剣術大会があると言つていたのをついさっき思い出した俺は生の剣術をこの目で見たくなつてしまった。

シーダに協力するとしたら早く帰れそうにないのだから俺としては異世界をエンジョイしたい。

アルギダにホームステイな気分でした方がポジティブにいられそうだし。

さつきから外を熱心に見ていたのは闘技場の場所と城までの距離と方角を知っておきたかったからだ。でもそんな俺の考えは杞憂だった。

ばかりでかい闘技場を中心にして碁盤目状に伸びている街の造り。他の建物より頭ひとつ分飛び抜けている城。

これらは割と近い位置にあって、走れば15分くらいで辿り着きそうだ。

「もし俺が18歳未満なら急いで行かないとだけどさー、俺の場合には条件にも当てはまらない誤解なわけだ。」

（まあ、むこうはそうは思っていないだろうが。）

「そこで！折角来た異世界。観光しなくてどーするよ？」

（ではここから脱出するのだな！？）

おっちゃん嬉しそうだな。

そう。
俺が考えているのはこの走っている馬車から外に飛び出して闘技場で大会見て、ぶらっと街中を散策して城でシーダと合流プラン。

ちい散歩ならぬ、きど散歩だ！

さてさて、この馬車からの脱出方法を考えていた俺は、おっちゃんを持っていてる時には怪我もおろか痛みもなく。おっちゃんを離している時は普通に怪我も痛みもあるがそれもおっちゃんを持てば達どころに治るとゆーおっちゃんの特長能力に目をつけてみた。

現に昨夜の火傷は朝おっちゃんを持ってから今では痛みも何も感じられない。

包帯の下にはきつと元通りになった手があるはずだ。

とゆー事は！

おっちゃんと一緒になら、子供の頃テレビで観た戦隊モノばりのアク

シヨンができちゃうわけですよ！

これはぜひ一度ためしたい！

「おっちゃん、鞘から出さなくてもこのドア壊せたりしないか？」

俺の左手にある馬車から降り降りするドアを目線だけ向ける。

（こんなドアのひとつやふたつ楽勝に壊せるぞ！）

やった。

じゃあ後はタイミングだな。

「俺がせーのって言ったら始めるよ〜。」

（了解した！）

まずは一瞬でもシーダの注意を逸らそう。

俺は顔を上げるとドアと反対についてる窓を指さす。

「あーっっ！！！」

あらん限りに叫ぶ！

思わず窓に目をやるシーダ。

俺はおっちゃんを掴み…「せーの！」おもいつきりドアを叩いた！

ドコーンッ！

わお！

ドアは外からかけられていた門もろともこっぴは微塵！

俺としては門外してくれるくらいの威力でよかったんだけどまあい

いや。

「とうっ！」

俺の中ではレッドが敵の前に現れる時のイメージ。

街中とはいえ結構なスピードで走る馬車から俺は飛び出した！

そのままゴロゴロと受け身をとって転がり、ダッシュ！

今度は転んでなどやるものか！

案の定、痛くもないし、目もバッチリ開いてるから転んだりするこ

ともなく、俺はそのまま近くの路地裏へ。

碁盤目状なので目的地さえ見失わなければ辿り着けるはず！

「やったー！おっちゃんありがとう！」

（私も明久殿の役にたてて嬉しいぞー！）

俺はおっちゃん片手に闘技場までひたすら走っていった。

そしてそしてー！。

闘技場にやっとこ着いた。

はあはあ息が切れるが徐々にこんな長く走ったもんだから軽いランナーズハイ状態。

まだまだ何処までも走っていけそうだ。

さーて、どこから入ればいいのかな？

おっ！

人混みが見える。あそこに行ってみるか。

俺は人混みに近づいていった。

(盛況であるな。…明久殿あちらの列は空いてるぞ。)

「ホントだ。あっちの列に並ぼう。」

混んでる列から10mぐらい離れている空いてるその列に俺は並んだ。

列は割とスムーズに進み俺とおっちゃんは狭い通路を人の波に流されるように進んで行く。

しばらく進むと広々とした空間に出た。

あら？

あれれ？

目の前に広がる風景に俺の頭上にはハテナが飛ぶ。

と、そこへ係員らしき人物が現れメガホン片手に叫ぶ。

「予選を勝ち抜いてこられた剣士の皆様！人数が揃いましたので、これより本選を開始します！」

はあ？

何言ってくれちゃってんの？

もしかして…いや、もしかしてないか。

どうやら俺は見る方ではなく参加する方の列に並んでしまったらしい。

ガーン！

ホント、病的なほどツイてないんですけど！

こうして俺は、アルギダの剣術大会になぜだか参加するハメになった！。

ちい散歩 目的地の駅の二つ前で降りてウロウロ道草をくう某テレビ局で放送している旅番組。

王都にて（後書き）

毎度ありがとうございます。

またのご来訪心よりお待ちしております。

王都にて剣術大会

そーいえば昔からそーだった。
俺はふと思いだす。

小学生の頃から通知表でも毎回のように『木戸くんはもう少し落ち着いて行動しましょう』だとか書かれていたっけな。

あん時のアドバイスを俺は何で謙虚な気持ちで受け入れなかったんだ。

今の俺はマルク。

別に改名したわけじゃない。

なんか出場者で俺に近い特徴を持つてるヤツの名前らしい。

言葉の通じない俺に向かって係員が、武器長剣で年齢の若い男だからこいつだろうというものっすごくいい加減な話をしているのを俺は今だ実感のないまま聞いていた。

マルクってヤツは寝坊でもしたのかこの会場にいないらしい。

くそー、恨むぞマルク！

「素晴らしい剣を持つているな」

係員にそう言われ曖昧な笑顔でごまかし俺は促されるままクジをひく。

俺が引いたものには3の数字。

最後から2番目に引いたのでほとんどの参加者は既に対戦カードを決定していた。

空いているのはあと残り2つ。

しかも両極端な感じで一人は金髪ロングの冷たい印象を受ける細身な男。

武器の剣もフェンシングみたいな細いやつを持っている。
かたやもう一人は短髪で金髪、筋肉ムキムキな身長2mを軽く越える大男。

普通の剣を持っているのにちっちゃく感じる。

顔にはたっぷりなヒゲを蓄え、それだけならなんか筋肉バカなやられフラグ立ちまくりだが男の雰囲気はとことんストイック。

やたら礼儀正しいし目を見てもバカじゃないなって感じの知性が見え隠れしている。

うわ。俺こいつとだけは戦いたくないなあ。

なんとなくだけどそう思う。

第六感つてやつ。

平和ボケした日本人の本能なんてあてにはならないけどさ。

なのにまさか！

4のところに書いてあるのは俺の見間違いでなければこのヒゲの名前。

広場に掲げられてるばかりかいトーナメント表にはマルクという名前とガルってやつの名前が仲良く隣あっている。

周りからは軽いどよめき。

いやいやいや。

無理でしょう。

例えおっちゃんがすごい強かろうとそれを持つ俺は素人も素人、包丁すら満足に使えないザ・キングオブシロウトなんだよ！

おっちゃんを持ってれば痛くないだけまだマシだけど。

だからこそ何回も斬られたらイヤじゃなか！

うん。不戦敗決定。

(あやつが私達の相手か。一気に叩きのめしてみせようぞ！)

あー。おっちゃんそんな張り切らないでクダサイ。

ガルという名のその男は俺の前にやってくるとその大きな左手を差し出してきた。

握手か？

恐る恐る手をだす。

ぎゅっ！

どんだけ握力自慢してくるんだ！バカ！

手が潰れるっつーの！

「厳しい予選を勝ち抜いてここにいるという事はそなたの見た目に侮ってはならぬという証拠。お互い正々堂々剣を交えようぞ！」

いや、交じるどころかハナシにならないです！

侮っても余裕で勝てますから！

俺は心の中で叫ぶ。

大会は盛大な盛り上がりを見せ、一回戦の出場者が観衆のいる大広場に出ると割れんばかりの大歓声が建物全体を包んだ。

すげー！

熱気ムンムン！

歓声が骨の髄まで響く。

偉そうな係員が大会の説明をしていく。

まいったと言うか、審判が止めに入った時点で勝敗が決まるそうだ。

殺しは禁止らしく、斬った人間共に敗者となる。

鎧や盾などの防具は禁止。

純粹に剣の勝負なんだって。

で、優勝した剣士には国王様からありがたいお言葉と王国の聖騎士団への就職斡旋、それと賞金がもらえる。

周りの話してるのをチラ聞きしたところによると賞金自体は高額というわけではないらしい。

但し、聖騎士団に就職すると月々の給料が一般市民の5倍ぐらいら

しい。

日本で例えるなら月収20万が100万になるようなものだ。そりゃ真剣になるわな。

そーいやシーダは親衛隊の副隊長とか言ってたっけ。

聖騎士団とどっちが給料高いんだろう。

と俺が思考に沈んでいると再び大歓声。

遂に試合が始まるらしい。

控え室にいたので戦ってる姿は見れない。

けど会場の熱気と歓声だけはガンガン感じられる。

俺は不戦敗になる気満々なので恐怖に震えることもない。

「おっちゃんには悪いけど開始早々にギブアップするから俺」

一応おっちゃんにも伝えておかないとな。

（そうなのか。残念だが仕方ない。…だが明久殿。どーやってギブアップするのだ？）

何言ってるんだよ。

「それはこーやって両手を挙げてだなあ……」

（その場合、武器を地に置かねば降参にはならぬぞ！そこを斬られても私は何もできぬ。）

あ。

固まる俺。

歓声が遠く響く。

王都にて剣術大会（後書き）

8000HT突破ありがとうございます。

これからも志低くコツコツ書いていきます。

小心なので感想やらクレームはいりません。

初めて書いた小説とゆるーくことで目を細めて細かい部分はモザイク仕様
様でお願いします。

続 王都にて剣術大会

一体何分たつたのか。

長くも短くも感じていた時が流れ、一回戦が終わった。戻ってくる勝者が俺の前を通り過ぎてゆく。

その体には無数の傷跡。

ひい。血が出てるよつ。

ちよつとそこで転んじゃいましたレベルでない血がつ！

20代後半くらいのヤツがそんな血を出してる場面なんて今までお目にかかったことのない俺は今さらながら足が震える。

やっぱ死なないにしてもそれなりに怪我はするんだな。

どーすりやいいんだ？

おっちゃんの指摘を受けてから俺は早くもビビリまくり。

だって痛いのは嫌だ。

こーなつたらできるだけ避けて避けて避けまくって何とか負けるしかない。

「おっちゃん。足がすげー震える。」

（おお。それは武者震いというものだな）

ちがーう！

大きく意味違うからっ！

「とにかく俺は怪我したり痛いのは嫌なの！負けていいからおっちゃん頼むよー！」

安全第一だよ。

（わかった。では、試合が始まったらまず私を鞘から抜くのだ。）

「おう。鞘でも何でも抜くよ。」

（そして私に命令を！後はただ力を抜いて私に全てまかせればよい。）

本当だろうか？
もうおっちゃんに身も心も預けちゃうぞ！

「二回戦の出場者は広場入口に集合してください！」

係員の無慈悲な叫びに俺は重い足を無理矢理動かす。
入口にはさっきのヒゲが先に待っていた。

もう俺の中でこいつはヒゲ決定！

名前なんて覚えてやるもんか！

「さあ、行きますよ」

係員に誘導されて俺は広場へと続く通路をゆっくり歩いた。

暗い通路を抜けた俺に大歓声が降り注ぐ。

うわっ！なんじゃこりゃー！

米粒みたいに見える観衆の多さに度肝を抜かれる。

ここはアリーナか日本武道館か！？

一体何万人いるんだよ！

係員に促されるまま広場中央へ立つ俺に向かい合ってヒゲが立つ。

「静粛に！」

審判の人が片手を挙げるとそれまでの歓声が嘘のように静まる。

「ルールは簡単、まいったというか生命の危機があると見なした場合我々が止めに入る。広場の広さを考慮し審判は全員で10人とする。」

審判は騎士の人達がやるらしい。

皆、帯剣していて体つきも逞しい。

ぷよぷよの脂肪を身に纏っているのはどーみても俺だけ。

「只今より第二回戦を開始する。始め！！！」

合図と同時に再びの大歓声！

そして開始の声と共にヒゲが剣を一閃する。

「ひいつ！」

へっぴり腰で辛うじて避けた俺。

無理無理！こんなの毎回避けられるかってのっ！

急ぎヒゲと距離を開けると俺はおっちゃんを持ち手と鞘を掴んだ。

2つを繋ぐ鎖は鞘に幾重にも巻かれたままの状態だ。

「おっちゃん頼むよ！抜ける！」

こんなに切実に何かを祈ったことなどあっただろうか。

そしてそんな俺の願いに答えるように鎖がカキンっという音をたてて千切れた。

ヒゲが距離を詰めてくる。

先手必勝とばかりに俺に向かって剣を振り上げる。

「なにっ!?!」

驚嘆に瞳孔を広げるヒゲ。

ヒゲの中で力強いその剣を俺が正面から受け止めるといっのは予想の範囲外だったのだろう。

「おっちゃん命令だ！ヒゲを殺さずに勝て！」

(了解した！後は私にまかせろ！)

おっちゃんの声が聞こえた途端、俺の意識は霞がかったようになる。ヒゲは信じられない思いを打ち消すように俺に攻撃をしかけてくる。今度は先程のような直線的な動きではなく、横なぎの攻撃も混ぜての連打だ。

それを俺は最少の動きで避け、変則のものは剣の刃先を使って軌道をずらす。

それはもう演舞とかみたいに計算されつくした動き。

歓声が徐々に少なくなる。

剣術ではなく剣舞のように2つの剣と二人の男が広場を所狭しと動き回る。

ヒゲの額に汗が滲み始める。

一方のおっちゃんに乗り移られた俺は、汗どころか息ひとつ切らしおらず、余裕しゃくしゃくとしている。

どちらも一向に引かない戦いは観客にとっても予想外だったらしい。ふと気づけば観客席から俺へのコールが雨のように降ってくる。とその時、ヒゲの手元が狂ったか何かして俺に剣を弾かれてしまう。今俺の攻撃を避けても取りにはいけなそうな距離。

ヒゲは観念したらしく俺から1m程距離をとった後両手を挙げた。

「まいった。俺の負けだ。」

審判が試合終了の合図をする。

勝った。

夢から覚めたように俺の意識がクリアになる。

途端、力が抜けてその場にへたりこむ。

あわわわ。

おっちゃん本当に勝っちゃったよ。

ヒゲが近寄ってきて腰を抜かして立てない俺に手を出してくる。

俺はその手をとってはみたけれど、足に力が入らないので立てない。

「どうした？立てないのか？」

ヒゲが怪訝な顔できいてくる。

コクコク頷く。

するとヒゲは俺をお姫様だっこで何なく持ち上げた。

慌てふためく俺に笑顔を見せてヒゲは揺れないようにゆっくりと落ちていく鞆まで拾ってそのまま元来た控えの広場まで俺を運んでくれた。

俺は顔を真っ赤にしてそれでも振り落とされないようにおっちゃんを片手で持ちつつヒゲの首に掴まった。

なんかヒゲ、いいヤツじゃん！

ヒゲヒゲ言って悪かったな〜。

俺は名前を思い出せないヒゲに向かって心の中で謝った。

「さんきゅー！ありがとうございます！」

控えの広場にある椅子に下ろされた俺は笑顔で礼を言う。言葉は通じないけど気持ちは通じたらしく笑顔で頷く。

こうして見ると結構愛嬌のある顔してるじゃん。

「アキヒサ！！」

緊張から解放された俺にむかって誰かの叫びが聞こえた。

ん？誰だ？

振り返った俺の目には仁王立ちで怒りのオーラを隠そうともしないシーダの姿が映る。

あ、ヤベ。

マジで目が怖いよ。

ソロソリ視線を外そうとする俺にシーダの氷より冷たい声が。

「どうしてあんな事をした。理由を聞かせてもらおうか。」

ひい〜！思わず涙目。

「シーダ！お前、ムスカに戻っていたのか！」

切羽詰まった俺達の間をヒゲが遮る。

お！二人は知り合いなのか！

シーダが今さらながら俺の横にいたヒゲに気づいて驚く。

「隊長！？あんななんでこんなトコにいるんだよ。」

いいっー！？

今、隊長とか言いませんでしたか？

このヒゲがシーダの上司なのか？

ってかヤバイ。

その上司に俺勝っちゃいましたけど……。

続 王都にて剣術大会（後書き）

たまたまうっかりここをクリックしてくださった皆様ありがとうございます。

お気に入り登録して下さっている方。神サマです！

不況の波の如く怒涛のレポートとテストに飲み込まれています（ -

！ - ; ）

そんなワケで次回更新は11月13日となっております。

観光散歩道

「改めて自己紹介といこう。私は親衛隊隊長をやっているガルリアーニニウイクスラーニホンニスカルフイという。今でこそ隊長に副隊長なんて偉そうな肩書が付いているが、元々シーダとは親子みたいなもんでな。それにしても、マルク殿は強いなあ。」

ヒゲ改めガルさんはガハハって感じに俺の背中をバシバシ叩いた。いたたっ！

取り扱い注意をお願いします。

「マルク？」

シーダが首をひねっている中、俺はガルさんに「マルク」首を横に振り、「アキヒサ」縦に頷く。

分かってくれたかな？

「アキヒサが正しい名前か？」

そうそう。

それからガルさんはあれよこれよと実に紳士な対応で俺に接してくれた。

そして今俺達は城まであとわずかでいける距離ということ仲良く3人歩いている。

その後の試合はどうなったかという俺は棄権とゆるー事にしてもらった。

観客からはえらい大ブーイング！

しまいにはライブのアンコールじゃないんだからっつーくらいのマ

ルクコールとかされてマジビツクリ！
でもこれ以上は俺が無理！
あんな試合続けたら胃に穴があくっつーの。
しかもシーダの姿を見たらじわじわと色々な感情が溢れてしまっ
てさっきまでとても戦える状態じゃなかった。

今思い出すと顔から湯気でも出そうなくらい恥ずかしい。
とゆーのも、控えの広場でシーダがこのまま続けるのかって訊くか
ら、先程の試合を思い出した俺は涙と鼻水を垂れ流し、シーダの服
にしがみつきぶんぶん首を横に振るといふ醜態をさらしてしまった
のだ。

その様子はまるでウレシヨンしちゃう犬と一緒に。
俺は人間なのでちゃんと所定の場所でするけども、尿の代わりに涙
と鼻水が出てきたよ！みたいなの。
うわっ。

シーダがスツゲ嫌そうな顔してる。
ここで機嫌を損ねてまたあの冷たい目で見られるのは嫌だ。
とまれ〜とまれ〜。

念じてみてもダメだ止まらない。
シーダの服がビチャビチャになる前になんとかしなくては！
もう既にシーダの上着前面は俺が抱きついてわんわんした為にシミ
ができているんだがこれ以上は断固阻止！
止まらない水分。

焦る俺。

と、そんな時。

「アキヒサ。これで拭きなさい」

横から差し出されたのはガルさんのハンカチ。

さすがボス！

救いの神ですつ。

こんな時でもハンカチ携帯してるなんて素晴らしすぎる。

俺はガルさんからハンカチを受けとると涙を拭き、鼻をかむ。

ボス、後で洗って返すよ。

「そいつは返さなくていいからな」

えっ！ボスまで俺の思考を読めるのか！？

ズビズビ鼻をすすりつつ、俺達3人は城までの道のりを歩き始めた。

…という経緯があった。

「そんなにすごかったのか？」

シードとガルさんが会話している。

俺はシードに腕を引っ張られながら街の風景をキョロキョロと見廻し街見物中。

「まあ、私が負けを宣言してしまう程度にな。」

実際の俺が闘ったわけじゃないけどやっぱ隊長強いのか。

「それはそれは。」

「お前も一度手合わせしてみるといい。少しでも隙を見せると的確に突いてくる。こっちは打ち合いで息を切らしているのにアキヒサは息も切れなければ隙も全くない。剣技の見本のような。優勝者以外の有望株を探して参加してみたがまさか初戦で敗退するとは思ってもみなかった。」

シードが信じられないという風に見ていたことにも気づかず、俺は石畳の街並み、モロ西洋って雰囲気観光気分を満喫していた。そして、シードとガルさんが何か話している間、おっちゃんが声を

かけてきた。

（明久殿。久々の真剣勝負楽しかった。）

ああ、それは良かった。

俺もおっちゃんがいて助かったよ。

じゃなきや無理だつて！

「なあなあ、ガルさんつて強かった？」

例によつて下を向きひそひそ話。

（まあ、真の実力が分かるほど打ち合っていないが強い部類ではないかと思うが…）

「が？」

（明久殿にひつついているあやつの方が強い。）

おっちゃんはシーダと戦ったことないのにそんな事を言う。

「へえ！隊長より強いんだ？」

（組織のトップは必ずしも個人技に飛び抜けている必要はないぞ。

ガルとか申す者の方が人をまとめる力を見るからにあの者より上であるからな。）

「そつか。そーだよなあ。」

おっちゃんに同意を示す。

ガルさんが俺の上司になったら…うん。

普段は厳しいけどいざとなったら、責任は俺がとる！とか言ってくれそう。

ま、想像だけどね。

「シーダとおっちゃんどつちが強いんだ？」

何気なく訊いた俺におっちゃんは予想外に声を荒げる。

（なっ！明久殿は私があやつに負けると思っているのか?!）
え。

おっちゃんそんなムキにならないでくれよ。

もしもの話だよ。

「最強の剣つてゆるーくらいだからおっちゃんの方が強いのか確認しただけだつてば。」

(うむ。私の剣が負けることなど有り得んぞ。
機嫌をなおしたおっちゃんに俺は乾いた笑い。
つ、疲れる。)

ふと気配を感じて顔を上げればシーダが俺を見つめていてビビる。
もう、すごく反省してますって。

これからは、他人の忠告を守って慎重に行動するよ！

観光散歩道（後書き）

あら、いつの間にか15000円がとびぬかれます。

続 観光散歩道

20分ぐらい歩いていたら街並みが途絶えて城までの直線一本道になった。

あと1キロもないくらい。

明日には誤解を解いてシーダともお別れかと思うとしんみりしてくるな。

おっと、そーいえば頭皮マッサージしてやるんだった！

なんて事を考えているうちに、城門まで来た。

城は外回りが1mくらいの深さだろうと思われる掘りに囲まれていて西洋というより日本風な城の造りに近いかも。

掘りを渡る為に木造の橋がかけられていて、そこを馬車や商人などが通行している。

城は西、東、南とに分かれていてそれら3つのプチ城を中央にある建物が繋いでいる。

とにかくデカイ。

敷地も半端ない。

さっき俺らが見た西の塔には姫巫女が住んでる部屋もあるらしい。

西塔全体が主に占術やら神事やらに関わる人々が住んでいたりするお祈り系集合住宅らしい。

東は食事や家事なんかをやってくれるいわゆるメイド系。

南は政治関係全般で王様とのエツケンはここでやるそう。

中央は王族の住居やシーダ達騎士の宿舎、はては後宮みたいのもあるんだってさ。

そーいや、大会の時に国王っていたはずだよな。

自分の事に手一杯だったから探す余裕なかったけど。

「国王ってどんな人なんだろうな？」

つぶやく俺におっちゃんが言う。

（私は見えていたぞ。）

「え。マジで！？どうだった？」

（どうとは？）

「いい人っぽかった？」

（分かん。人間見た目で判断してはいけないというぞ）

「まあそーだけどさ。」

（ただ…）

「ただ？」

（明久殿は国王の身近な人物を2人ばかり知っているな？彼らが仕えてもいいと思う程度の男なのではないか。）

国王の知り合い？

ああ、シーダとガルさんか。

確かにシーダは、気に入らなかつたら国王だろうが仕えてなさそうなタイプだよな。

ガルさんは忠臣タイプだけど、見た目のイメージと中身が合っていない。

だから浅い付き合いじゃ、親衛隊隊長になんてしてもらえてない気がする。

総合評価の結果、王様はいい人そうってことにした。

当初の予定では巫女さんだけに俺は誤解の旨を伝えようと思っていたのだが、場合によっては王様あたりにも伝えた方がいいのかな。

ま、行かないことには始まらないし、なるようになるはず。

城内は西洋の城みたくレンガをセメントで繋ぎあわせる形で造られている。

地震の少ない地域柄なのかな。

耐震構造ではなさそう。

石造りだから火事には強そうだななんて事を考えながら歩いているうちに城の中へ。

続 観光散歩道（後書き）

だらだら続きます。
すみません。

王城見学

明日にならないと国王さまには会えないっつー事で、シーダが城の中を案内してくれることになった。

流石に1日で全部まわるのは無理な広さなのでシーダによるチョイスでまわるそうだ。

ちよつとしたアトラクション気分でいた俺に向かって「くれぐれも俺の傍から離れるなよ」とシーダに口をすっぱく言われる。

分かっているって俺だって反省したんだから。

仕事を残してて付き合えないガルさんに見送られて俺達は歩きだす。

「アキヒサが最初にいた部屋は中央塔2階にある来賓用の部屋で、ちよつど真下の階が聖騎士の階級持ちのやつが住む部屋がある」
あつ。

聖騎士って大会で言ってた優勝景品じゃん。

階級持ちってのは会社で言うなら幹部クラスってことか？

よく分からんが、偉いおっさん達が住んでる場所なんだな。

「この階段を下りるとホールと庭園がある。」

やや下かげんに歩いていた俺はふと顔を上げてビビる。

うゝわっ！こりゃ派手だわ。

俺達を下りようとしている螺旋階段は左右に円を描くように階下へ。

中央頭上には豪華絢爛なシャンデリア。

映画のセットみたいな階段を下りると白い大きな木でできた扉。

驚く俺を見てシーダは微笑んで扉を開ける。

「わあ！すっげ」

大ホールが目の前に広がる。

右側と正面の壁面には細かな彫刻が彫りこまれていて美術センス皆無の俺ですら圧倒される。

左側を見ると自慢の庭へ出るため白い木枠のガラス扉がずらーっと。

こうだっ広い場所にいると走ってみたくなるのは俺だけか。
俺は端から端まで猛ダッシュ！…したのは僅かに10mくらい。
なぜならば…

「いいっ！いたたっ！」

予想外の痛みに突然襲われたからだ。

「アキヒサ！？どうした？」

シーダが急ぎ俺の後を追ってきたがそれどころじゃない。

これまで全く反応のなかった腕輪から焼けつくような痛みが走る。
いててっ！腕がもげる！

「っあゝ！」

痛みにうめく俺におっちゃんからの声。

（明久殿！私にもかんじられたぞ！庭だ！急げ！）

俺とおっちゃんは肩に触れようとしたりシーダの手を払いのけ、左側のガラス扉のひとつをおっちゃんでおもいつきり割って外へ飛び出した。

ごめん！

後で就活したら必ず弁償すっから！

心の中で詫び、でも走るスピードは緩めることなく俺は腕輪に導かれるように奥へと風を斬って走った！。

王城見学（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

ひっそりこっそり他ジャンルにも手を出してしまいました（ ; ; ;
）

こちらの話とあまりに違うのでリンクはしていませんが。

みつけてもぬるま湯のような目でお願ひします。

続 王城見学

最初の衝撃から立ち直ったとはいえまだ痺れが残って自由に動かせない左腕を勢いに任せてぶんぶん振り俺は庭園の奥へと進む。服に葉っぱやら枝が突き刺さるのも無視！

今は花を愛でたりする余裕も無く、ショートカットを重ねる。

「どこだよ！」

（気配は更に先。どうやら私達が探すものとは物ではなく生物のようだ。）

息を切らせながら走る俺をおっちゃんが誘導してゆく。

「生物！？じゃあ動く可能性あるじゃんか」

マジ勘弁。

庭もくねくねして走りにくいし。

（前の茂みをそのまま3つ突破すれば最短でたどり着くが。）
なにっ！最短だと！？

「もちろんそっち行くよ！」

俺は袖が枝に引っかかって破れるのも構わず突進した。

バリバリ音をたてて枝が折れる。

庭師の皆さんゴメンナサイ。

俺とおっちゃんは茂みをひたすら掻き分ける。

おっし！

これで見つつ目！

茂みを越え飛び出すと急にそこは拓けて人が2、3人くらい入れそうな池がある。

「あーっ！あの腕輪！！！」

飛び出した先にいた人間の腕についている腕輪は俺と同じものだ。間違いないっ！

俺は腕輪めがけてダッシュ。

相手の腕輪を引いたくる勢いで掴んだ。

やった！

遂に！

これで日本に帰れるぞ！

腕輪の人ありがとう！

よし、チビッコ出てこい。

見つけたんだから、とつとと俺を帰してくれ！

勝者気分でガッツポーズまで決めた俺はその人物を見た。

ん！

あららら？

興奮覚めやらない俺はこの時になってようやく状況を悟る。

茂みから突然飛び出してきた男。

ハタチくらいの全裸な女性。

その女性の腕を掴んで離さず持っている俺。

相手の女性と目が合う。

「あ。あ、あのっ」

俺が言い訳を始める前に、女性はわなわなと身体を震わせ…

「きゃあぁ〜！！！！」

割れんばかりの悲鳴をあげた。

続 王城見学（後書き）

今回はサッカー短めで。

俺と姫巫女

うわっ！ごめんなさい！

これはどー考えても俺が悪い。

あわあわと急ぎ手を離す。

この状況。

一言で言うなら

痴漢行為。

うわっ。

響きからして最低だ。

入浴中だったのか女性は衣服を何にも身につけてはいない。

相手の女性もパニックなら狼藉をはたらいた当の俺もパニックだ。

「姫様！いかながなされました！」

女官達が急ぎ駆けつけてくる。

「何者！！」

わらわらと女官達、5人に囲まれる。

今、姫さまとか言われていなかっただか？

（明久殿！この女達は武術の心得があるようだ。蹴散らして逃げる

か？）

いやいや、ダメでしょう。

逃げたら負け。

痴漢行為を認めてると一緒だつて！

姫様言われてた女性に女官の一人が布を掛け抱き寄せ叫ぶ。

「この者を捕らえよ！」

ちよ！

逃げないってば。

俺は他の女官達によって地面へと叩き伏せられ、両腕を羽交い絞めにされる。

（明久殿！腕輪の反応が途絶えたぞ。）

あっ。

確かに腕輪からの痛みはおろか痺れもスッキリ消えている。
どういうことだ？

この姫様が俺達の探している者じゃないのか？

腕輪の反応が消えた事にショックを受ける俺はそのまま大人しく連
行される。

そして、現在の俺。

牢屋に放り込まれている。

まあ、妥当だろうな。

おっちゃんは何によって重量コントロールをして俺から離されまい
と抵抗。

誰も俺から剣を離す事ができず、俺はまたもや腕をグルグル巻きに
される。

「どうしたもんかな。」

（先ほどの者がシルス殿の言っていた探しものではないのだろうか
？）

おっちゃんも俺と同じことを言っている。

「腕を掴んでも俺が元の世界に帰れなかつたって事は違うのかも。」

そもそも見つけた途端帰れるのかも分からないんだけどさ。

あ〜。

腹減ったな。

今日は運動量多すぎ。

事務仕事で運動不足気味の身にはけっこうしんどい。

「疲れた。おっちゃん、俺少し寝てもいい？」

緊張感のかけらもないがここで何もすることなどないのだから、ど

うせなら寝て少しでも疲れを取りたい。

人はこれを現実逃避と言うのかも。

(わかった。人の気配がしたら起こそう。)

俺は固くて寝心地も良くなさそうなベッドにごろんと寝ころんだ。

寝付きの良い俺は数秒とかからず眠りに落ちた。

(明久殿！起きろ明久殿！)

おっちゃんの声に俺の意識が覚醒する。

おっちゃんが起こすということはこれから人が来るようだ。

俺は急ぎ身体を起こすと、ベッドの端に座る。

カツンカツン。

しばらくすると人の近付く足音が聞こえて俺は牢の中からそれが近づいてくるのをただ待つ。

ギィ。

鉄の扉が開く音がしてそこから現れたのはガルさん、シーダ、それと知らないじいさんだった。

「ガルさん！シーダ！」

俺が声をあげると二人は何とも言えない顔。

「アキヒサ。お前、自分が何をしたか分かってるか？」

シーダがすごい真面目な顔で俺がしがみ付く牢の前までやってくる。分かってるよ。

年頃の娘さんの全裸を見ちゃったうえ、その腕も掴んじゃったってことは！

だからあの姫さんにもう一度しっかり謝らなくちゃいけないと思うし、裁判にかけられたって文句は言えない。

「分かってないな。」
うわ。一刀両断。

だから分かってるっての。

「さっきアキヒサが触れた人物はアルギダの姫巫女、セシリア＝ミ
リファ。巫女は生まれてから一度として異性に触れることはならな
いとされている。例え父親であろうとも例外はない。その巫女にお
前は触れたんだ。」

えっ。

えっ。

えっ。

ってことはどーゆーことだ？

いまいちピンとこない俺に焦れてシーダは苛立つ。

「お前は国家反逆罪並みの重罪を犯した人物ってことになる。」

いつ
!!!

なんですと！

犯罪は犯罪でもそんな重罪なのか!!!？

目玉が飛び出さんばかりの俺のリアクションを見てようやくシーダ
が分かったかというように頷く。

なんでなんで。

どーしてそーなる？

確かに全裸の女性に許可なく触るのはダメだけど！

じゃあ、俺はこのまま死刑とかになっちゃうのか!？

まさかの異世界、わずか数日にして?!

やばい。

どーしよう。

パニックであわあわする俺にもう一人の人物が声を張り上げる。

「アキヒサと申す者！アルギダの法に則って汝に問う！」

おわっ！

すっかり存在をスルーしていたじいさんが突然叫ぶものだから、俺
は更に驚く！

バカ！

急に叫ぶなってんだ。

じいさん血管切れるぞ！

そんな俺にじいさんは構わず死の宣告を下す。

「姫巫女に触れた者、死でその罪を償うか

もしくは婚姻を結び永久に巫女にその罪を償うか。今すぐこの場で

答えよ！」

うわっ！

やっぱ殺されるのか！

短い人生だったな……。

ん？

今なんと言った？

死刑宣告に気を取られて聞き逃しそうになった俺は反応するのが遅れた。

そんな俺にじいさんは繰り返す。

「死か結婚か選べ。」

け、結婚？！

なっ、なんでそーなる？

俺と姫巫女（後書き）

ここまでおつきあいいただきありがとうございます。
相変わらず読みにくい文章でスミマセン。

20000HTできるのもひとえに皆様の優しさ。エゴの精神です
ね。

番外編 アルト (前書き)

アルトの過去話です。
長めです。

番外編 アルト

雲ひとつなく、サンサンと照りつける太陽。

今、その下には一艘の小型客船が広い海原を進む。

「3日後にはランダスタの港町に着く予定だよ。」

甲板にいる乗組員が言つのを聞く一人の男。

薄茶色の髪は適度なショートカット。身長は190cmほど。

暑さのため上半身は裸で下には革をなめして作った黒いズボンを履いている。

鍛えこまれた身体には無数の傷跡。

男の名はアルト・シールズ。

職業は戦争屋と呼ばれる傭兵だ。

戦場でのアルトを知っている者は普段とのギャップに必ずといつていいほど驚く。

戦場でのアルトは容赦という言葉を知らない。

それこそ戦場にいれば女子供だろうと関係ない。

敵と知れば躊躇いなく殺す。

一方、普段のアルトは温厚だし人なつこい性格でもある。

「今回はスムーズに着けたなあ。」

アルトは数多の女性を魅了してやまない笑顔で答える。

30日程の船旅の間にアルトを知らない乗組員はいない。

「スムーズにいったのはアンタのおかげだな。」

そう、この船は出航して10日目に海賊船に襲われている。

普通大型客船ならば護衛を乗せているがこの規模の客船では乗せている事は少ない。

実際、護衛がいたとしても多勢に不勢な海賊達相手には大した効果もないのが実状ともいえる。

アルトはそれを一人であつという間に薙ぎ倒し、海賊達は海の藻屑となった。

こちら側は一人の死人も出さずにだ。

当時、アルトは甲板で海を眺めていた。

地平線の彼方に船が見えたのを何気なく目で追っていたのだが、すぐにそれが普通の客船ではない事に気付いたアルトは的確な指示を船長にすると他の乗客や乗組員を海賊達がすぐには来れない船内部の倉庫へ隠れさせ、一人甲板で海賊達が乗り込んでくるのを迎えたのだ。

海賊を退けて船長が報酬の話をするのを遮って、報酬はいらないから皆で酒でも酌み交わし生還を祝おうと言う。

その晩、船は他の乗客や乗組員共々飲めや歌えの、盛大な酒盛りとなった。

「あゝ。あん時は楽しかったなあ。タダ酒だったし。」

なんでもない事のように言うアルトに乗組員は呆れ気味に笑う。

「あんなに楽しい酒が飲めたのもアンタが乗ってくれたおかげだ。じゃなきゃ今こうして世間話もできてない。」

「ま、過ぎたことだ。ん、じゃーな」

そういつて乗組員の仕事の邪魔にならないよう離れる。

アルトがこの船に乗っている理由。

それは近年、激化傾向にある西側の戦争へ参加するためだ。

戦争が起きると各国は戦争屋へ依頼をする。

窓口は賞金稼ぎや護衛などと同じギルドと呼ばれる受付所が各地にあるのだが、扱いは他と一線を画している。

戦争での仕事のみする者を戦争屋と呼ぶ。

ハイリスクハイリターンな為、よほど腕に自信があり人を殺すことに躊躇いが無い者かもしくは一攫千金を狙った新人ぐらいしかない。

そんな中、アルトは何百という戦場で武勲を挙げ、今や各国から熱烈なラブコールを受けている。

職に困ることはないし、一度出ればその報酬だけで半年は楽に暮らせる。

船はもうすぐランダスタの港町へと寄港する。

そこで降りて更に西へ。

戦場となるのは大抵平原などの広大な大地だ。

民家のある地区が戦場となるのはごく稀なことでそこまで行く為の馬も必要となる。

アルトは暇をもてあまし気味にプラプラと目的無く歩く。

「えいやっ！」

ふと甲板の後方、隠れた場所で何か音と声が聞こえた。

興味をひかれて見れば少年が鞘をつけたまま大人用の剣を振っている。

「おーいガキ。そんなへつぱり腰じゃ危ないぞ。」

アルトが少年の背中に声をかける。

少年はビクッと身体を震わせた。

恐る恐る振り向く少年にアルトはしゃがんで視線を同じにして笑みを浮かべる。

少年はホツとして肩の力を抜く。

「剣の練習は感心だが、ただむやみにやっても意味がない。ガキ、剣を片手で肘を曲げずに肩まで上げることはできるか？」

「ガキじゃない！カイトって名前がある！」

ムキになる少年にすんなりアルトは頭を下げる。

「あー、悪かった。カイト。剣が上手くなりたいのか？」

「なりたい！母さんを守るんだ！」

「じゃあ、少しだけアドバイスをさせてくれ。その前にさっきの質問。

剣は片手で扱えるか？」

「ああ。持ち上げられるぜ！」

そういつてカイトは左腕をプルプルと震わせながらも肘を曲げずに剣を肩の高さに持ち上げる。

それを見てアルトはカイトの姿勢を軽く直す。

「剣は軸となる身体造りが一番重要なんだ。」

カイトにそのままの姿勢を崩さないよう指示する。

すぐにカイトは苦しそくに歯を噛みしめる。

「…帆布があれば船は走るか？…ちがう。骨組となる柱があつて風向きをきちんと計算する技術がなければ帆はその役割を果たさないだろう？…剣も骨組となる身体、練習や経験による技術があつて初めて役にたつ。」

アルトはカイトを子供扱いせずきちんと理解させてから練習をさせる。

「毎日、この練習を欠かしちゃいけない。剣を振るのはこの腕が震えなくなつてからで充分。」

そう言つてにんまり笑つとカイトの震える腕を上から押す。

「ああっ！何すんだよ！」

「上から押されても剣を下ろさなくなつたら合格だな。」

「き、きたねえ！」

「ま、今日明日で何とかなるもんでもないさ。それより喉渴かないか？」

「…渴いた」

「じゃあ。一緒に食堂行こうぜ。おごつてやるよ。」

「…じゃあ行く」

船上では水も陸地とは比べ物にならないくらい高価だ。

甘く味付けした飲みものに関しては何に値が張り、小型客船に乗る客層ではまず手が出ない。

食堂に着いたアルトはその甘い飲みものを頼んでカイトに渡す。

「ほら、飲め。」

「いいのか？」

躊躇うカイト。

「いいから渡したんだ。カイトとの出会いに乾杯だな。」

アルトは自分用に酒を頼み、二人は乾杯する。

「こいつも食っていいぞ。…そーいえば。どーして強くなりたいか聞いてないな。母親がどーとか言ってたよな？」

食堂の椅子に座り、テーブルに小魚を揚げたツマミを置く。

カイトは水分を摂りながらツマミにも手を伸ばす。

「ああ。父さんは先月あった戦争で死んだ。この剣は父さんの形見なんだ。母さんと親戚のいるトギアナに向かつてる途中なんだ。」

カイトに気づかれぬ程度にアルトは眉をひそめる。

（トギアナ？あそこはまだ目ぼしい戦争は起きてないが…あまりいい噂も聞かないな。いつ戦火が飛び火してもおかしくない。）

「へえ。だから剣をみがいて強くなりたいのか。」

「あんだアルトってゆーのか？」

今度はカイトが訊いてくる。

「そうだ。」

「あんだが海賊どもを追っ払ってくれたんだろう？」

「まあな。」

「頼む！お願いだ！俺に船にいる間、剣を教えてほしい！」

思いつめたカイトの剣幕にアルトは一拍置いて、その意志が強いことを知る。

「ん。まあ、俺も暇だし構わないが。言っとくが俺は子供だからって甘やかさないからな。」

「ああ。よろしくお願いします。アルト先生！」

そう言って頭を下げるカイトに苦笑いするアルト。

「先生はいらんさ。たまたま船で出会った小さな友人に剣のアドバイスをするだけで、俺は弟子はとらないからな。」

「分かった。よろしくアルト。」

「こちらこそ。」

アルトとカイトはがっちりと握手する。

それから毎日朝の数時間、二人は甲板の隅を船長の許可を得て使わせてもらった。

「脇が甘い！体軸がずれてる！軸の位置は極力変えるな！円を意識した動きをしないとこうなる！」

「あつ！」

カイトの剣が弾かれる。

アルトは乗務員の一人に短剣を借りて相手をしている。

刃の長さはカイトの持つ剣の半分もないが、アルトは言葉通りカイトが子供だからと言って手加減したりはしない。

大人と打ち合いの練習をするのと変わらない扱いに、練習初日からカイトの体には無数の痣ができている。

二人の練習も今日が最終日となる。

昼過ぎ。アルトはランダスタに着いた船から下船する。

甲板へ見送りに来ていたカイトへアルトは声をかける。

「カイト。俺の言った事忘れるなよ。」

「ああ。俺は俺の大切なものを守るためにだけ剣を使う。アルトが毎日やれって言ってた訓練もやるし！それから……」

「そんだけ覚えてれば十分だ。間違っても俺のようにはなるなよ。じゃあな！」

それだけ言つとアルトは大きな荷物と1m以上もある長剣を肩から下げ、船から陸地へと伸ばされる階段を降りて行った。

カイトは思い起こす。

練習後、アルトは毎回カイトを誘い食堂で昼食をとった。

2日目にはカイトの母親も交えて3人で食卓を囲んだ。

カイトは毎回1度断るのだが、アルトが一人のメシはマズイからと粘ると根負けして付き合うというパターンを繰り返した。

「金はいいんだよ。俺の職業は言っただろう?」

「・・・戦争屋」

「そうだ。殺めた人間が金に変わっているんだ。・・・だからこそ、いつか自分も他の誰かの金に変わることがある。おれが金になったら、その金は他の誰かを生かすために使われたい。・・・だろ?」
そう言っただけで笑顔でござられるとカイトとしては残さず食べることにいらしいか返せない。

アルトは自分の話は面白いことないからとカイトのたわいのない話を聞きたがった。

死んだ父親との思い出もいくつも話した。

一度だけカイトは両親について聞いたことがある。

「ん〜。俺の両親について聞いてもなあ。二人とも俺が物どころつくかつかないかぐらいに戦争で死んでるし。∴俺は一度として大切なものを守れてはいないんだ。恋人も両親も・・・だからかな?」

「なにが?」

「大切なものを守るための剣だったら・・・きつと今、戦争屋なんてやってなかったんだろうなって。ま、今更だけどな。」

そう言っただけで、この話を切り上げたアルトの笑顔を見てカイトも無理矢理笑顔をつくる。

「俺は母さんを守るよ。剣だつてちゃんと練習してうまくなる!」

「そうだな。剣筋はいいもの持ってると思うぞ!」

「ほんとか?」

「ああ。嘘言っただーすんだよ。」

アルトはそう言っただけで笑顔でカイトの頭をグリグリと撫でた。

船を降りたアルトはその足で馬を調達し、更に西へ。

ギルドに途中寄って、一番報酬の高い国へ。

目的地はカイトの言っていたトギアナの隣国で軍事国家でもあるクイニスタだ。

馬を飛ばし数日でクイニスタの国境へとたどり着く。

ギルドの依頼書を見せて入国し、担当者と会うことに。

そこでアルトはクイニスタが戦争を仕掛ける次の国を知る。

隣国、トギアナ。

カイトの目的地でもある国。

(トギアナ自体は領土が広いので一概にカイトと結びつけることはできないが、ランダスタの港で二人が降りなかったところを見ると大きく迂回してトギアナへ向かうのだろう。

だとすると二人はまだトギアナに着いていない可能性もある。) 戦火に巻き込まれないことを祈りつつ、アルトは戦さの準備を始める。

鎧は急所部分だけを隠すように最小限のものに留める。

全身を鎧に包むと視界が狭まり動けない為だ。

長剣を使うのは相手の剣が届くより先にこちらの剣が届くため。

使うには相当の技術が必要だがアルトはこれを好んで使っている。

戦争屋は基本、戦局をこちらに優位になるように仕向ける為のものなので先頭のしんがりを務めることが多い。

それが他の兵より報酬が高い理由でもある。

突撃の合図とともに馬を駆り先陣を駆け抜ける。

初めて戦場に立った時から、仕事モードのスイッチが入ると一切の感情がどこかへ消し飛んでしまう。あるのはただ高揚感と冷静に状況だけを分析する思考のみ。

恐怖といった感情もないため相手の群れにもためらいなく突進していく。

いつの頃からか戦場でアルトは黒の戦神と言われる。

アルトが先陣を斬って相手の陣を崩すと負ける戦がほとんどなかった為だ。

クイニスタはあつという間にトギアナの陣を次々と突き崩していった。

追い詰められたトギアナがとった最終手段。

それは人一人を殺せるぐらいの爆薬を兵士ではなく民間人に巻きつけて戦場に出すというものだった。

爆薬の導火線に火をつけられ土手を突き落とされる人々。

土手自体は緩やかな坂道で火をつけられた人々は戻れば同国の兵士に槍で突き殺される。

なので、人々は助けを求めるようにクイニスタの兵士に詰め寄る。

後ろの導火線の火を消してくれと。

クイニスタ側から見れば亡霊のように両腕を前に出し、助けを求めてくる彼らの姿は恐怖だ。

訴えなど冷静に聞いている余裕もない。

そうこうしているうちに導火線の火が爆薬へと移り次々とクイニスタ兵の命を奪ってゆく。

トギアナ側の民間人と共に。

クイニスタの陣形が崩れようとしていたその時、一頭の馬と男がトギアナ側の民間人をクイニスタの陣に届く前に切り捨ててゆく。アルトだ。

トギアナの人々は死んだ後、爆破によって千切れ飛ぶ。

アルトはその間にも槍ほどの長さの長剣で躊躇いなく次々とほふってゆく。

相手は民間人なのであつけないほどに屍の山ができる。

トギアナはとうとう戦に敗れた。

クイニスタ軍は意気揚々と引き揚げて行く。

アルトもクイニスタへ戻ろうとしたその時。

「なっ！」

徐々に戻りつつあった感情が一気に覚醒する。

アルトが殺めた屍の中にいたのは……

「カイト!!!」

馬から飛び降り、急ぎその爆破で頭部だけとなったカイトをその胸に抱く。

「カイト! どうしてこんな……。母親を守るんじゃないのか……」

そして、カイトがいたあたりに見覚えのある金髪の女性の頭部も発見する。

カイトの母親。

「……カイト。ちゃんと大事な者の為に死ねたんだな……」

「

アルトはその6年後、戦場にてその命を終える。

番外編 アルト (後書き)

アルト20代最後の思い出ってことで。

アルトの生きていた世界は基本どの国も戦争あり。

死が身近で当たり前な状況。

だから明久が人を殺すなって言うのもただ従っているだけで納得はできてないんです。

今回のテーマは、普段おっちゃん扱いされてるけど、実は結構若いんだよ〜です(笑)

アルトが剣になった時の話も時間があったら書きたいな〜(本編が終わるかギリギリなのでないと思うけど)(汗)
長々とお付きあいありがとうございます。

続 俺と姫巫女

えっ！

なっ？

ああー！ー！？

結婚ってあの結婚だよな！？

ドッキリ……なんてことは……。

俺はシーダを見る。

シーダは首を横に振る。

ハイ。

ナイデスネ。

「おっちゃんつてばどーしよう。」

このままじゃ俺、探しモノの前に婿入りすることになっちゃおうよ。

この世界に関わり持ちたくないのにズツポリじゃんか。

(うむ。逃げるか…あとは巫女を殺るか？)

「殺っちゃダメだつてば！」

(では逃げるのか？)

むっん。

逃げきれるかな？

只でさえ黒髪の間人は今人気者だったのに、逃亡に一番重要なものを俺は持っていない。

つまりは金だ。

無一文で人目を避けて逃げるって…無理！

のたれ死にフラグ立ちまくりじゃん！

話せば分かってくれる。

そう信じて全て打ち明けるか。

そーだ。

それしかない。

それでダメだったら逃げることを考えればいいじゃん。

おしつ。

そーしよう。

「なあなあ、おっちゃんの念話って複数の人に伝えられるのか？」

（複数は可能だぞ。私が明久殿の言葉を通訳する感じでいてもらえるといい。）

「通訳かあゝ。なら、複数の人に伝えられる範囲はどんくらいなんだ？いくらなんでも1キ口先とかには無理だろ？」

（指定してもらえれば可能だぞ。ただ、普段の状態なら人間同士声の届く範囲に調節してあるが。）

おおー。

便利だな。

「やっぱ人間、話し合えば理解しあえると思うわけで…だからおっちゃん。ここで俺の意志を3人に伝えてほしいんだ。」

（うむ。分かった。）

俺は檻越しにいる3人におっちゃんの念話で結婚も無理だし死にたくもないって事を伝えてもらうようお願いする。

おっちゃんよろしく。

（うむ。最善を尽くそう。では）

俺の手の中でおっちゃんが鈍く光る。

「なっ！」

「なにっ!？」

「剣が光った！」

3人は驚き目を見張り、剣から視線を反らさない。

さあ、おっちゃん。

人生の先輩として華麗な交渉術を見せて3人をお願いしてちょーだい。

（そのこの3人の人間！！巫女とは言え、たかが人間の分際で世界の神の代理人たる明久殿と結ばれようなどと片腹痛い！人間どもの作った法などに従う謂われなどないわ！）

ヒィ〜！

おっちゃん！

な、なんつっー事言ってくれちゃうんだよっ！
ムンクの叫び状態になる俺。

うわ〜っ！

俺泣きそうだよ。

つてか、もうっつすら涙ぐんでんよっ。

「おっちゃんのバカ！」

（なっ！何？私は事実を言ったただけだぞ?!）

「事実だろうが何だろうがなんであんな偉そうなんだよっ。昔から奥ゆかしい日本人はオブラートに包んだ感じでやんわり言っもんなんだよっ。」

（私は日本人ではないぞ？）

おっちゃんの言い訳なんて聞く耳持たないぞ。
どーすんだよ？

この状況。

今、俺の前の状況を一言で言うならば。

印籠出した後の水戸黄門。

まさにそれ。

皆様、ははあ〜って感じにひれ伏してるよ。

ははは…

もうどーにでもなれっつてんだ！

続 俺と姫巫女（後書き）

ハイ。ここまでお読みいただきましてありがとうございます。

ヤローばっかでムサイな〜と常々思っていたので次回以降は差し馬のごとく女性キャラを増やしていきたいな〜と思う今日この頃です。

続々 俺と姫巫女

現在の俺。

来賓室どころでないすっげ派手派手きらびやかな部屋にいる。

日本のホームレスよりひどかった俺の服は捨てられてしまつて、今はピラピラした白いシャツに下はベルベットな肌触りの黒いスポンへと着替えさせられている。

一見すればどこぞの国の王子様にみえなくも……いや、見えな
い。

絶対似合つてないと思う。

それにしても。

お、落ち着かない。

ざわざわしまくつてるよ。

それもこれもおっちゃんの念話のせい……とゆうか俺の判断ミスか。

日頃、ハリウッドセレブとか外人の人の通訳してる人つて本人こんなに敬語で話してるとは思えなくとも敬語で訳す理由がなんか分かつた。

おっちゃんの普段俺に接する態度。

例えるなら、不出来でだいぶ年下な將軍さまに仕える家老つて感じ。そんなおっちゃんが自分より卑しい人々にとる態度つていったら……

・そりゃそうですよつてなハナシ。

走れるくらいの広さの部屋で俺は先刻のじいさんとソファアーテープルを挟んでソファアーに向かい合っている。

ガルさんとシーダは部屋の外。

じいさんはどうやらそれなりに偉い人っぽい。

それにしても、ソファアーもふつかふか。

アンティーク調で重厚な造り。

コスプレですか？な衣装に身を包んでいる俺は無性に口の中が渴い

てテーブルの上に置かれている紅茶らしきものを口に運ぶ。
あちっ。

やばっ！

僅かながらお茶をズボンにこぼしてしまっ。

す、すみません。早くつまみ洗いたないとシミになってしまっ。

慌てて立ち上がる俺をじいさんがさらに慌てて止める。

「明久様！火傷はなさっておりますませぬか？！申し訳ありません。お茶を用意した者は嚴重に処罰致しますゆえ、何卒お許しを！」
いやいや。お許し願いたいのはコチラなんだっ。

そう、気まずい一番の理由は先ほどから畏まりまくっているじいさんのその態度だ。

「おっちゃん！火傷は大丈夫です。処罰はしないでください。それから服汚しちゃってごめんなさいって伝えて。」

（了解した。）

剣が光ってじいさんの頭にもおっちゃんの声が響く。

（明久殿は怒ってはおらぬ。処罰も無用。火傷も心配はない。明久殿は服を汚した事を詫びたいとの事）

「い、いえっ。服の汚れなどお気になさらずに。明久様の寛容なお心に感謝いたします。」

終始こんな調子のじいさんと二人つきり……。

俺の精神疲労度はピークに近い。

それでもなんでこんな状況に甘んじているかと言うと姫巫女さんに謝るためだ。

あの後、やけになった俺はじいさんに向かって姫巫女にあつて謝罪したい旨をおっちゃんに伝えてもらった。

結婚はできないけど出来るだけ償いはしたい。

このままじゃ姫巫女さんの中で俺って最低ランクの男じゃん。

この世界を救うなんてできないけど、猫の手ぐらいには役に立っておきたい。

今からここに例の姫巫女さんが来るらしい。

今のうちに謝罪の言葉の一つでも考えておかないとな。

俺はじいさんの存在を頭の隅に追いやって思考の淵に沈む。とにかく誠意を見せなくちゃな。

まずはしっかり謝って。

それから・・・。

（明久殿！やっと女が来たようだぞ?!）

えっ！もう？

全然考える暇ないじゃん。

ぶっつけ本番かよ。

「姫様がいらつしやいました。」

そう言ってお付きの人たちが扉を開ける。

部屋に入ってきたのは天使の輪が眩しい腰ほどの長さまで伸ばされた薄紫色のストレートヘアの女性。

着ているドレスはごちゃごちゃした飾りなどは一切なくシンプルな水色。

だけど上等なものだと一見して分かる。

薄く化粧してるからなのかさつきよりも大人びた印象。

清楚な大和撫子風美人な姫巫女さんが今までじいさんが座っていたソファの前までゆっくりと歩いてくる。

あんぐりしていた俺は慌てて立ち上がる。

リーマンの習性でペコペコ腰を折ってしまう。

姫巫女さんは優雅に一回お辞儀をして微笑む。

「お待たせしてしまい申し訳ございませんでした。殿方とこうして話すのも久方ぶりで緊張してしまいます。」
「いえいえめっそもない。」

こんなヤツに緊張することないですって。

俺は優雅さとは無縁な笑顔をつくる。

どんな間抜け面になってるのか分からないが、姫巫女さんはそんな俺を見て少し緊張が和らいだらしい。

「どうぞおかけになつて、色々なお話をお聞かせくださいませ。」
はいはい、なんでも話しちゃいますよ。

俺は再びソファアに腰を下ろす。

新しいお茶と茶菓子が用意されて姫巫女さんのソファア後ろにはじいさんと20人以上のお付きの人々がずら〜と並ぶ。

なんだこの状況。

すっげえ、謝りづらい。

痛いほどの視線を浴びて俺はソファアに顔をうずめたい衝動に駆られる。

無理です。

こんな大人数の前で立ちまわれるとは思えない。

「おっちゃん。姫巫女さんだけに念話で伝えてほしいんだけど」
下を向いてひそひそ声でおっちゃんに言う。

（何をだ？）

「二人つきりじゃだめですかって優しく丁寧に訊いてみてほしいんだ。」

（うむ。分かったぞ。）

「あつ。これは剣光らせないでこっそり伝えてくれよ」

（了解した。）

（アルギダの姫巫女よ。一つ頼みがあるのだが、後ろにいる人々をどうにかしてはいただけないかな？明久殿はこの国に来てまだ日が浅い。礼儀がまだ分かっていないので無礼なことがあれば遠慮なく言っていたきたい。）

お〜。

なんだよ。

おっちゃん、ちゃんと丁寧に対応できるんじゃない。

これからはこんな感じをお願いしますよっ。

姫巫女さんは突然脳に響いた声に一瞬ビクツとしたが、すぐに言いたいことが分かったらしく後ろを向いて微笑む。

「では、皆様。これからはわたくしと明久様の二人きりにしてくださいませ。」

動揺するお付きの人々を大丈夫ですからと言う一言で黙らせ下がらせる。

「お待たせいたしました。いつものことでわたくしは慣れてしまいましたけど・・・普通は気になりますわよね。気づかずごめんなさい。」

「いやっ。そんな謝らないでください。小さな俺が悪いただけなんで。」

（謝らないでください。さ、あたまを上げて。）

ナイス！

おっちゃんが気を利かせて訳してくれる。

そのまま頼むよ。

俺が何も言わないのをおっちゃんは肯定と取ってくれたらしい。まずは謝ろっ。

「ごめんなさい！！」

勢いよく頭を下げる俺。

（先刻は姫がいるとは知らなかったとはいえ、湯あみ中の女性の手を許可なく触ってしまい申し訳なかった・・・すみませんでした。）

「いえっ！頭をお上げくださいませ。恥ずかしいのはお互い様。誠意をもって謝罪いただけたくしは嬉しく思いますわ。」

うっっっ。

なんてイイコなんだ。

俺は感激して姫巫女さんへの好感度レベル、マックス！

きつと俺より年下なんだろうけど、人間デキすぎてますっつば。頭を上げた俺に微笑む姿は天使のよう。

おっと、自己紹介しなくちゃな。

「俺は木戸明久。23歳。日本の東京つてところから来ました。」

（明久殿の紹介をしよう。名前は木戸明久。歳は23。日本の東京という国からここへ来た。そして私は明久殿の守護をする剣でアルトと言う。）

「まあ！明久様は23歳でおられますの？！とても・・・お若く見えますわ。」

そーでしょうとも。

アジア系の人間は若づくりに見えるもんなんですよ。

俺はこの世界に来て自分が実年齢よりかなり若く見える事は知っている。

が、姫さまの目に俺はいくつぐらいに見えるのかすごく気になる。

「俺っていくつぐらいだと思われちゃった？」

（姫は明久殿をどれぐらいの年齢だと思ったのか？正直なところを聞かせていただきたい。）

姫さまは困った表情を一瞬だけ見せた。

が、嘘をつく気はないらしい。

「正直言いますと10〜12歳くらいだと・・・。ただ、わたくしの知っている殿方は陛下とシーダくらいしかおりませんから二人と比べることしかできないのですが・・・。」

あー。それは比べる基準間違ってると思います。

それにしても・・・。

10〜12歳つて。

心のどこかで分かってはいたけどショックはショック。だつてなあ〜。

せいぜい5歳くらい下だつたらまだしも、一回りつて。

下手したら干支が一緒なわけで、それって人種の違いつてゆー問題じゃないだろう。

シーダもそんならいだと思ってるんじゃない〜。

うん。絶対思ってるな。

「わたくしの名前はもう知っていらっしやるのかもしれませんが、セシリア・ミリファと申します。巫女は貴族とは違いますが代々血統によって受け継がれていきますの。遠い祖先は一般庶民でしたからどうぞ気軽に接してくださいませ。歳は16ですわ。」

やっぱり年下。

しかも日本なら女子高生。

俺と7つ違い。

それより何よりショックな事が俺にはあった。

誰にも言わないけど……。

しかもさっき立った時から気づいていたけど……。

僅かではあるけど俺より背が高い。

今はヒールを履いてるから一目見て姫さまの方が高い状態にある。

ふんだつ。

いいさいいさ。

ここは異世界アルギダ。

食料事情だつて人種の違いだつてあるんだから。

それから俺と姫さまは陽が沈むまで和気あいあい楽しくおしゃべりタイムを過ごすのだった。

続々 俺と姫巫女（後書き）

ここまでおつきあいありがとうございました。

ハーレム設定目指してがんばります・・・主人公、草食系男子です
けど（・・・）

晚餐の夜？

日が沈んでお付きの人の一人が部屋をノックする。

食事の準備はいかがいたしますかと尋ねられた姫さんはニッコリこちらに向き直り。

「明久様、一緒に食事でもいかがでしょうか？」

「えっ!?!」

無理無理。

何より庶民派な俺はアルギダのコース料理とか出されてもこの国のマナーとか知らないし困る。

とっさに首を横に振った俺に姫さんはさらに食い下がる。

「明久様は誰かと一緒にお食事なさる約束でもされていますの？」

い、いや別にしてはいないけど・・・。

あ。そーだ。

ここではいって言うっておけば断る口実になるじゃん。

この城で俺が知ってる人物　　と言えば。

「お、俺はシーダと一緒に食べたいな」と思ってるからって伝えておっちゃん。」

(うむ。)

「シーダ?!シーダと一緒にならいいんですね。誰かシーダをここに」

「おっちゃんが訳す前にシーダという単語だけ聞き取った姫さんはシーダを呼ぶ。」

ちよっ、ちよっとどうしたんだよ?!

俺は姫さんの強引な誘いにアワアワしていて、その間にも物事は勝手に決まっつてゆく。

あれやこれやと姫さんは、強引に俺とシーダと三人での食事をセッティングしてしまった。

「シーダとわたくし。これでも幼馴染ですの。もちろん大人達には

内緒で手すら繋いだ事はありませんが……。」
お付きの人が出て行った後、姫さんは内緒話をするように声のトーンを下げてそんな事を言う。
なんてこった。

シーダの名前なんて出さずに、ガルさんあたりにしておけばよかった。

でも、三人だけなら俺の危惧するテーブルマナーもフォローしてもらえるんじゃないか。

それならわざわざ姫さんの誘いを断らなくたっていいはず。

開き直った俺は姫さんにニコニコ頷いて見せた。

途端、華が咲いたように喜びの表情を浮かべられてしまった。

なんか、7つも年下の女性にこんな懐かれてしまうとは予想外。

（断らなくてよいのか？）

おっちゃん心配げに訊いてくるのを俺は縦に頷く。

「三人だけにしてもらえるならマナーがわからなくても問題ないじゃん！だから断らなくっても大丈夫！それに俺、めちゃくちや腹減ってるし。」

そうなんだよ。

今俺がほしいのはお茶でも茶菓子でもなくメシ！

今日は朝から大脱出はしちゃうわ、大会に出てシーダの上司に勝ちちゃったり、更には姫さんに出会うというハプニング続き。

その間、全く食事に取りつけていないのだ。

夕飯だけでも豪華に食べたいじゃんか。

（明久殿……。もしかしたら、姫は……。）

おっちゃん言葉に被さるようにコンコンという音が響いて扉が開く。

やってきたのはつい数時間前に見たばかりのシーダだった。

ずいぶんと久しぶりの様な気がする。

そして、仕事中的という意識があるのか今までのようなほのぼのとした雰囲気じゃない。

服も俺を案内してた時とは違って親衛隊の制服だと思われるものに着替えている。

うわ。

男の俺でもかつこいいと思ってしまうほどにその姿は決まっている。やっぱ、思ってた通り、制服似合うよな。

「シーダ。明久様と食事の約束をしていたそうですね。わたくしも二人と一緒に食事がしたいのだけれどいいかしら？」

姫さんがそう訊くとシーダは一瞬意外そうな表情で俺を見た。

すぐに消えてしまって笑顔で頷いたから姫さんはどうやら気づかなかったらしい。

「喜んで……ところで明久様は城に到着してすぐに湯あみしたいとおっしゃっていたのですがそのままこのような事になってしまった為、まだ汗を流していないのです。半刻の後、湯あみ後に食事をするというのでどうでしょうか？」

えっ!?

そんな事いつ俺言ったよ？

でも、シーダにはさっきの食事の件を合わせてもらった恩がある。

俺は姫さんに向かってペコッと頭を下げてみる。

「ええ。では半刻後にこちらへまたおいでくださいませね。」

「かしこまりました。ところで、明久様はともよくお食べになりますので10人分くらい用意しておいた方がよろしいと思いますよ。……では後ほど。」

そう言つてシーダは俺の腕を取つて部屋を出ていく。

「じゃあまた！」

おっちゃんを持った手で姫さんに手を振り、シーダに引つ張られるまま部屋を後にする。

痛いくらいに掴まれて、文句も言えない雰囲気のままひたすら廊下を引つ張られてゆく。

なんかシーダつてば怒ってるのか？

ああっ！

そーいえば俺の正体、黙ってた事謝らないと。
そーだそーだ。
男なら湯あみでもして互いの背中を流しつつ謝ろつと。

さてさてやって来ました風呂場。

この国の人々は湯あみ場って言うみたいだけどとにかく風呂場。
シーダの説明によると城の風呂はここだけらしい。

で、時間帯によって王族から兵士やメイドまで細かく決められているそつだ。

宿の風呂とは違って湯あみ番という役職があつて、その人たちが24時間体制で適温管理しているそつで前回のよう熱湯と水を自分で混ぜる必要はないんだつて。

日本では保温ボタンを押せば出来ることがこの世界では城だけの特権みたいな感じで言われてしみじみ日本の産業技術よありがとうと感謝する。

俺、日本に生まれてよかつたな。

元の世界に帰つたらまずは風呂に入ろつと。

俺はシーダに案内された脱衣所で服を脱ぐ。
貧相な身体に羞恥はあるが、バタバタしてもしようがないと覚悟を決める。

俺のムスコやオシリの穴まで一度見られているのだから恥ずかしがつても今更。

「石鹸は使つたらう？」

シーダが俺に訊いてくる。

おおっ。

なんだこの世界にも石鹸は存在するんだな。

宿では石鹸なんて見かけなかったから無いのかと思ってた俺はヤツホーって感じでコクコク頷く。

「石鹸は庶民の生活で言うならひと家族が1カ月は暮らせる値段の高級品だ。だから宿には置いてなかったんだろうな。ここでも必要なら湯あみ番に言って貸し出してもらうかたちを取るんだ。ちょっと待ってるよ。」

シーダ自身も裸な状態になって俺にそう言つと湯あみ番の人に石鹸をもらいに行つてしまった。

おっちゃんはというと、剣は湿気の多いところに置くのはよくないと言われ、風呂場の入口に剣を置く場所があつてそこに置いてきた。うっん。

裸のままポツンと立ってる俺。

待ってると言われたんだが・・・ちょっと覗くくらいならいいかな。

俺は風呂場があるであろう扉を開けてみる。

湯気がもつもつと扉から出てくる。

扉から顔だけ中へ。

うひょー！

すっげえ広い！

昨日の宿の風呂場と比べてめちゃくちゃ広い。

とにかくもう、健康ランドでも来てるんじゃないかって規模なんだよ。

しかも、貸切状態じゃんか。

50人くらい入れそうなんだっぴろい洗い場と浴槽。

やった〜！

テンションのあがった俺は小走りに浴槽へと近づいた。

まではよかったが、まさかのまさか！

「あっ！」

止まろうとして風呂場の床で滑ってしまっ。

普通なら後ろに転倒するんだろっけど、とっさに身体をねじったば
っかりにそのまま錐揉み状態で浴槽へ……。

「っ！！！！」

ヤバイ！

潜った途端、俺に予想していなかった圧がかかる。

何だこれ！？

明らかに変！

水底に吸い込まれそうになって浮上できない。

うぐっ！

苦しい！

ブクブクと残り僅かな酸素を吐ききってしまった。

あゝなんてこった。

まさか俺の最後が溺死なんてな。

次はいる人、ゴメンナサイ。

入ったらいきなり溺死体と遭遇なんて俺ならトラウマになっちゃう
っ。

霞む意識の中、誰かの手が見える。

俺は最後の力を振り絞ってその手を掴む。

あ。

そして暗転。

俺の身体は意識と共に浴槽の底へと沈んでいった。

なにか柔らかいものがあたる。
感覚が心地いい。

あー。

冬場の布団のぬくぬく加減に近い心地よさ。

このまま後、5分だけ。

つて今、俺日本にいないじゃん！

我にかえつて急に頭が冴えた俺はパツチリ目を開けた。

白い天井に知らない布団の匂い。

この世界に来てからつてゆーより俺の今までの人生の中でもこんな
フカフカしたベッドで寝た事ない。

しかも天蓋まで付いてます。

ここはどこぞの王様の部屋か!?

人の気配を感じて隣に目をやる。

あ。

つてなんだ？

どういう状況だこれは？

俺の寝ていた隣にいるのはプラチナブロンドの綺麗なお姉さん。

俺の方を向いて横向きにすやすやと熟睡している様子。

意味が分からない。

なんだなんだ？

俺つて確か、風呂場で滑つて転んでボシヤンしたんじゃないか？

それが何で起きたらいきなりベッドシーンなんだ？

恐る恐る布団を少しめくつて見る。

お姉さんはよく分からないガウンみたいなものを身につけている。

俺はマツパのまま。

そーだよな、俺つて確か風呂で意識を失ったんだもんな。

「すみませ〜ん。あの・・・もしも〜し」

俺は心の動揺を出来るだけ出さないようにして控えめに呼んでみる。
メイドさんとかが来て、途端に目を覚ましたお姉さんが悲鳴とかあ
げちゃった日には俺、ケダモノつて城中の人に思われるのか?!

わー。

なんてこった！

「おっちゃんどーしよう」

しーん。

声に出して言ってみても答える声はない。

あれ?! おっちゃん?

ふと周囲を見てもおっちゃんの姿は無し。

つて事は俺一人でこの状況を乗りきらないといけないわけか?!

異世界に来てからこっち、おっちゃんと離れた事なかったから感じ

なかったんだろうな。

途端に心細さに襲われる。

布団に目を落とし落ち込む俺。

な、泣きそう俺。

姫さんとの食事もきつと約束の時間はとうに過ぎているはず。

せつかく姫さんと仲良くなれたというのに、初回の約束から守れて

ないなんて……。

俺の信用度は今頃、地の底だな。

「ああ。気がついたのか。」

わあっ!

隣からの声にビクッ!

えっ?

今のこの人の声か?

女性とは思えない低い声。

その声は男!

見た目女性にしか見えないけど……ニューハーフ?

アルギダにもニューハーフがいるのか?

頭上にハテナを浮かべまくっている俺に気づいたのかその性別不明

な人が口を開く。

「ようこそ神の代理人アキヒサ! 私はこの国の国王、ランティス」

グレゴリウス「ニー」アルギダだ。」

いつ！

はああ？

マジですか？！

って俺、国王といつからそーゆーカンケイになっただんだ？！！

晩餐の夜？（後書き）

おつかれさまです。

ありがとうございます。

ではまた。

俺と王様

「ランディーと呼んでくれても構わない。
へえ〜。」

国王つてゆーからもっと年輩の貫禄ありまくりな人物を想像していた俺はあんぐりとアホみたいに口を開けていた。まさかニューハーフじゃないかと思ってたなんて口が裂けても言えない。

「なんで俺、ここにいるんだ？」

思いつきり日本語なので当然伝わるわけもない。

「なんでここにいてるかって？」

おお！

通じたのか？

さすが王様！

コクコク頷く。

と、それを見た王様はいきなり俺を抱きしめる。

ぎゃっ！

必死にもがく俺。

「何やってんだランディー！」

あぶあぶしながら腕から抜け出した俺は部屋に呆れ顔のシーダがいるのを見た途端、脱兎の如くシーダにしがみつく。
助けてくれ！

なんなんだよ〜。

この国の王様は女装癖のあるホモで変態なのか？

俺は男と恋愛なんて無理なんだからな！

「アキヒサが怯えてるぞ。」

よしよしって感じにシーダが俺の背中を軽く叩く。

王様はそんな俺を見て笑う。

「いやいや、すまなかつた。ついうっかり。子供みたいで可愛いな

とってしまったってな…」

ヒドイ！

ゆうにことかいて子供だと！

確かに背は低いかもしれんが中身はれっきとした23歳なんだからなっ！

シーダの影に隠れつつ、俺は王様に文句の念を垂れ流す。

「あー。すまなかった。…そんな威嚇しないでくれ。着替えを用意してあるから、まずは着替えてそれから…遅いが夕食にしよう。隣の部屋にセシリアもいる。」

王様はそう言って部屋に二つある扉のうちの一つを指差す。

おっ！

メシ！

やったメシにありつける。

俺はメシと言うのを聞いて小躍りしたい気分。

もう今日は一日、修業僧の如く断食かと諦めてたよ！

俺はシーダの服を引っ張る。

「どうした？」

おっちゃんはどこにあるのかと俺は棒のジェスチャーをする。

「ああ。剣は重くてアキヒサにしか動かせないからあのまま置いてある。着替えたら取りに行こう。」

分かった。

俺はシーダが持っていた袋の中身を受けとる。

いそいそ着替えると早くおっちゃんに会いたくて王様が指した扉を開ける。

そこは王様の執務室への直通扉だったらしい。

毛足の長い赤い絨毯に刺繍の入ったエンジ色の壁。

窓寄りにはどっしりとした執務机に社長サンみたいにふんぞりかえ

れる椅子。

出入口の扉寄りにある5人くらい座れそうなソファーに姫さんが座っていた。

「明久様！」

俺の顔を見た途端、姫さんは立ち上がり俺に向かって駆け寄ってきて全力で抱きしめる。

この世界の人達は俺を潰す気じゃなかるうかってくらいに思いつきり。

さつきから俺の呼吸は障害されっぱなし。

でも姫さんには心配かけちゃったな〜って思うので王様ほど嫌そうな顔は見せられない。

あー。

そろそろ息がマジ苦しいです。

「セシリア。苦しがつているぞ。」

後ろから王様が言う。姫さんは我に返って腕を離す。

はーふうー。

急ぎ肺に酸素を取り込む。

た、助かった…。

後ろを振り返るとガウン姿で起きてきた王様がニヤニヤしている。

「アキヒサはモテモテだなあ。セシリアが男に抱きつくなんて初めてだぞ。」

はあ？

どこが！？

こっちは酸欠でそれどころじゃないんだっつーの！

はあはあ肩で息をする俺は王様の冷やかしを無視して王様の隣に立つシーダの腕を取る。

早くおっちゃんのとこ連れてってくれ！

俺だけじゃ、現在地も分からない。

全ての話はおっちゃんと一緒に戻ってきてからだ。

シーダと二人、長い廊下を歩く。

「なあ、アキヒサ。お前ホントにこの世界の人間じゃないのか？」
周りに人の気配が無いことを知ったシーダが出会った頃の口調で訊いてくる。

俺はシーダの横に並んで歩きながら頷く。

「そうか。…神の代理人に俺は剣を向けたりしたのか……。すまなかつた。」

そう言つてシーダは深く頭を下げる。
なつ。

よしてくれよっ！

そんな畏まらないでくれ。

俺は神様つてヤツじゃないし、ただの無力な人間なんだから。

俺はシーダと歩を止め、目を合わせ首を横に振る。

シーダはイイヤツだ。

この世界の人間で一番俺が安心できるのはシーダなんだぞ。

だから、姫さんの前とはいえ一歩退いた言葉使いや態度に俺は密かにシヨックだったんだからな！

いいか！

これからは公の場は仕方ないとしても、そうじゃない時には今まで通りに…子供扱いだつていいよ。

俺、シーダやおっちゃんになら子供扱いされてもいい。

だからさ……。

「アキヒサ」

目は口ほどにモノを言うという言葉がとどいたのか分からないが俺はシーダをやりわり抱きしめる。

今の俺の気持ち伝えられるコミュニケーションツールはこの身体

しかない。

俺は怒ってないぞ。

だからシーダも機嫌なおしてくれ。

シーダが俺の背中に手を回し抱きしめ返してくる。

どんだけ伝わったか分からないけど、シーダはもう怒ってないのかな？

抱きしめ返してきたって事はきつと大丈夫に違いない。

おし！

謝罪完了。

ポンポンとシーダの背を軽く叩き、離れる様、促すがー。

お。

おーい。

そろそろ離れてくれ。

シーダは俺を抱きしめたきりびくともしない。

俺は早いとおおっちゃんの所に行きたいんだけど。

離れないシーダになされるがまま棒立ちの俺。

ゴトツ！

「あつ」

近くで何かが落ちる音と声がして顔だけ横に向けるとメイドさんが、持っていたカゴの中のフルーツを2つ溢していて、あちゃーって顔で急ぎ拾い上げていた。

「し、失礼いたしました。」

ワタワタと拾い上げたフルーツをカゴに戻し、その場から逃げるように俺達の横を通り過ぎる。

ちよ。

ちよ。

ちよ。

ちよつと待つてくれっ！！

何か大きく誤解されてる気がするっ！

誰もいない廊下。

抱き合う男二人…。

伝えるべき言葉を持たない俺はただ走り去ってゆくメイドさんを見送るのみ。

あー。

終わった。

女性のウワサを侮っちゃいけない。

これで俺は明日には、ホモでチビな胡散臭い大人決定

ずん

。

俺と王様（後書き）

おつかれさまです。

毎度毎度、読みにくい文章ですみませんっ。

ふと気付けば1カ月たちました。

久々に見たら35000HT越えててビビりました。

それもこれも皆様のおかげです。ありがとうございます。

あと1カ月、根性で終わらせますのでもうしばらくだけお付き合い
くださいませ。

でわでわ。

続 俺と王様

無事おっちゃんと合流した俺は今、王様、姫さん、シードと共に食卓を囲んでいる。

なんか謁見する前に王様とはベッドを共にしてたりしてよく分からないまま勢いに流されている。

10人くらい座れるテーブルが姫さんと談笑した部屋に用意されて所狭しと料理で埋め尽くされている。

空腹のピークが過ぎてしまった俺だったが実際料理を見たらまだまだいけるって感じになってきた。

食べに取りかかる前に経緯を聞いておかないとな。

おっちゃんをテーブルに立て掛けて俺は王様を見た。

「食べる前に何でベッドにいたのか聞きたいです。」

（王よ。明久殿が説明を求めている。食事の前に湯あみ場での件だけでも教えてもらおうか。）

ガウンからヒラヒラシャツにズボンへと着替え、緩くウェーブのかかった背中まで伸びる髪をリボンで後ろに束ねた王様を一言で言うならば…リアルベルサイユの薔薇。

宝塚真つ青な感じに男装の麗人となっている。

いやいや、それ自体女が男の格好をしてる事を表す言葉だけど。

なんつーか、元々男だけど女にしか見えない人が男に見せようとしてるって事。

しかも背が高いから男装しても似合うんだな。

王様は四人の中で一番高いのだ。

190はいつてると思う。

メイドさんに勘違いされた後、やっと離してくれたシードの説明によると三人は小さい頃から仲が良く、王様とシードは同じ学院で同じ師に剣を教えてもらった仲間でありライバルでもあるそうだ。

王様は王位に就いて信頼できる者を側に置いたため親衛隊というのを

作っただって。

で、シーダは当時、親の希望に沿って学院だけは卒業したけど騎士にはなりたくないとの親の領地に引ッ込んで農業に勤しんでいたらしい。

それを王様は強引に説き伏せシーダを親衛隊に入隊させたんだって。のらりくらりしてれば愛想を尽かされるだろうと思っていたが、拳げ句の果てには副隊長という肩書までつけられてしまったんだと。この王様ならそれも有りってカンジするけどさ。

「私のベッドにいた理由は、アキヒサが離してくれなかったからだよ。」

あの時、湯あみ場に私もいたんだ。あそこは出入り口が二ヶ所あるのだよ。

アキヒサと違う扉から入ったらいきなり少年が湯釜に飛び込んで驚いたよ。

慌てて腕を伸ばしたらアキヒサが掴まってきたんだ。私はアキヒサの命の恩人だと思うのだけど？」

「っこり笑って俺に訊いてくる。」

な、なんだよ。

何か企んでんじゃないだろーな？

でも確かに王様は俺の命の恩人かも…。

「助かりました。ありがとうございます。」
頭を下げる。

（助かりましたありがとうございますですぞうだ。）

「お礼はほっぺにチューしてほしいんだけど。」
「ぶーっ！！」

思わず吹く俺。

なっ、何っつー事言うんだ！

セクハラ！

この王様、セクハラしてきますよー！

誰か諫めてくれる良識人はいないのか？！

「ま、間に合ってます……」
自分でも意味がわからん。

どうやって相手を怒らせずにノーと伝えるのか。

(冷めないうちに食事にしましょう。)

あゝ。

おっちゃんありがとう。

「ちっ」

王様の舌打が聞こえたけど、聞こえないフリで手を合わせる。

俺はこれ以上王様に絡まれるのを防ぐため食事に集中。

もう、誰が話しかけてきたって聞かないぞ。

今は食事の時間なんだから、無駄口きかずに食えっただ！

あんなに気にしていたテーブルマナーも知ったことか！

俺は皆が啞然と言葉をなくすほどにたらふくひたすら食い続けるの
だった。

続 俺と王様（後書き）

24話にくっつける予定だったのに忘れてアップしてしまいました。
なので短めデス。

ボーイズラブにはなりません。一応念のため（・・；）

俺と幼女

食事が終わった途端舟を漕ぎはじめた俺を見て姫さんが詳しい話は明日にしましよと打ち切り、俺は来賓用の部屋の一つを借りて寝ることに。

用意されていた寝間着に着替えておっちゃんと共にベッドへダイブ！のび太並みの瞬発力で布団に潜る前に意識が飛ぶ。

そして朝　　。
ずびび。

（途中何度か声はかけたのだが：大丈夫か？医者に診てもらった方がよいのではないか。）
うーん。

あんま薬とか飲みたくないんだよな。

だから今日は一日様子見しよつと。

案の定とゆーか自業自得とゆーか俺は隙あらば垂れてくる鼻をすする。

あー。

来賓室の寝室には大きな木枠のガラス戸が詰められていて開けるとベランダへと出れる。

俺は換気じゃないけど肺に綺麗な空気を取り込みたくなって寝間着姿のままベランダへ出てみた。

見える景色は昨日俺が走り回った王城自慢の庭園だ。

周囲を囲むように薔薇が植えられていて中央には名前が分からないけどピンクと黄色の花々が咲きほこっている。

綺麗だよな。

あつ。

そーだ。

庭師の人に俺謝らないと。

あれだけバツキバキに枝を折ったのだ想像できないけど見るも無惨な状態のはず。

なんて事を考えながらテラスの手すりから身を乗り出して下を覗きこんでみた。

お。

庭師っぽい人が歩いてる。

「今から追いかけて謝ろう。」

(着替えた方がよいぞ！まだ寝間着のままだからな。)

「オツケー！今着替えてくる！」

俺は部屋へと戻り昨日の服を再び身につけてテラスへ戻った。

「こっから跳んだ方が早いよな。」

(いいぞ。私をしつかり離さないようにな。)

ガラス戸に立て掛けといたおっちゃんを片手で掴んで手すりをよじ登り跳ぶ。

とおっ！

おっちゃんと出会ってから俺の中で怪我に対しての恐怖感が麻痺しちゃってる節がある。

普通なら怪我が怖いから2階とはいえベランダから飛び降りるマネなんてしないもんな。

スタツて感じに上手く着地できた俺は体操選手もしくはグリコのマークのように両腕を上げてみた。

よしっ。

10点ゲット！

さーて、さっきの庭師の人を見つけねば。

まだそんな遠くには行ってないと思うんだけどなー。

「なーなー。おっちゃん。昨日姫さんと遭遇しちゃった場所分かる？」

(うむ。分かるな。)

「じゃあ、そこで待ってよう。」
この広い庭で人を探すのはしんどいので俺は現場に先回りして待つことにした。

俺はおっちゃんの指示に従って庭をのんびり歩く。

ん？

あれって人間だよな？

途中、目にとまったのは赤い小さな花々が咲いている垣根に頭を突っ込んでいる子供。

ドレスを着てるから女の子だよな…多分。

何やってんだろう？

「何やってるの？って訊いてみてほしいんだけど。」

（おい。その娘。何をやっている？）

女の子の体がビクっとなって垣根から頭を抜く。

キョロキョロしてそれから俺を見つけるとこちらを人差し指でピシッと指した。

「お主か！？奇っ怪な術を使ったじゃろ？」

あー。

まあ。

そうです。

コックリすると女の子はすたすたこちらに寄ってきた。

「お主、魔術師じゃな？わらわの頭に魔術か呪いをかけたのか？」

ギリギリ逃げられるくらいの距離を置いて女の子が言う。

近くに来て分かったのは女の子の可愛い容姿。

人形みたいだな。

薄いピンクの髪を頭の上の方で二つに縛っている。

肌は透明感とミスミスしさに溢れた白。

目は大きくて陽の光の下だと白眼部分が金色に見える。

見た目の年齢は小学生の低学年くらいか。

なんで小学生がこんなところにいるんだろう？

「魔術師じゃないけど特別なんだ。」

（魔術師ではないし、魔術も呪いも使ってはいない。）

「では何なのじゃ!？」

（名乗ってもいない者に教える気はない。）

「うぐつ。…わらわは、ミレーヌじゃ!」

（私は主を守護する剣でアルトと言う。主の名は明久殿だ。）

「剣!？剣がしゃべっておるのか？」

（そうだ。私は主の代わりに人間と話せる剣なのだ。主はこの世界の言葉が分からぬのでな。）

ミレーヌは今自分が剣と話している事に驚きつつもなぜかおっちゃんを気に入ったらしい。

俺そっちのけでおっちゃんとミレーヌの会話は続く。

どっちかというミレーヌが一方的に興味津々でおっちゃんは冷たい感じ？

おっちゃん子供嫌いなのかな？

（ここで何をしている？）

「隠れておったのじゃ!」

エッヘンって感じに胸を反らすミレーヌ。

（バカか娘。頭だけ隠してどうする。）

あー。

頭隠して尻隠さずってやつ。

「むつ。体はドレスが緑だから何とか隠れておる!」

（お前を探している者はよっぽど目が悪いのか？じゃなきゃバカだな。）

おっちゃん容赦ないな。

「…そっかのう?」

うわっ。

丸め込まれてるし。

（隠れるなら徹底して隠れる。隠れる気がないなら相手の視界に入

つている状態で捕まらない様逃げろ。その方が相手を挑発し悔しがらせる効果が高い。」

なんつっー事を子供に教えるんだよ。

挑発の仕方なんて知らなくていいと思う。

「なるほど。お主の言う事も一理あるのう。ではわらわもランディーを悔しがらせてみるのじゃ！」

ん？

今の…！

ミレーヌの口から出たのはもしかや王様の名前じゃないか？

おっちゃんも気付いたらしい。

（ランディーとは国王の事か？）

ミレーヌはふふんって感じに両手を腰にあてる。

「そうじゃ。わらわの夫、ランディーは国王なのじゃ！」

いっっ！！

今。

今。

何て言っただー！？

うっかり聞き流しそうになっただけどっ！

（なに？娘は国王と結婚しているのか？）

おっちゃんもびびってるのが分かる。

「そうじゃ！わらわは国王妃ミレーヌ＝グレゴリウス＝ニール＝アルギダなのじゃ。」

マジでか！？

セクハラホモな上、幼女趣味！？

日本じゃ完ペキ犯罪者じゃねーか。

鼻をすする事も忘れ、鼻垂れなまぬけ面で俺はミレーヌを見たまま立ち尽くす。

その頃、城内では来賓室に俺の姿が無いことでシーダをはじめとする親衛隊が搜索に駆りだされている事などこの時の俺は知るよしもない。

俺と幼女（後書き）

テガミバチというアニメをたまたま観たんですが・・・ミレーヌとイメージばちこーんなコが出ていました。あんなカンジです。

続 俺と幼女

今、俺とミレー又はウワサの現場へとテケテケ歩を進めている。

あの後、先を急ぐ俺達はミレー又を置いて立ち去ろうとした。

そしたら、ミレー又が理由を聞いたがるのでおっちゃんが説明していた。

そこまではよかったのだが、それを聞いたミレー又は自分も付いて行くと言つてきかない。

「上手く謝るのじゃぞ。いざとなったらわらわが助け船を出してやるのじゃ」

(助け船?泥船の間違いだろう。)

「なんじゃとー!」

ムキになっておっちゃんに言い返すのはいいけど、それってイコールおっちゃんを持つてる俺に向かって言ってるわけで、自然と二人を宥める係になってしまっている。

「おっちゃんが油を注ぐからミレー又さんがこうなんじゃないかと思っただけ。大人な対応お願いしますよ。」

(……………うむ。)

なんですか、その微妙な間は。

(娘。淑女たる対応を明久殿は求めているぞ。)

おい、俺の言つた事にするのかそれ!?

ま、いいよ。

なぜだかミレー又は俺に対してはもじもじと大人しい。

今更な気がするけど…。

(なんで明久殿と私とで対応が違うのだ?)

おっちゃんもそれは疑問だったらしい。

「アキヒサ様はわらわをきちんとレディーとして扱ってくれるからじゃ!」

扱った覚えないんですけど…。

俺がした事といったら、ミレーヌのドレスに付いてた葉っぱをとってやって、今現在は右手でおっちゃん、左手でミレーヌの手を握っていることぐらいしかやってない。

子供扱いはしたが紳士な対応はしてないと思う。

（娘。明久殿の優しさを勘違いするなよ。）

「勘違いとはなんじゃ！？わらわは人妻ぞ。不埒なマネなどせぬわっ」

俺もしないよ。不埒なマネはっ。

「おっちゃんそのまま伝えて。とにかく心配してくれてありがとう。」

（心配してくれてありがとうだそうだ。）

「ほらもう。やはりアキヒサ様は優しいのじゃ。」

あー。

ハイハイ。

二人で仲良くやっててクダサイ。

風邪が悪化したのかしんどくなってきた。

なげやりな対応も許してほしい。

そんでもってよーやく俺がベツキベキにした現場までやってきた。

現場の惨状に俺は言葉をなくす。

あちゃー。

こりゃヒドイ。

ってか人の背丈ほどもある垣根をそのまま力まかせに突破したんだからこーなるのは寧ろ当たり前だよな。

「待つか…」

（椅子にでもなった方がよいか？）

あー。そーいえば。

おっちゃんは変化の術を使えたんだっけ。

説明受けてからまだ4、5日しかたってないよなあ。

すっかり忘れていた俺は久々におっちゃんをベンチに変えてみることにする。

「ミレーヌ。ちょっと離れてて。」

(娘、少し離れている。)

俺はミレーヌの手を離す。

そしておっちゃんを両手に持って想像する。

描いたのはよくガーデンリングをやるウチの庭とかに置いてある鉄でできた白いベンチだ。

背もたれや座る部分の花や蔦でデザインされている。

それを思い描いて、

「変われ！」

ドロンとなつて視界を遮る煙がなくなった時、そこにあつたのは想像通りのベンチだった。

「ありがとう。ミレーヌさんもどうぞ。」

俺はビツクリしているミレーヌの手を取りベンチに座らせる。

「アキヒサ様は神様みたいになんでもできるのう。」

いやいや、何でもできるのはおっちゃんだけだな。

どっちかつつーとおっちゃんの方がよっぽど神様っぽい。

ミレーヌはその後もひたすらしゃべり続け、俺は相槌を打ちつつ耳を傾ける。

暇だし、ダルイしで何も考えられない。

ぼくつとする頭。

熱でも出てきたのかも？

まあ、後になつて考えてみるとそれもそのはず。

春とはいえ昨日の着替えは室内にすることを前提にしているわけで

…元々風邪っぽいのに薄着で長いこと外にいるなんて悪化したって文句は言えない。

(人の気配が近づいてくるぞ。)
お。

庭師の人がやってきたのかな？

俺はフワフワ夢心地な状態でどうやって謝ろうと考える。

丹精こめて世話している庭をめちゃくちゃにしてしまつてすみませ

んでした。

素人ですが垣根の修理を手伝わせてください。

こんなカンジかな？

俺は熱で涙目になっていて自覚もなく回らない頭をフル回転。

ガサガサ。

人の足音がすぐ近くで聞こえる。

意識朦朧の俺はもう座っているのもしんどい状態。

目を瞑って隣に座るミレーヌに少し寄りかかっってしまう。

「アキヒサ様？どうしたのじゃ？」

ミレーヌの心配そうな声にも答える余裕なし。

あー。

ダメかも。

「アキヒサ様！」

遠く呼び掛けるミレーヌの声が消える。

俺の意識はそのままブラックアウトしたー。

続 俺と幼女（後書き）

ハイ。

ここまでお付き合いいただきありがとうございます。

夢の中

混じりけのない純白の白の空間！。

まえに一度見たことのある景色に妙な懐思感を覚えた俺はゆっくり周囲を見渡す。

もしかしたら俺の知ってる人物がいるはず。

「シルス！」

声に出して呼んでみる。

「あれ？あきひさがいる。もうみつけてくれたの？」

おわっ！

出た！

声は背後から。

ガバツと振り返るとそこにいるのは案の定、金髪パーマの1mもない身長の子ビッコだった。

言いたいことはたくさんある。

愚痴も満載、てんこ盛り。

けど、今とっても俺が知りたいのは別の事。

「シルス。俺、シルスに訊きたい事があるんだ。探しものなんだけど、それって人間なのか？」

シルスは笑顔で頷く。

「そう。みつけてほしいのはぼくのいもうと。」

はあ？

いもうとって？

なんだなんだ。

どこのテレビ番組のごとく生き別れになった妹を探すのか？
いつとくけど俺にそんな探偵みたいなスキルないぞ？！

「いもうと？妹…って人間なのか？」

「そーだよ。」

確か、シルスは調停者とかゆー神様みたいなモンなんじゃなかった

のか？

天国・・・じゃないけどここみたいな現実離れしたとこに住んでんじゃないのか？

「いもうとって何モンだよ！」

ついツッコミ口調になってしまっ。

「せいかくにはいもうとのたましいをもったままてんせいをくりかえしてるんだよ。」

あー。

ナルホド。

妹の魂を持ったまま転生して、転生してんの？！

神様とかも転生するの？

って神様に寿命とかあるの？

俺は次々浮かぶ疑問にあわあわしてしまっ。

「ぼくもいもうともむかしはにんげんだったの。いもうとはまだにんげんだよ。」

へえ〜。

今イチ、神様システムよくわからないけど〜そこで引っかかると長くなりそうだよな。

シルスも元々は人間なのか。

しっかし、今の姿が人間だった時と同じならあつと言っ間に誘拐されそうだ。

妹さんは大丈夫なんだろうか。

何から訊いていいものか。

とりあえず〜ってカンジで。

「妹さんの事でシルスが知ってる事を全部教えてくれないか？」

イマイチ妹さんのイメージがつかないからさ。

シルスはいいいよってカンジに微笑んで言っ。

「いもうとはにんげん。」

いもうとはぜんせのきおくをすべてもっている。

いもうとはせかいをうらんでる。だからせかいをこわそうとしてる。

いもうとはおんなとはかぎらない。としもわからない。

いもうとのちかくにはあきひさがもつのおなじうでわがある。

うでわはふたつだけとはかぎらない。そんならいかな。」

えっ！

うえ　　？！

ってゆーか、妹さんは世界を壊したがつてるのか？！

それってどーゆー事なんだ？

俺がそれを訊こうとしたその時。

「あっ！」

あっ！

またもや俺の立っている地面にマンホールみたいな穴が開く。

吸い込まれるみたいに俺は落ちた。

なんてゆーかさ。

床のないエレベーターにいきなり乗せられるカンジっつーの。

心臓に悪い。

ついでに気分も悪い。

俺は絶叫マシンとか好きじゃないんだぞー！

「突然出てくんなっつーの！」

せめて文句ぐらい言っておきたい俺は上にまだいるであろうシルス

に向かつて叫ぶ。

ま、返事なんて聞こえないんだけどさ。

目が覚めて、まず周囲を見回した。

来賓室かな？

昨夜はあっという間に寝てしまった為、天井の記憶がない。

(明久殿！目覚めたのか！)

寝起きのぼーっとした頭におっちゃんの声が飛び込んでくる。

「あー。おはよ。ところでここどこだ？俺、庭にいたはずなんだけど…」

さっぱり状況の分からない俺はキョロキョロおっちゃんを探す。

あ。

ベッドの右横に違和感バツチリなベンチがある。

誰に運んでもらったんだろう？

(明久殿は3日ほど眠ったまま目覚めなかったのだ。ここは私達がいた来賓用の寝室だ。)

「3日！？そんなにたってんの！」

俺とシルスがちょびっと会話してる間にこちらでの時の流れの早さに正直ビビる。

浦島太郎じゃないんだから。

ガチャ。

扉の開く音。

と同時に。

「アキヒサ！目が覚めたのか？！」

驚くシーダと見つめあうカタチになった俺はどうやら相当心配をかけてしまったらしい。

俺はもう大丈夫って風に胸を拳で叩くジェスチャーを試してみた。

上半身だけベッドから起こした状態の俺に近づくとギュッと抱きしめられる。

「心配かけちゃってゴメン。もうなんともないから。」

(心配をかけてすまないだそうだ。)

「そうか。よかった。」

シーダにむかっておっちゃんが通訳する。

あれ？

あれ？

なんだか俺がぐーすか寝てる間に二人の間の空気みたいのがなごん

でいるような気がする。

王都に着く前とか、おっちゃんは気が合わないうって感じだったからできるだけシーダについての話題を避けていた部分もあったとゆるいのにどーしたんだ？

俺が不思議に思いつつも何となく聞けないでいるのを察知したのかおっちゃんの声が響く。

（明久殿が意識を失った時、現れたのがシーダ殿だったのだ。で、頼んで私も運んでもらった。明久殿に風邪をひかせてしまった私の話をシーダ殿は責めるでもなく聞いてくれた。）

それで、おっちゃんはシーダと歩み寄ったのか。別に風邪を悪化させたのは俺の性なただけど。

「ありがとう。おっちゃんもシーダも。」
つくづく俺は人間関係恵まれてるなって感じる。

結局俺は風邪をこじらせてまで出向いた庭で庭師の人には謝れず。また、行かないとな。

現場を見て、あれは絶対激怒すると思うんだよ。俺が庭師だったら一発ぐらい殴ってる程度にあればヒドイ。

後でシーダに言っただけで謝りに行くことと。
あ。

そーだ、夢の中の事話さないと。
だてに浦島太郎になってたわけじゃないぞって感じに俺はおっちゃんに話しかける。

「あ。そーだ。俺らの探してるものが分かったんだよ！」
（なに?!）

「探しものはやっぱり人間だって。でもって、シルスの妹なんだってさ。」

（シルス殿の?!）

「しかも、妹さんは世界を壊そうとしてるらしいんだよ。」

（・・・では、姫巫女の言っていた黒髪の救世主とは本当に明久殿の事なのかもしれんな。）

えっ。

あっ。

いつ。

そーか、今まで俺は勘違いで連れてこられたつもりだったけど・・・
世界を壊そうとしてる妹さんを探す事が俺に託されている今の使命
だとしたら・・・その可能性もありえるんだな。

一気にテンションさがるんですけど。

こーなったら、姫さん達を巻き込んででも俺の探しビト任務を完了
させるぞ〜！

夢の中（後書き）

ハイ。毎度ありがとうございます。

月日のたつのは早いです。

ボヘーっとしてたら数日過ぎてました。

番外編 シーダ1 (前書き)

3話にわかれています。
まずは前半です。

番外編 シーダ1

燦々と照り付ける太陽は夏　　。

草木は青々と繁り、時折、心地好い風が頬を掠めてゆく。

ひたすら続くかと思われる長い農道を今、ロバの様な脚の強い馬が一頭、藁の載った荷馬車をひいている。

馬車を操っているのは無精髭を生やした歳の頃、50過ぎの農夫だ。藁がたんまりと積まれた荷台には年若い男が一人。

濃い茶色の綿でできたズボンに上も綿でできた浅黄色のシャツ。

腰には前腕ほどの長さの短剣をぶら下げ、丈夫な帆布で作られた1m程の長さの袋を藁の上に置いている。

そして何より目を惹くのがアルギダでいないわけではないが稀である黒髪。

よく見ればそれは漆黒ではなく紺色なのだが、紺は紺で珍しい事に変わりはない。

もうすぐ通過する小さな村はアルギダで消費される麦の四分の一を生産している。

麦以外の産業はほぼ無い。

観光するような場所もない為、外部から村を訪れるような物好きもいない村。

「ここで停めてもらえるか？」

荷台の藁の上にいる男が言う。

「シーダさん。あなた、こんな何もない村に何の用だい？」

農夫は馬車を止め、興味津津訊いてくる。

特に隠す理由も無い為、男はすんなり素性を明かす。

「俺は植物学者で、専門は麦の品種改良なんだ。」

「へえ」。あなた植物学者なのかい。おりゃ、てつきり旅の剣士か

「思ってたよ。」

「……よく言われる。ま、旅に危険はつきものだからな。まるっきり腕に覚えがないわけでもない。」

そう言つて藁の載つた荷台から荷物と一緒に飛び降りる男は眩しいほどの笑顔を農夫に向け、頭を下げる。

「ワイルダーさん、ありがとう。途中拾ってもらつたおかげで早く着けた。」

「まあ、困つた時はお互い様さ。おれも道中、話し相手がいて飽きなかつたさね。」

それじゃと荷物を肩からぶら下げ、シーダと名乗つた男は脇道に逸れて歩を進め始めた。

これからちよつとした事件に巻き込まれるとも知らず。

歩いてすぐにその集落へと辿り着いたシーダは先の道を歩く一人の少女に声をかける。

「おい！忙しいところすまないが、この村には宿があるか教えてくれないか？」

シーダの声に振り返つた少女はシーダの顔を見て頬を赤く染め、立ち尽くしている。

「……。」

「宿を知りたいんだが……」
言葉を失う少女にむけてシーダは繰り返す。

「あつ。い、いいえ！この村には宿はないんですっ！」
慌てて質問の意味を理解すると少女は口を開いた。

「そうか……まいったな」
呟くシーダに向けて少女がハツとして言う。

「もしかして！あなたが村長が依頼したつていう賞金稼ぎの人！？」
「は？賞金稼ぎ？」

「賞金稼ぎさんなら、ここを真つ直ぐ行った所に村長の家があるんでそこに行くといいです！」

「いや、ちよつと・・・人違い」

「真つ直ぐ行った一番大きい家なのですぐに分かりますよ！」

少女はシーダを賞金稼ぎと決めつけ話を進めてしまう。

「私、これから行かなきゃいけないトコがあるんで連れて行ってあげられないですけど・・・村の為にもしっかりお願いしますね！それじゃ！」

少女は言うだけ言うとキャツキヤとその場を駆け足で去って行く。

「あ。ちよつと・・・」

状況がさっぱり分からないまま取り残されるシーダ。

（賞金稼ぎって何だ？・・・とりあえず村長の家に行って宿の相談を試みるか。）

村で一番大きい家ならば空いてる部屋もあるかもしれないとシーダは言われた道を真つ直ぐに歩きだした。

言われた通り村長の家はすぐにあった。

レンガ造りのその建物は広々とした麦畑に囲まれている。

「ここか。」

建物の入口、扉のベルを鳴らす。

すぐに扉を開ける気配がして施錠を外す音がガチャガチャと鳴る。

「どなた様でしょうか？」

召使いとおぼしき老年の女性が出てきて問う。

シーダは貴族用の振る舞いへと態度を変えて接する事にする。

「私は全国を旅している植物学者でシーダ「ヴィトシュワール」ホーン「ハウゼンと申します。」

今夜の宿を探しているのですが、村長にお目通り願えませんか。」

「まあ、こんな辺鄙な村にわざわざ・・・貴族の方ですね。お

入りになってお待ちください。」

シーダは招かれるまま館の中の一部屋に通された。

「今主人は他のお客様と会っております。終わり次第、こちらに参りますので少々お待ちくださいませ。」

「わかりました。ありがとうございます。」

女性はすぐに部屋から出て行った。

シーダはソファーには座らず部屋を壁伝いに歩く。

部屋は地味だが、棚に置かれている置物は品の良い上等な品とすぐ分かる。

ソファーや他の装飾品も主人の趣味の良さを伺わせる。

王城よりよっぽど居心地のよい空間になっていて、まだ会っていないが村長の印象は良い。

女性がお茶の準備をして戻ってきた。

「どうぞ。」

「ありがとうございます。」

ソファーへと座り、テーブルに置かれたティーカップを手取る。

「この館に来るまでにあった麦畑は皆、ここの主人のものですか？」

「そうです。何人が雇って麦を育てております。」

「後で麦のサンプルをいくつかいただきたいなと思ひまして。私は麦の品種改良をメインに手掛けているものですから。」

「そうですか。では主人に訊いてみるとよろしいかと思ひます。きつと悪いようにはしないと思ひますよ。」

二人でそんな会話をしていると、扉をノックする音が響く。

「やあ。お待ちせして申し訳ない。私がこの村の村長をしているヒイガロムントゥサンロテだ。」ヒイガロと立ち上がったシーダが互いにながちりと握手を交わす。

ソファーに座りシーダは宿の件を話した。

「私は植物学者でシーダゥヴィトシユワーヌゥホンゥハウゼンと申します。麦の品種改良を専門にしています。この村で数日の間、麦のサンプルを採取させていただきたいと存じます。つきましては宿

の代わりとなる家を紹介願えませんか？」

頭を下げるシーダを主人は制す。

「こんな小さな村にわざわざ足を運んでくださったのだ。ぜひ、この館にお泊まりください。」

泊めてくれるといいなと淡い期待を抱いていたので心の中でガッツポーズをとりつつ、シーダは笑みを絶やさず言う。

「では、ありがたく使わせていただきます。」

「ところで、今この館にはシーダさんの他に賞金稼ぎの方々が多名ほど泊まっておりますのでその方達が隣の部屋となります。」

「賞金稼ぎ？・・・村で何かあったようですね。」

シーダは控えめに問いかける。

「その話は誰からお聞きに？」

「いえ、誰からも。ただ…道中で私はその賞金稼ぎと間違えられた様なので。」

ふんわり優雅な微笑でシーダが言う。ヒイガ口はなるほど頷いた。「実は最近になって村の家畜を狙う野犬の被害に頭を悩ませていましたね。」

ギルドに依頼を出したのですが、何分王都からだいぶ離れたこんな田舎までたいした報酬でもないのに来てくれる賞金稼ぎがいませんで困っておったのです。・・・そうですね、シーダ殿は確かに植物学者というより剣を生業にされている方に見えますな。」

「まあ、こうして旅をしていれば危険な目に遭うのも一度や二度ではないですから、軀を鍛えるようにはしていますけどね。」

ヒイガ口はそれを聞いて微かな期待を込めて口を開く。

「どうぞでしょう。研究の合間だけでも結構なので彼らと共に野犬狩りに参加してはいただけませんか？」

「はあ？」

「一人でも多い方がいいはずですから！よろしくお願いしたい！」
(なっ!?)

驚愕するシーダをよそにヒイガ口は頼んだとばかりに急ぎ席を立つ。

入れ替わりに召使いの女性が部屋はこちらですと促す。

「なんてこった…」

「さあ、行きましょう。」

案内される後をついていきながらシーダは己の運の無さにぐったりとうつつ向く。

案内された部屋は大人一人がゆったりくつろぐには十分な広さがある。

窓2つからは光が入り、白壁の部屋を明るく照らす。

二脚の木製の椅子と食事用のテーブル。

シングルベッドが置かれているシンプルな部屋の片隅に荷物を置き、ベッドに体を横たえる。

「まいったな。…王都から持ってきた剣を使うはめになるかもしれないとは。」

大きな荷物の中身は親衛隊で使っている剣と僅かな着替え、そして植物サンプルを採る為の器具が入っている。

シーダは元々、学院でも飛び級に飛び級を重ねた秀才でもある。

専攻は植物 特に穀物の品種改良だ。

選択科目で剣術をとってみたのは昔から体を動かすのが好きというたいしたことのない理由だった。

その教師から私では相手にならないだろうからこちらの先生に変わってほしいと言われたのは剣を握って4カ月後の事。

新しい教師の元に行ったのはシーダとランディーの二人だけだった。そこから二人の腐れ縁は続く。

シーダとしては、興味本意だけで始めた剣術だったので当然それで食っていきこうなどという気もなく、学院を卒業したらハウゼン家の領地の畑で研究に没頭するつもりでいた。

アルギダ国内はシーダが卒業間際の当時、先王と兄が病で急逝し、

身分卑しい側室の子であったランディーが王位を継ぐ事になったりで何かとバタバタしていた時期。自分には関係無いつもりでいたのだが、ランディーは王が管理する親衛隊を作るから入ってくれと言う。

シーダが断ると、ランディーは権力を盾に強行手段に出た。

シーダの義理の兄にあたるハウゼン家の嫡子を主要ポストから外すとシーダの義母にさりげなく告げたのだ。

今まで冷たい仕打ちをすることなく優しい義母にシーダは逆らえない。

泣く泣く頼みこまれては頷くしかなかった。

ランディーに仕える事になったシーダはひとつ条件を出す。

それは、アルギダの王城外、間諜の任務を自分に回してほしいという事。

そして、任務の傍ら研究もさせてくれというものだった。

渋々承諾したランディー。

シーダ本人は、何とか城から遠ざかるうとした苦肉の策だったのだろうが、実際やらせてみると本人のやる気の無さに反比例するように次々と成果をあげてしまった。

今回は隣村　　と言ってもだいぶ離れているがそこでの情報を記した紙を伝達鷲に括り放った後、そーいえばとこの村の事を思い出したのだった。

ガンガンッ！

物思いに耽っていたシーダの思考を遮って乱暴に扉を叩く音が耳に入る。

召使いやヒイガロはきつとこんな叩き方はしない。

となれば思うのは……

「賞金稼ぎか……」

やれやれと重い腰を上げて扉を開くと案の定、目に飛び込んできたのはなるほど、ヒイガ口が不安に思うわけだ。

頭は回りそうだが体は細く痩せている剣を腰から提げた男と、力はあるそうな2mを越す巨体だが知能の低そうな男。

更に紅一点の女性は、花町にいる娼婦のような際どい露出のドレスを身に纏っており、顔立ちのきつい美人。

(女王様と犬二匹…だな。)

「あんたが俺らと一緒についてきたいって言ってる学者先生か？」
痩せてる男が言う。

(いや、これっぽっちもついて行きたいなんて言っていないけどな。)
プライドの高い彼等を気遣ってヒイガ口はシーダが頼んだ事にしてあるらしい。

反論する気力もないシーダは頷く。

「連れてくのは構わないが、あんた自分の身は自分で守ってくれよ！あんたの護衛は料金に入っていないんだからな。」

溢れそうになる溜め息を飲み込んでシーダは口を開く。

「…分かっている。俺はいないものとして考えてくれて構わない。」

(むしろその方が助かる。)

シーダは会って数分にして、早々部屋に戻りたくなってきた。

げんなりしつつ、それじゃと話を切り上げようとするのを遮る声。

「ダン、おだまり！」

女王の一喝にだまる男。

「先生、今日は挨拶に伺わせていただきました。私はこのパーティーのリーダー、リアルと申します。で、こっちの細いのがダン。後ろの大きいのがロップ。明日からよろしく。」

艶やかな微笑を口に浮かべ、アリアと名乗る女はシーダの耳元でそう告げた。

好みでない香水が鼻につく。

「俺はシーダだ。よろしく。」

(できるだけ彼等とはかわり合いにならないようにしよう。俺の

カンが避けると言ってる。()
そして、そのカンは外れる事を知らない

。

番外編 シーダ1 (後書き)

顔良し、文武両道、貴族と嫌味なくらいのシーダですが徹底的に運がない日常を送っていますよってゆーハナシ。

番外編 シーダ2

そして翌日。
必要以上に関わりあいをもちたくないシーダは賞金稼ぎ達と食事を別々にしてもらっていた。

今日の朝食時になって知ったのは、昨日召使いだと思っていた女性がヒイガ口の妻だったという事。

使用人は一人しか雇っておらず、昨日は休みの為夫人自ら働いていたのだという。

格好が違っただけなのに今日の女性は、きちんと屋敷の主人の妻らしい雰囲気を漂わせている。

「この村はずっと長い事、アルギダの中でも貧しい地区だったのはご存じか？」

麦栽培のノウハウを村民に教育し、土壌の改良を重ね、何代もかけてようやくここまでできた。

だからなのか、ケチな癖が抜けなくてね。貴族とは名ばかり、屋敷こそ大きいが生活は質素なものです。」

恥じるように目を合わせないヒイガ口にシーダは周囲を見渡す。

「質素でもこの屋敷に置いてあるものは腕のいい職人が作ったものが多い。」

俺はこの屋敷の雰囲気や造りが地味ではあるが品があって好きだし、もっと誇っていいと思います。」

シーダに褒められたヒイガ口はそろりとシーダの目を見る。

視線の先には嘘偽りの無い微笑を浮かべたシーダの姿。

「そう言っただけで頂けると安心します。ありがとうございます。」

ヒイガ口は貴族にしておくのがもったいないくらいの謙虚さで答える。

シーダ、ヒイガ口、ヒイガ口の妻の三人で食卓を囲む。

二人には、今年12歳になる息子がいるそうだ。

8歳から王都にある学院に入学出来た為、現在は王都で寮生活をしているらしい。

（つて事は、俺の後輩にあたるわけか・・・。）
植物学者以外の肩書を話す気はないので、その事実はシーダの胸の中だが。

「俺はパンだけでも構わないのでお気づかない。・・・俺の分は部屋に持ってきてくださると助かります」

最初、シーダは一人で食べる予定だったがヒイガロが是非にというので断れず卓を囲むことになった。

「彼等とはどうも・・・そーゆー世界の方達は食事も豪快といいますか。」

（ああ。食事のマナーも完全無視な彼等の様子が容易に想像できるな・・・。）

「そうですね。私も食べ方はあまり洗練されていないので見苦しい点があるかもしれません。」

シーダがそう言ってナイフとフォークを扱うのを見てヒイガロは首を横に振る。

シーダの作法は生まれついてすぐからの教育ではないのでランディーや姫巫女のように骨の髄まで染み込んではいない。

それに間諜として立ち回る時にはワザと下品な達振るまいをする必要もある為、同じ動作ではあってもヒイガロと比べ雑な印象が拭えないのだ。

「で、先に食事を済ませた彼等は今どこに？」

「彼等なら、野犬を捕らえる為に罾を仕掛けに行ったそうです。」

（どんな罾を仕掛けるといのか？大抵の罾なら村人達だって仕掛けただろうに。）

シーダは、夫人に勧められたパンをもらいつつ会話を続ける。

「...彼等は今まで村人達が作った罾について聞いていかれましたか？」

「…いいえ。ただ犬達を一ヶ所に集める為に木柵に金属で棘のついたものを絡めるそうです。」

「ああ。有刺鉄線というヤツですね。」

ごく最近、そう言ったものが販売され、売れているというのをシードも聞いた事があつた。

「村でそれをやった事は？」

「王都では一般的に普及しているものかも知れませんがこちらまではまだ広がってはいません。」

効果があると思われませんか？」

ヒイガロは期待を込めてシードに訊く。

「どうですかね。学者には無縁な物なので…」

肩を落とすヒイガロ。

「そうですよね。シードさんなら博識そうだったので、つい答えてもらえるかと。」

「お力になれずすみません。」

「いえ、こちらこそすみません。シードさんの研究の役にたてるならウチの畑はお好きに使ってください。」

ヒイガロにそう言われシードは遠慮なく土壌と麦穂についてサンプルをいくつか摂りたい旨を告げる。

正直なところ各地を転々とするシードの現状では麦を実際に栽培することができない為、品種改良もできず、学者とは言っても名ばかりなのだが…。

食事を終えたシードは早速、ヒイガロの畑へ向かった。

朝から数人の農民が農作業に勤しんでいる。

ふと中にいた一人とぼつちり目があつた。

「あ！昨日の賞金稼ぎさん！」

(あれは・・・あん時の勘違い娘か)

「君は・・・」

「私はヒイガロさんに雇われているローゼといます!」

ローゼはシーダの近くまで寄ってくると勢いよくおじぎする。

「昨日はありがとう。俺はシーダ・・・それから、賞金稼ぎではなく学者をやっている。」

「ええーっ!賞金稼ぎじゃないんですか?!」

「ああ。残念ながら。」

がっかりするローゼに苦笑を浮かべるシーダ。

その時、和やかなムードの二人に割って入る声が響く。

「なんだ、学者かよ!」

ローゼと一緒に作業をしていたローゼと同年代の少年が叫ぶ。

「ローゼがかっこよくて強い賞金稼ぎが来たってふれまわってたからどんなかと思ってたら、学者とはなっ!学者なんて頭だけで腕はからつきしじゃねーか!」

「なによっ!学者でもあんたよりガタイだっ方がいいし、何より美形よ!」

たいして間違ってないわよ!イグーのバカ!」

(どんな風に触れまわったんだ?)

ローゼが勝気な口調で少年に言う。

はたから見れば、少年はローゼに好意を寄せているのだろう。

好きなコに意地悪をする少年の姿を微笑ましく思いながらもこのままではなかなか収まりそうにもない。

シーダは二人の間に割って入る。

「・・・淑女たるローゼ。俺は賞金稼ぎじゃないが、賞金稼ぎはヒイガロの屋敷にいる。」

野犬の被害も彼等が何とかしてくれるだろう。勘違いさせてしまっ
てすまなかった。」

シーダがローゼに向かってゆっくり言い含めるように言う。

少年と口ケンカ気味になっていたローゼは淑女という言葉に反応し、

急に顔を赤くしもじもじする。「やっぱりイグーみたいなお子様と違つてシーダさんは大人だわ。」

ボソツと言つたローゼの一言に下唇を噛むイグー。

イグーはシーダをひとにらみして作業に戻つていった。

(そんな睨まれてもな・・・)

「少しの間、畑の隅で作業してるが気にしないでくれ。」

ポクッとしているローゼを残して、シーダはそこから離れるとサンブルを採る為の器具を広げ始める。

コルクで栓をしたビンに畑の土を採り、麦穂のスケッチをとり細かな特徴をメモしてゆく。

こうやって地区ごとの土壌の違い、麦の品種の違いなどを記していく事でゆくゆくはそれを一冊の本にまとめたいとシーダは考えている。

その為に麦を作っている地域を大小関係なく全て巡る旅をしているのだ。

シーダは黙々と作業に没頭する。

一通りの作業を終えた頃には陽はほぼ傾きかげんになっていた。

一旦集中すると寝食を忘れてしまうのは学者タイプの人間に多かったりする。

例に洩れずシーダもそうだ。

つい先刻、朝食を食べたはずだが、もう夕食の時間に近い。

周りを見れば作業をしていた村人たちの姿も無くなっている。

片づけをして、ヒイガ口の屋敷まで歩きだす。

満足げに屋敷に帰るとヒイガ口が真っ青になって帰ってきたシーダに駆け寄る。

「ローゼという若い娘と賞金稼ぎの方達が行方不明なのです！」

どうか4人を探していただけませんか？今、村の男達も捜索にあたっているのですが、まだ見つからないのです！陽が完全に沈んでし

まう前に見つけ出さなければ！」

「分かった。」

急いで二人は他の村人達と合流した。

そろそろと闇の気配が近づくのを余所に四人の消息はぱったり途絶えたままだった。

ローゼは農作業をしてイグー達と分かれて家に帰る途中で。

賞金稼ぎの三人は有刺鉄線張りをしたまま消息をたっている。

朝、出発する時には日がくれる前には帰るとヒイガロに告げていた。何せ都市部のような酒場などの娯楽施設のない人口100人ほどの村なのだ。

そしてローゼをはじめとする村人全てが野犬の存在に怯えているなかでこの時間まで帰ってこないのはおかしいという事になったらしい。

「もしかして、森にはいったなんて事、ないですかね・・・」

ヒイガロがシーダに言う。

（さすがに、ローゼは森に入るとは思えない。あの三人は・・・ともかくとして。）

陽が沈み、シーダはヒイガロや他の村人達を家に帰らせ、一旦屋敷にとつて返し、ランプと普段は袋の中にしまつてある剣を携え、一人見回る事にした。

三人が行った場所についてヒイガロに心あたりをいくつか訊く。

（あの三人とローゼに接点があったとも思えない。ひとまず三人が巡った家の中の一件。最後に行った家に行ってみるか。）

シーダがその家を不審に思ったのは、夜間帯のこの時間に部屋から

溢れる灯りが少ない事。

そして、ヒイガ口からの情報によるとこの家の住人は三年程前にこの村へやってきたという。

王都でそこそこ成功したがその生活に疲れて農業をしたいとやってきた年の頃は40ぐらいの夫婦二人。

(突然、住み慣れた王都から村に二人だけで来るものか?)

そんな思考に沈みつつも、ちよつとした気配にも敏感に気を張る。

(っ!誰か来る!?)

小枝を踏みしめる僅かな音に肩をびくりとさせつつ、シーダは音のする方向から身を隠す。

音は徐々に近づく。

(野犬……とは違うな)

耳をすませばその音に混じるのは人間の声。

「あれを……見られた……あいつらをそのままにしておくとはできない。」

「やめて!……やめてちょうだい!!」

若い男の声とそれを止める年配女性の声。

女性は縋りついて男を止めようとしますが男はそれを振り払う。

「大丈夫だ。今なら野犬が襲った事にできる……。」

(おいおい……マジか。)

シーダはいつの間にか事件の渦中。

まさにど真ん中にいたのだった。

番外編 シーダ2 (後書き)

テストも無事乗り切り、気分スッキリな今日この頃。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

次回で多分完結です。(プロットとかつくった事ないんで断言できませんが・・・)

これからしばらくは頻繁に更新できると思いたい(願望)

番外編 シーダ3

現在、男と年配女性はシーダから距離にすると10mほどのところにいる。

シーダは物置小屋らしき建物の物影に身を隠し、聴覚だけに神経を集中させる。

（そのままにしておけないのは人間の事か？

・・・だとすると今、いない人間・・・あいつらだろうな・・・）

「これから処理する。しつかり見張ってるよ。」

「待って...」

男は女性の言葉に聞く耳をもたず、声が遠ざかってゆく。

（やばいな。）

何人いるか状況も分からない状態で今手元にあるのは剣一本のみ。慎重を期して応援を呼びたいところではあるが、そのまま移動する彼らから離れることはできない。

二人はシーダの存在に気づくことなく、家から森に向かって進んでゆく。

（行くしかないな。・・・頼むぞ相棒）

腰の剣に触れ、シーダはゆっくりと二人との距離を詰めて後を追う。ヒューヒューと木々の隙間を風が通る音。

葉と葉の擦れ合う音がシーダの進む音をかき消している為、近付いても彼らが気づく様子はない。

しかし、先ほど物陰に隠れた時、ランプの灯りを消してしまった為に手元、足元が全く見えない。

たいした距離を進んでいるわけでもないのにシーダの額からは汗が流れ落ちた。

時間にすれば15分ほどのところにその小さな小屋はあった。

男はその入り口に持っていたランプを吊るし、女性にここで待つよ

うに指示している。

夏だというのに女性は頭をすっぱりマントで覆い、背を丸め言われた通りに立っている。

（あの見張りの女性は何とかなるな。）

剣の心得がなさそうな女性にはさして見張りとしての役目を果たせるわけもなく、シーダは小屋に付いている窓に向かって距離を詰める。

男が小屋の中に入り僅かな灯りが洩れる。

シーダは身をかがめ窓下まで辿り着いた。

見張りの女性が小屋を一周するくらいに役目熱心であったならシーダの大胆な行動はすぐにはれただろうが女性は入り口から動こうとはしない。

そろりと頭を覗かせ中の様子を見ると……。

（正解か……。それにしても、この小屋は……。使われなかった屠殺小屋か？）

壁に掛っている錆気味な巨大のこぎりや鎌、様々な形状のナイフ。

一番太くがっしりとした天井の梁から垂れている鎖。

その鎖の先には、シーダや村人たちがいくら探しても見つけれなかった四人が、縄で腕を縛られ猿轡の布を噛まされて転がっている。ローゼは気を失っていたのか、男が帰ってきて灯りをつけた途端、布越しに泣き叫ぶ。

小屋の中は窓から見える一部屋だけの簡素なもので、捕まった四人とその男以外の気配は感じられない。

「お前達はこの小屋の存在とそこで俺が何をしているのかを知ってしまった。」

……。生かしておくことはできない。」

男はそう言って、壁に掛った巨大なナイフを手にする。

そのナイフだけは他のものと違ってきちんと刃が研がれている。

現役で使われているもの。

四人は震えあがって身をすくめる。

その様子に気を良くしたのか、男はアリアルルの口布をそのナイフでゆっくりと切り始めた。

「あっ・・・あっ、助けて。絶対、誰にも言いませんから。」
アリアルルは自由になった口を開く。

「だめだ。お前から切断して、この森の地中に埋めてやる。この森には村人は近付かない。叫んでも誰も助けになんてこないから無駄なことはするなよ。」

酷薄な笑みを浮かべる男の目には人を殺せることへの愉悅が浮かぶ。
(どうする？突入するか？・・・しかし、飛び込んで人質をとられたらどうする？)

救出方法をいくつか考えながら様子を見ていたシーダは、男がこちらを向く事に集中していた為、アリアルルが窓に視線を走らせた事に気づかなかつた。

「先生！！助けて！！！！」

あらん限りの大声をあげてアリアルルが叫ぶ！
至近距離にいた男は突然叫び、体当たりをしてきたアリアルル共々床に転がる。

男の手から入り口付近へと滑ってゆくナイフ。

「ばかつ！あの女！」

シーダはやけ気味に剣を抜き放ち窓ガラスを割って小屋の中へ飛び出した。

男が態勢を整える前に剣で足を斬りつける。

動脈まで届いたのか男の足から出た血はどくどくと溢れ、血池になっている。

「ぎゃあ！い、痛いよ！ママー！」

男が叫ぶのと見張りをしていた女性が小屋へ入ってきたのはほぼ同時。

「よくも！」

息子の惨状に思わず足元に転がったナイフを手に女性はシーダと対峙する。

「やめる。あんたがしなくちゃいけないのは俺を殺す事じゃない！息子の命を救うことだろう。」

お互い刃物を構え動けないでいるうちにも、男の足から出る血は止まらない。

「こんなに血が出てもう助かるわけない！息子の仇を取って、私も後を追います！」

「まだ助かる！今すぐ治療すればあんたの息子は死なない！……応急処置なら俺がする！」

シーダは女性の瞳が揺れた事を見逃さず、畳み掛ける。

「今、あんたがそのナイフを離せば息子は助かる。さあ……」

シーダは剣先を下ろして、ナイフを渡す様、女性を説得する。

「本当に助かるのね……」

「ああ。」

女性は力なく、シーダがナイフをその手から抜くのに抵抗することなく涙を流す。

「ありがとう先生！やっぱり、先生は私のナイトだわ。」

リアルが相変わらずのキツイ匂いをまき散らしながら言うのに、

一瞬シーダはこの場の誰よりも殺意を覚える。

シーダは四人の縄と口布を斬る。

震えるローゼに手を貸し、立ち上がらせる。

「ローゼ。君に頼みがある。今すぐ、村に行つてハミバルの葉と医者連れて来てくれ。」

「シーダさん。た、助けるの？」

震える声でローゼが呟くのにシーダはしっかりと頷く。

「頼む。」

「……分かったわ。」

ローゼは気丈に頷くと小屋から飛び出していった。

「おいっ！その三人、こいつの足を上に持ち上げてる！」

シーダは賞金稼ぎ三人に男の足を心臓より高い位置に上げさせ、傷口と太ももをズボンのベルトで縛るように指示する。

シーダの今にも人を斬り殺しそうな雰囲気三人は文句も言わず黙って従う。

失血のため気を失っている男に泣きながら縋る女性。

(命は助かるかもしれんが・・・もと通りには・・・)

シーダはここが屠殺小屋であるならば、もしかしたらあるかもしれない止血のための薬を探す。

暴れる家畜に怪我をすることがあるため、こういう小屋には大抵置いてあるものなのだが・・・。

「あつた。」

埃をかぶった棚にそれはあつた。

シーダは薬の缶を開けると中に入っている異臭を放つ物体を男の傷口に塗りつける。

だいぶ古いものではあつたが、塗った傷口からは血が零れなくなつた。

再び包帯代わりに布を巻きつけて一息つく。

「これで、傷が塞がればあなたの息子は死なない。」

女性はそれを聞き、ほっと肩を下ろす。

「・・・村で騒がれている野犬騒動はあなたの息子の仕業なのか。」

シーダが女性に向かって言う。

「えーっ！こいつが野犬の正体?!」

ダンが飛び上がるほどに驚く。

「ええ。そうです。・・・この子は昔から生き物の死骸にとっても興味を持っていました。そのうち、死生学や怪しげな宗教にはまってしまう、最初は虫などの小さなものを解剖し始めました。」

「虫では我慢できなくなつた?」

「徐々に鳥や犬に・・・だから、王都から離れた出来るだけ目立たない村を探して移り住むように・・・」

「・・・あなたが息子を愛してるのは分かつてる。けれど・・・」

「分かつています。私達夫婦は、息子を庇い隠すべきじゃなかった。」

「・・・・・・・・」

2日後

「お世話になりました。」

荷馬車に乗り込むシーダを見送る、ヒイガ口、ヒイガ口の妻、ローゼをはじめとする村人達。

賞金稼ぎ達は前日にすすごと王都へ戻って行った。

アリアルには救助されてからあの手の手の誘惑を受け、ダンからは仇を見るような目で常に睨まれ、居心地の悪い事この上なかった。ローゼの呼んできた医者によって治療を受けた男は、シーダの予想通り片足を切断し、今もベッドから動けないでいる。

怪我の回復を待つてから処遇は決められることになった。

それから、ローゼとはあの後何度か会い、実はローゼとあの幼馴染とシーダは同い年の15であることが判明。

ローゼからは告白までされてしまったのだが、それはしっかりと断った。

「大したことも出来ずにこちらこそ申し訳なかった。」

「いえ。事件の後にはあんなごちそうまでいただいております。ありがとうございます。」

「感謝する。親衛隊は国王直属。普通なら、こんな田舎のちっぽけな事件になど関与もしないでしょう。」

そう、事件後屋敷に戻ったシーダの剣を見たヒイガ口はその持ち手に刻まれたアルギダの象徴ともいふべき薔薇と鷲を目にし、驚愕で言葉をなくしていた。

それを知るの二人だけ。

ヒイガ口はシーダが頼むと誰にも言わないことを約束した。

「では、また！」

手を振るシーダを乗せ、荷馬車が進む。
次は、アルギダの南方にある町へ。

その町でシーダと明久は出会う。

番外編 シーダ3 (後書き)

何とか終わった・・・。

手が、指がつりそうに痛いです (泣)

実は第一話から全てケータイのメール機能で打っております。

メモ書き（本編と関係ありません）（前書き）

設定を忘れてしまう事が多数ありまして、過去の話を読み返すのめんどいのでメモ書きです。
飛ばして次へどうぞ！

メモ書き(本編と関係ありません)

【身長的なもの】

明久 165cm
アルト 剣130cm 人192cm
シィダ 178cm(伸び途中)
ガル 195cm
ランディー 190cm
セシリア 168cm
ミレーヌ 120cm

【名前的なもの】

木戸明久(23) 主人公。
アルト⇨シールズ(死亡時35) 剣。
シルス(?) 調停者。
シィダ⇨ヴィトシュワーン⇨ホン⇨ハウゼン(15) 親衛隊副隊長。
ランティス⇨グレゴリウス⇨ニー⇨アルギダ(19) アルギダ国王。通称ランディー。
ミレーヌ⇨グレゴリウス⇨ニー⇨アルギダ(10) アルギダ国王妃。

ガルリアーニ＝ウイクスラー＝ホン＝スカルフイ（36） 親衛隊隊長。

セシリア＝ミリファ（16） アルギダの姫巫女。

ワイルダー（41） 庭師。

コールドー（20） 庭師。ワイルダーの息子。

ミク（5） ワイルダーの娘。

【人物背景的なもの】

明久

社会人1年目。実年齢より若づくり。痩せの大食い。集中力はあるが持続力はなし。短絡思考でややバカな面あり。誰とでも打ちとけるのが早い。近所に住む幼馴染と長年付き合っていたが、相手の留学と共に破局。今だ現役モデルの母と雑誌編集者の父の三人家族。現在、一人暮らし。

シーダ（明久目線：年下だけど近所の兄ちゃんの面倒見の良さ。

親衛隊副隊長。実年齢より老け顔。強いらしい。）

7歳まで母親と共に庶子として暮らすも、母病死のためハウゼン家に引き取られる。8～13歳まで王都学院の首席。学院は全国に20か所ある。が、なかでも王都の学院はトップレベル。試験に合格出来れば身分は問わず入学できる。通常入学8歳～卒業17歳。植物博士。3年飛び級の為ランディーの一年後輩。生い立ちとトラブル巻き込まれ体質の為、実年齢よりもかなり大人。剣の腕を見込まれ親衛隊入隊。15にして副隊長。ハウゼン家は王族の中でも宰相を数多く出す名門。妻子。姫巫女とは密かに幼馴染み。

アルト（おっちゃん。プライド高い。たまに大人気ない。強い。）

物心つく頃、両親を戦争で亡くす。孤児としてさまよっていた所を近くの村で兵士要員として保護されるも3年後脱走。森にて自給自足し生き延びる。たまたま、町で盗みに入った家の家主に気に入られ養子となる。が、戦争により養父母と恋人を亡くす。傭兵として戦場へ。その後、戦争屋として名を売るも推定35歳で戦死。

ミレーヌ（ちょっとおバカだけどかわいい。プライド高いけど意外と素直。俺より背がだいぶ低い貴重な存在。）

アルギダの隣国クリニザーク王家の長女。10歳。双子の兄がいる。代々アルギダはクリニザークから妃をもらう契約を50年前の戦争の際結ぶ。ランディーとは今年、政略結婚。かわいいものの好きのランディーには溺愛されている。

ランディー（女顔の変態ホモ。絶対性格悪い。シーダと仲良し？）
側室の子。正室の子である兄急逝につき王位継承。19歳。合理主義者。改革派。特技は相手の弱味を握る事。貴族に敵は多いが飴とムチでかわしつづけるやり手。城下の下水整備や病院の普及、独占商売の自由化など着手。

【地名的なもの】

アルギダ 西の大陸で最大の面積を誇る大国。元は小国だが、50年前の大戦で領土拡大。

クリニザーク ミレーヌの故郷。アルギダの更に北にある雪国。小国ながら軍事大国。鉱山資源が豊富。

ガラキスタ 東の大陸で最大の面積を誇る大国。

ムスカ アルギダの王都。

王城での平和な日常

あれから一週間。

何やかんやを遡ると

風邪が治って、現在俺は庭師の人達に混じって日々労働に勤しんでいる。

働かざる者、食うべからずなんて言葉もあるし、異世界にいてもそれはきつと適応なはず！

庭の手入れをしているのはハタチそこそこのコールドーさんとその父親のワイルダーさん。

たまにじーちゃんのセダーさんも手伝ってる。

この広い庭を普段は二人だけで整備しているらしい。

マジでか〜。

びっくり。

日本みたいに機械化が進んでるならまだしも、めっちゃアナログなこの世界。

花に水あげるのだってハンパない。

家族ごと城に住んでるそうで、俺はワイルダーさんの今年五歳になる娘さんの世話をしつつ、簡単な作業をさせてもらっている。

俺の素性は王様とシーダやガルさん、姫さんと一部の人達だけの秘密となっている。

俺が必死になつて頼んだつてもあるけど、神の代理人なんて立場を実際どう扱っているのか考えあぐねているっばいんだよな。

だから姫さんや王様のところに毎日一回は顔を出すって約束さえ守れば後は何をしても別に構わないとの事。

なら、とーぜん俺はメチャクチャにした庭をどーにかしたい。

ワイルダーさん一家には直接、シーダに案内してもらって謝りに行った。

俺の事を知らないコールドーさんやワイルダーさんにメチャクチャ

怒られ平謝りし、何日も謝り通いしてたら段々態度が軟化して遂に許してやるって一言を聞いた時には飛び上がるほどに嬉しかった。で、手伝わせてほしいと言う俺に二人は時間が空くと少しずつ草木について教えてくれる。

「この庭には愛でる為の花はもちろん、薬草など実用種の草花も植えられるってな。

例えばこれだ。」

そう言っただけでワイルダーさんが示すのは雑草かと勘違いして抜きそうになちっこい花。

「こいつはハミバルと言っただけ。腫れを抑える効果のある薬草だ。薬として使えるのは葉の部分だ。花も一緒に煎じてしまおうと薬効が弱くなっちゃうから気をつけて収穫しないといけない。」

へえ。

アルギダでは薬草学が主流らしい。

日本でいう漢方みたいなもんかな？

手術と違ってやっぱ存在しないのか、後でシーダあたりに訊いてみよう。

しつかりやれよとワイルダーさんは他の仕事へ戻って行く。

(明久殿。シルス殿の妹探しはよいのか?)

ワイルダーさんの説明を聞きながら、草むしりに勤しんでいた俺におっちゃんの声をかけてくる。

そんなおっちゃんの現在の姿はシャベルだ。

持ち手から全て鉄製だが、重さは例によって最軽量化。

固い土の塊や石があってもおっちゃんの超能力じみたパワーで軽く粉砕。

農作業なんてしたことない俺でも楽に土が掘れる。

こんなシャベルがあったら日本でも密かなヒット商品になるに違いない。

「探すってどこを？チビッコからのヒントじゃ人間って事は分かっただけだよ。顔も名前も分からないんじゃない？日本の警察でも無理だっつ

」の。」

もう一度シルスに詳しい事が訊きたいけど、また浦島太郎になったり、絶叫マシンの比ではないマンホール落下も嫌だしな。

（警察？警察とは何なのだ？）

おっちゃんはどうやら暇を持って余しているらしい。

さつきから話しかけられて、草むしりに集中できない。

そんな素朴な疑問は子供電話相談室にでも聞いてくれっつーの。

流れる汗を首から下げてる手拭いもどきで拭く。

季節は春っぽいのに今日はとにかく暑い。

あまりの暑さにおっちゃんへの対応もついつい邪険になってしまう。

（明久殿お〜）

俺にシカトされたおっちゃんが情けない声を出す。

あー。ハイハイ。

「国の中の犯罪や交通安全、探し人までタダでやってくれちゃう集団を警察ってゆるんだよ。」

ま、正確には税金払ってるからタダってわけじゃないんだけどさ。

（なんと！明久殿の住む世界では探し人はタダなのか?!）

「そーだよ。金とってやってくれる探偵ってのもあるけど。」

そーいえば、おっちゃんと互いの世界について話した事なかったかも。

そもそも、俺っておっちゃんとシルスの関係もよく分かってなかったりするんだよな。

シーダにもらった羊皮で作られた袋に水を入れて来ていた俺は、それを飲もうと作業の手を止めて身体を起こす。

「そーいえば、おっちゃんってさ〜。剣になってすぐ俺と一緒に旅してんの？」

（いや、違つぞ。シルス殿の愛刀としてしばらく働いていたのだ。）

「そーなんだ。何年くらい？」

グビグビ水を飲む俺。

（300年くらいだと思うが。）

ぶ　　っ！！

おっちゃんに向かって思わず吹いてしまう。
な、なにを〜！

「シルスってじーさんだったのか?!」

(うむ。人間ならじーさんとやらだな。)

じーさんどころか、人間じゃ無理だしっ。

どんだけサバよんでんだっつーの。

なんか、知らなきゃよかったよ〜。

(元々は人間だと言っていたぞ?)

へえ〜。人間でも神様になれるんだな。

なんでもござれだな。

よく分からん神様システムに俺はショックを受けていた。

あの、外見だけはぶりちーキュートなチビッコがじーさんなんて・
・。

想像できないけど、じーさんがあの口調はヤバイって。

「じゃあ、おっちゃんはおっちゃんじゃなくて、じーちゃんって呼
ぼうか?」

死んだ時は35って言ってたけど、プラス300したらさ。

335歳は立派にじーちゃんだよ?

(じーちゃん?!明久殿には私はじーちゃんに見えるのか?)

あ。

なんか傷つけちゃったのか。

俺は思いつきり地雷を踏んで、おっちゃんはブロークンハート。

ごめんごめん。

あんなに強いじーちゃんなんてどこ探してもいないからっ。

「おっちゃんはおっちゃんだよ。大丈夫だって。」

慰めになってるんだかよく分からんが、俺は慌てて言い繕う。

「お〜いっ!進んでるか?」

コールドーさんの声。

あっ。

やべつ。

全く進んでない草むしりに俺は急いで取りかかる。

こんな風に、王城での平和な日常が続くものだとすっかり俺は油断していた。

王城での平和な日常（後書き）

まいどありがとうございます。

これからもよろしくお願いいたします。

夢・・・それから

漆黒の闇の中、響く声。。
直接響くからなのかよく分からないが、声ではないのかもしれない。なぜなら、聞いていても男か女か性別が分からないから。ただ言語として頭に入ってくる言葉。
そして目を開けると飛び込んできたのは俺とシーダ以外で久しく見かけない黒髪の人々。。

最初の記憶。。

楽しい思い出とそこから一変、親にその命を絶たれてしまった悲しい記憶。

二番目の記憶。。

生まれ堕ちた瞬間から、以前の記憶が脳裏に溢れて悲しくて泣いた。それをあやす女。

この女は恐らく母親。

話せるようになるまで、苛立った。

何度も泣いて訴えた。

悲しみに溢れる私の事を分かってほしいと。

女との生活も長くは続かなかつた。

私は流行り病で呆気なく死んだ。

三番目の記憶。。

子宮という名の暗闇から出た途端分かった。

ああ。

まただ。

私には以前の二人の記憶がそのまま残っていた。つらくて悲しくて少し楽しい思い出。

そんな思い出達に囲まれて私は育った。

15になった私は恋人ができた。

人を好きになるのは素敵な事。

けれどそれは永遠じゃない。

私は喜びと悲しみを経験した。

それを何度か繰り返す。

月日は記憶を風化させる。

大抵の人間はそうらしい。

けれど私は風化することがない。

その記憶の欠片は積み上がっていくだけで消えてなくなならない。

数えて30の年に、つらくなって私は手首を切って自殺した。

四番目の記憶

目が覚めた。

まただ。

また始まってしまった。

生きるという苦痛が。

自殺しても私の記憶は途切れはしない。

また繰り返す。

忘れるという行為は人の救い。

けれど私にその救いはやってこない。

今まで会った人間や動物、目で見えたもの、見れないもの。

楽しかったこと、つらかったこと、悲しかったこと。

何ひとつ忘れることはない。

私の心は死ぬ事を欲するようになし生きられなくなった。

手首ではダメだ。

今度は心臓を止めよう。

二度とこの目が開かぬよう。

五番目の記憶

心臓を刺し貫いても私はまた新たな生としてこの世に生まれてしまった。

つらい。

どうしたら終わらせられるのだろうか。
無限のループから抜けられるだろうか。

赤子の姿をして親に守られ育つ私。

小さな私を愛おしそうに抱く。

私からしたら悪魔のような存在。

こんなに私は死にたいのに。

もう生きたくないのに。

成長した私は死に魅入られるのに……。

悪夢のような転生は永遠に続く螺旋階段。

ある時には私は男として生まれて死に。

またある時には、連続殺人鬼として人々を恐怖に陥れたりしてみた。

けれど、終わらない。

徐々に私の心はおかしくなっていく。

二つにはつくりと割れて、一方では前世の記憶などない人間を演じ、

一方では死神タナトスに魅入られた狂人として生きた。

そして何度目の転生か、数える事をやめて久しいある日。

それはほんの些細なきっかけ。

そうだ。

そうか。

分かってしまった。

この悪夢のような人生を終わりにする方法。

この世界が無ければいいんだ。

世界がなくなれば私は生まれない。

世界の終焉。

そう、それこそが私の望み。

「どあぁっ!!！」

跳ね起きる俺。

なっ、なんだ？

夢？！

ぐっしょりと前髪が額にはりつく。

やっっ！

よく見れば体中から変な汗が垂れ流れてんよ。

(明久殿!どうしたのだ!?!うなされていたぞ?)

ベッドの脇に立て掛けられたおっちゃんが心配して声をかけてくる。

どうしたって……。

俺が聞きたい!

なんっつー、夢見の悪さ。

これって。

これって。

もしかしてシルスの言ってた妹さんって人の記憶なのか?

「こんな夢見させられたってさ……」

(夢?)

おっちゃんはいつもと違っ俺の様子に気づいたらしい。

「シルスの妹さんの夢見ちゃったよ。」

声が裏返るのはきつと寝起きだから。

(……泣くな明久殿。この姿では抱きしめることができない。)

え?

俺は両手で自分の顔を触る。

あ。

ホントだ。

俺っでは今、泣いてるのか。

妹さんの記憶に心がシンクロしてしまったみたいで、後から後から温泉みたいに涙が出て止まらない。

「涙が止まんない。おっちゃん。」
このままじゃ、一生分の涙が出ちゃいそつだよ。
どーしよう。

（明久殿！今、シーダ殿に念話を飛ばした。もうすぐ来るはずだ。
頑張れ！）

頑張れって言われても、これ以上どう頑張れと？
うつっぱい思考回路になる俺。

分かったよ。

ここ最近、すっかり王城での平和な日々慣れちゃって、土いじり
して癒されてたのが気に障ったんだ、きつと！

早くとつと見つけ出せってゆー、これは妹さんからの督促。

ハイ！

とつとと、探させていただきます！

こんなん毎回見させられたらつて思うとマジしんどい。

「アキヒサ！どうした！？」

バンツと勢いよく扉を開ける音がして、慌ててシーダが部屋に飛び
込んできた。

そんな慌てなくても大丈夫だってば。

シーダの方を向く俺を見て、シーダがギョつとする。

まー、確かに慌てるわな。

大の大人がワンワン泣いてたらさ。

シーダは俺の元までやってくるとぎゅつと抱きしめ、大丈夫だから
と俺の背中を軽く何度も叩く。

何も言ってくれないけど、態度だけで分かる優しさ。

泣いてる俺自身が何で泣いてるのか分からんとゆー状態がしばらく

続く。

終いには、出尽くしたみたいにピタっと止まった。
はあ〜。

つ、疲れた。

もいちど寝たいくらいだ。

けど、またあの夢の続きとか見せられたらって思うとビビる。
泣き止んだ俺を見て、ようやくシーダは口を開く。

「おはよう。よく寝むれて……はいなさそうだな。」
頷く俺。

「おっちゃんもシーダも心配かけてごめん。」

(心配かけてすまないだそうだ。)

おっちゃんはシーダに訳す。

(それにしても、シルス殿の妹の夢とはそんなにスゴいものなのか。
)

スゴいっつーか……自分だったら嫌だなんて思ったんだ。
嫌な事なんて忘れていくから何とか頑張れるっつー話なのにな。

ん？

待てよ？

よくよく考えたらおっちゃんだつてそーなんじゃないか？

剣になったおっちゃんはいつ死ねるんだ？

あわわわっ。

そーだよ。

今までそこら辺、考えてみたことすらなかったけど、それはすごく
ツライ事なんじゃないか？

そーか。

これからおっちゃんは何百年も一人ぼっちに……。
なんか自分だけ残るのってすごいっらい。

あ。

そーだ。

せめて木戸家で代々の家宝として俺や俺の子孫なんかと暮らしてっ

たりとかできないかな？

それって、勝手なエゴってヤツなのか？

でもでも・・・溢れる感情に翻弄される俺は耐えきれなくなつておっちゃんにすがりつく。

「おっちゃん！木戸家の万能包丁になつてくれ！！」

（は？何の話しだ？）

おっちゃんの間抜け声すら今の俺には演技に見えてしまう。

そんなアホっぽい声出してるのは、きつときつと悲しい思い出に潰されないようにカラ元気でいるからなんだ。

「いいから！俺、一生大事にするし！子供や孫にもちゃんと遺言とか残していくから！」

（さっぱり意味が分からんぞ？夢から覚めてないのか？）

「そっちこそ！どこにこんなパツチリ目開いて寝ぼける奴がいるんだよ！」

ゆっさゆっさおっちゃんに訴えかける俺。

相互理解の道のりは高く険しい。

「アキヒサ。落ち着いたらどうだ。」

シーダが気をきかせて水の入ったコップを差し出す。

おっちゃんを壁に戻し、それをありがたく受け取って、喉を潤す。

ぷはあ。

脱水状態にあつた俺の体に水が染み込んでいく。

話すのが痛いくらいカピカピだった口の中が、スーッと楽になった。心なしか少し落ち着いたかも。

俺は一息つくと、シーダに向かって問う。

「シーダみたいな黒髪の人間がたくさんいる土地ってどこにある？

・・・おっちゃん訳して。」

（シーダ殿のような黒髪の人間がたくさんいる地はあるのか？だそ
うだ。）

「黒髪？・・・アルギダには黒髪は本来いない。

アルギダにいる黒髪は全て東のガラキスタからの移民や混血だ。東

の大陸になら少数だろうが黒髪のいる地区はある。俺は行ったこと
ないが、俺の母も東の出だ。」

東？

あのビジョンは東の国のどこかだったのか？

そして、何回も出てきた事に意味があるんだろうか。

うん。

決めた。

早く妹さんを救ってあげたいし。

俺はシーダに向かって宣言する。

「俺、東の国に行く！」

夢・・・それから（後書き）

ここまでお付き合いくださった方々、どうもありがとうございます。こんなウダウダな話をお気に入り登録してくださっている方々にも感謝でございます。

ポイント評価含め、感想は受けつけておりません。来年から受験生だったりするので、辛口コメントを受け止める余裕がないというビビりな理由です・・・ハイ。すみません（・・・・・）

出発前。回想。

おしっ！

そーと決まれば早速……。

俺は数少ない私物……とはいってもほとんどもらいものをまとめ始める。

「アキヒサ！何を言ってる？」

シーダが事態の流れに取り残されて眉をひそめる。

（明久殿はここを出て、東の国に行くと言っている。）

「なにっ!？」

（明久殿の決定に私は従うのみ。もし邪魔するようならば、シーダ殿と言えども容赦はしない。）

啞然とするシーダ。

「服とかもらってたってもいいかな？」

（服はもらってたゆくぞ。）

「アキヒサ！」

シーダが俺の右腕を掴む。

いたたっ。

痛いっ。

シーダにクレーム入れようとした俺に向かって、シーダがあの時みたいな真剣な顔。

俺と初めて会って、剣をつきつけてきたあの時。

「何があつたかは後で聞く。……俺もついて行く。」
え。

そんな、ホイホイ？

いやいや、そこまで付き合ってもらうのは気がひける。

アルギダ国内ならまだしも、国外。

外国ってことだよ!？」

「シーダだって城で仕事とかあるんじゃないの？」

(仕事があるだろう?)

「元々、俺は城では働いていないし、こんな事でもなきゃ生まれ故郷の地を踏むこともなかった。だから、俺のことは気にしなくていい。」

(明久殿。シーダ殿がそう言うなら連れて行ってもいいのではないか?)

おっちゃんはシーダを連れて行く事に賛成の様子。

まあ、ついてきてくれるなら確かに心強いよな。

旅慣れしてるし。

「・・・じゃあ、お願いします。」

俺はシーダに向かってペコリと頭を下げる。

俺を掴んでいた腕が外れる。

「お前が思っている以上に外の世界は危ない。今からすぐ旅立つのは無茶だ。」

支度を整えるまで2、3日かかる。いいな。」

頷く俺。

仕方がない。

妹さんは辛くて可哀想だけど、どこに向かうのか詳しい目的地も分からないんだ。

シーダの言う事はいちいちもつともなので、俺はその間に城にいる人達に別れを告げよう。

「分かった。みんなにお別れも言ってないし。」

(分かった。その間、皆に別れを告げに行くだそうだ。)

「ああ。そーだな。・・・セシリアは悲しむな。」

ん?

確かに姫さんは、毎回俺が行く度、歓迎してくれてたから悲しむかもしれないけど・・・。

アルギダを救う為でもある事だし反対したりとか止めたりはしないと思う。

数えるくらいしか一緒にいられなかったけど、この異世界に来て出

会った人々。

俺ってアルギダに来てまだ2週間もたつてないんだよな。

姫さんは俺に対する印象最悪だったのにあれから毎日、お茶や菓子をくれる。

巫女は世俗にまみれてはいけないとかで会える人が限られてるそう
で、毎日俺が遊びに来るのを楽しみにしてくれていた。

俺自身、アルギダの事はほとんど知らないけど、この世界に来てか
らのすったもんだや日本での話とか俺の親の話やら色々話した。

アルギダで一番、俺の情報に詳しいのは多分姫さんだと思う。

毎日といえば、王様ランディーとも会うんだけど、相変わらずのセ
クハラ紛いな会話を続けている。

ミレーヌが妻だと知って早速、それについて聞いた。

やっぱり気になるじゃん？

「ミレーヌって奥さんなんだって？」

そう言った俺にニンマリした笑みを口元に浮かべる。

「嫉妬か？ミレーヌは若くてかわいい私の妻だが、アキヒサも成人
してる割にかわいいから自信を持ちたまえ。」

「そもそも嫉妬してないし。そんな自信はいらないよ。」

「そうかな？ムサくない男は貴重だと思う。」

「って思ってるのはランディーだけだと思う。」

「照れなくていいのに。」

「照れてないから。」

終止ランディーとはこんな調子で真面目に話した事ないんだよな。

上手くかわされてる。

それを姫さんに言ったら、「ランディーは誰よりも臆病なのに誰よ
りも強がりだから、ミレーヌ様や明久様にしか心が開けないのです。
ひねくれた言動に惑わされなくてくださいませね。二人とも愛おし
くて仕方ないのですわ。」

う〜。

ランディーに愛おしい発言をされたらブルブルだけど姫さんだと何

だか納得。

ランデューは性格悪そうだけど、まあ憎めないよな。

それからガルさんとは、少ししか会えていない。

実はガルさんには美人な奥さんがいるそう、見たことないけどシーダ曰く、美女と野獣。

アルギダを離れる前に一度見てみたかったな。

ミレーヌとは、ワイルダーさん達と庭いじりをしてると度々やってきて、お付きの人が迎えに来るまでいつも一緒に作業してくれた。行方知れずになると大体庭にいるので、お付きの人も慣れた様子ですんなり現れる。

やっぱミレーヌは、ちょっとおバカだ。

一人っ子の俺には、兄弟がどんなもんだが想像でしかないんだけどでも、こんな妹いたらいいな。

「アキヒサ。朝食は食べるだろう？」

すっかり回想モードに入っていた俺は、ふと現実にたちかえる。

「食べる！」

(食べるそうだな)

「じゃあ、準備しよう。」そう言ってシーダが部屋を出て行く。

(東の国とは・・・夢の件を皆に話すのか?)

おっちゃんが問うてくる。

どーしようか。

熱でぶっ倒れた時に夢でシルスと会って、俺の探しものが人間。

しかも姫さん達の言う、世界を滅ぼそうとしているものつてのといコールじゃなからうかって俺とおっちゃんは話していた。

その事は推測でしかないから、他の人達には確信が持てるまで内緒にしている。

ん。

まあ、シーダには言っても態度変わらなさそうだしいいかな。

神の代理人という肩書きがあるおかげで捕らえられて行かせないなんて事もないだろうし。

なんかなるっしょ。

「ん〜。考え中。ところで、妹さんに会ってどーしたらいいんだろ
う?」

(・・・また痴漢になる可能性の事か?)

「う〜ん、まあ。世界を滅ぼそうなんて思考の人間を前に俺は何て
声かけるんだってハナシ。」

(無理矢理とか?)

「え〜。それは何かヤだ。」

(むむ。)

おしっ。

道中、さりげなくシーダにも聞いてみるか。

この日、ランディーからも特に止められる事もなく、俺は城にい
る俺と関わる全ての人たちに別れを告げた。明日の朝には出発だ。
妹さん、待ってるよ!

出発の夜

「明久様。どうか一晩そのままに。
やややく！
どーする俺！？」

時を遡る事、60分くらい前。
明日の朝には、さらばアルギダな夜。

俺はアルギダを離れる心細さと、妹さんの夢を見ないかおっかなく
てなかなか寝付けないでいた。

ベッドで二時間ウダウダした挙げ句、眠れるんじゃないかと部屋を
出て城内を彷徨ってみる。

俺も一週間の間にすっかり城での暮らしに慣れてしまったから、迷
う心配もない。

おっちゃんには長さ15cmほどの短刀にしてポケットに入れてある。
俺のいる二階の部屋から一階に下りて、庭へ。

空にはぽっかり満月らしきまんまるの月が出ている。
今日でアルギダにいるのも最後か。

本当は、日本の事を懐かしむべきなんだろうけど・・・思い出さ
れるのはこつちの世界のあれこれってのが我ながら不思議。

何の力もない俺が、妹さんの苦しみを救う事ができるものなのかな？
この世界も滅びないでほしい。

芝生の生えている場所を見つけて寝転ぶ。

外で寝ても風邪ひかないだろうなってくらいに夜も寒くない。

「おっちゃんは、ずっと剣でいるのつらくない？」

寝ころがったまま俺が訊くのに、おっちゃんはなんて事ないみたいに答える。

（剣でなかったら、明久殿と会う事もなかった。

住む環境も考え方も、何もかもが私のいた世界と違う。明久殿と旅するのは楽しい。）

ううっつ。

おっちゃんっ！

感激して、ポケットの中のおっちゃんを握りしめる。

「おっちゃん……迷惑かけるかもだけど、もうちよい付き合っ
てくれよ。」

（うむ。）

そのまま俺とおっちゃんはぼけっつとアルギダの空を見つめる。
東京みたいにネオンきらびやかな場所も嫌いじゃない。

でも、星を見るならやっぱりアルギダの方が綺麗だと思っ。

「明久様？」
ん？

今、誰かに呼ばれなかったか？

妹さんの呪いか!?

俺は怖くなつて、身を起こす。

キヨロキヨロするとさっき俺が出てきた扉側からやってきた姫さん
の姿が目に入る。

「あれ？姫さんも寝れなかったのか？」

（寝れなかったのか？）

俺が声をかけると後光に照らされた姫さんがゆっくり頷く。

「隣、座つてもよろしくて？」

「あつ、はいはい。どーぞ、どーぞ！」

俺の隣に腰を下ろす姫さん。

二人して、何となく空を見る。

「今宵は満月。アルギダでは、月は世界の行く末を示す重要なものなのです。」

「へえ〜。俺のいた日本では月にはウサギがいて……。」

（月にウサギ？ウサギは野にいるものだぞ？）
分かってるよ！

そんな真面目にかえさないでくれってのっ。

心の中でおっちゃんにつっこみつつ俺は続ける。

「って子供に言うんだよ！年に一度、十五夜ってゆー祝い事もあるし。」

（明久殿の住む日本では月を祀る催しが年に一度あるそうだ。）

「そうなのですか？アルギダにも月詠祭というのが年に一度ありますわ。」

「へえ〜、祭り行ってみたかったな〜。」

何気なくたいして考えもせず言った俺。

「なら、アルギダへ帰ってきてくださいませ。私……待ってますから。」

真剣な顔で俺を見つめる姫さん。

そんなお薦めな祭りなのか？！

「待たれてもどーかな〜。月詠祭っていつあるのか知らないし。」

（……明久殿……。それはわざとか？）

おっちゃんの疲れた声。
どーした？

何かあったのか？

「わざとって？」

（……セシリアは明久殿の事が好きなのだ。）
は？

おっちゃんまでランディーと一緒にになって俺をからかう気か？

10代の若者からしたら7つも上なんて恋愛対象外だと思うぞ。好きっつーか、なつかれてるだけだと思う。

「それっておっちゃん勘違いだよ。なつかれてるだけだつて。俺は苦笑気味に反論する。」

(それこそ明久殿の勘違い・・・)

おっちゃんの意見に俺は首を振る。

いやいや、今までにも女性になつかれることつて割りとおったんだつて。

なぜか俺は昔から男女問わずなつかれることが多かったし。

以前、その事を女友達に訊いたら、木戸君つてガツガツしたトコないから変に男つて意識しないで付き合えるから楽なんだよねつて言われた。

そんな、恋愛対象外宣告を受けまくる俺がですよ！

姫さんみたいな美人で偉ぶらない、中身も外身も完璧な姫さんが俺を恋愛対象にするわけないじゃん！

生まれてこの方、女にモテた試さないんだからつ。

おっちゃんは俺が否定してるつてゆーのに納得してないらしい。

(では、セシリアに直接訊いてやろう。ちゃんと聞いておくのだぞ！)

「はあ？訊くつて？」

おいおい。

まさか。

(姫巫女よ。そなた、明久殿の事が恋愛対象として好きか？)

うわっ！

なんっつー聞き方すんだよ。

どんだけ俺をショックのドン底に落とす気だ！？

精神的ダメージを軽減するべく、構えた俺。

ス〜ハ〜。

深呼吸。

よしっ。

どんどーい！

どんなヒドイ言葉にも耐えてみせるよっ。

「わたくしは………明久様が好きです。」

「ほらっ！振られ………って、ええーっ!？」

てつきりゴメンナサイされると決めつけていた俺は予想していなかった流れにあ然ポーゼン。

はっ！

今の！

聞き間違いじゃなかったら、愛の告白ってヤツ?!

(ほら、私の勘違いではなかっただろ。)

ふふーんってカンジにおっちゃんが言う。

って、どーすんだよ！

明日には俺、アルギダにいないんだよ！

しかも予定は未定。

何の約束もできない。

どーする？

なんて返す？

内心パニックに陥っている俺に姫さんとはとも16とは思えない切ない笑みを浮かべる。

無言。

沈黙が支配する。

そして、フリーズしたまま座る俺の唇に触れる、柔らかな感触。

どれくらい時間がたったのかわからないくらい長い口づけの後、セシリアは頭真っ白になった俺を膝に抱く。

「明久様。どうか一晩そのままに。」

ただ、ただ驚く俺は上手い言葉のひとつも言えず、なされるがまま
姫さんに膝枕される。

無言の夜が明ける。

この夜、俺も姫さんも一睡もしないまま朝を迎えたのだった。

出発の夜（後書き）

毎度ありがとうございます。

プラトニッククラブですみません。」「（ ）<

ガラキスタ1

ここは・・・？

てつきり東の国、ガラキスタには船やら馬車やら乗り継いで行くものだと思っていた俺。

「うおおっ！だあ〜！」

またか！

シルス以外でこの状況を作り出せるヤツがいるとはっ。

魔方阵らしきものが書かれた地下の小部屋に俺とシーダは入り。

スポーンって音が聞こえそうなくらいにそれは突然。

あの。

あの。

見覚えのあるマンホールみたいな穴が開いて、俺達は落下した。

ん？

薄暗い部屋。

じめつとした空間にほんのり灯りがある。

目を覚ました俺の視界には隣で埃まみれになったシーダの姿。うわっ。

汚ねっ。

俺は自分も同じ状態であるとも知らず、シーダの肩に付いた埃を叩く。

ばしばし音が響く。

シーダも目を覚ましたようだ。

そこに響く声。

「おやまあ、久々だねえ。ようこそアルギダからのお客人。」
ふえっ？

声のした方に振り返ると、部屋の扉の前に腰が曲がり、長いロープで身を包んだ老婆が手にランプを持って立っていた。

うわっ。

魔女っばい。

白雪姫とかに出てきそう。

「私は、ガラキスタに住む魔女、ロベリアさ。」
おっと。

ホントに魔女じゃなか！

期待を裏切らないくらいに魔女っばいもんな。

シーダがガラキスタで使われている東方言語で言う。

「はじめまして。ガラキスタの魔女、ロベリア。突然、連絡も寄越さず来てすまなかつた。

私はアルギダの親衛隊副隊長でシーダ「ヴィトシュワーヌ」ホン「ハウゼン」と言う。

以後お見知りおきを。そして、こちらはキドアキヒサ・・・」

魔女ばーちゃんは俺に顔を向けると食い入るように見つめてきた。
な、なんだ？

ちよっと迫力に負けて後ずさる。

こえーよ、ばーちゃん。

近すぎますって！

「その小僧！お前、この世界の人間じゃないね。何者だい？」
ランプを持っていない方の手の人差し指でビツと俺を指し示す。

おお〜！

スゲー。

さすが、魔女。

思わずパチパチと手を叩く俺に毒気を抜かれたのか、魔女ばーちゃんはやれやれって溜息をついて扉に向かう。

「ついてきな。」

こうして、俺とシーダは東の大国、ガラキスタに無事不法入国したのだった。

ガラキスタ1（後書き）

ホントは船旅の予定だったんですが省略。

初期設定で忘れかけていた、魔法も万能ではないに限られた人々に
僅かにある世界だったというのを思い出して使ってみました。

短めの方がなんとなく読みやすい気がする。

これからは、短く話数を増やしてみます。

ガラキスタ2

(こやつ何者だろうな?)

おっちゃんは前を行くばーちゃんに訝し気な様子。

地下から地上に出る為、俺達三人は石段を黙々と登る。

腰の曲がったばーちゃんの後ろをついていきながら、もしこの国の偉い人に会えたら、バリアフリーについて提案したいよな〜なんて考えつつ惰性で足を動かしてたら、僅かな光が目にしこむ。

地下と地上の間にはぼろっちい木の扉。

だんっ!

だんっ!

「さあ、早く出な。」

ばーちゃんはその扉を開けると言うより、蹴り開けた。

お〜!

スゲー!!

ばーちゃんの繰り出す蹴りじゃなかったぞ、今の!!

K1選手バリの蹴りを見せたばーちゃんは何事もなかったように、俺の方に顔を向けると表に出るよう促す。

お。

出ていいのか?

やった〜!

なんか久々な気がする外の空気にテンションが上がる。

「ひゃっほう!うがっ!」

弾かれる俺の体。

喜び飛び出した俺は何か柔らかい壁にぶち当たって倒れた。いった〜。

ばーちゃん、出る時に飛び出し厳禁とか一言言ってほしかったよ。

ばーちゃんに一言物申したかった俺に向かって頭上から声がする。

「ちよっと!どこに目つけてんの!あんたどこの田舎者よ?ちゃん

と前見て歩きなさいよねっ！」
へ？

きよとんとしてしまっ。

どーやら、どやしつけられているのは俺？！

顔を上げて相手の顔を仰ぎ見れば、そこにいるのは黒髪を腰まで伸ばし、頭の上の方で二つに結わえている女が腰に手をあて仁王立ち。誰だ？

いきなりクレームって……。

クレマーか？！

これがそーなのか？！

髪の色だけは俺と一緒に黒で親近感なのに。

むしろ文句言いたいの俺の方。

いきなりそんなトコ立ってるなっつーの！

「ロベリア！ほんとにこんなのが例のヤツなの？」

「そうじゃ。」

魔女ばーちゃんがこっくり頷くのを見て、その黒髪の失礼極まりない女に俺は腕をとってズルズルと引き摺られる。

やめれ〜！

な、何なんだ？

つてか服汚れる〜。

遅れて扉から出てきたシーダはそんな俺の惨状を見て、慌てて女の腕を止める。

「誰だ？アキヒサが痛がつてる。腕を離してくれないか？」

パツと突然外れた腕に地面に転がる俺。

もう、何が何やらで困惑の極みな俺は地面とキス。

俺の意見は全く採用されないのにシーダのひと声には素直に従うつてどーよ？

ポケットにおっちゃんいれてなかったら顔中傷だらけ確定だっつーの。

「離れたわよ。これでいいんでしょー！」

「ああ。」

「じゃあ、アキヒサの下僕！あんたが連れてきなさいよね。」

「げ、下僕?!」

啞然とするシーダ。

「違うの?じゃあ、アキヒサの家来!」

そんなあんまりな言われように俺は突っ伏していた顔を上げて叫ぶ。

「シーダは俺の下僕でも家来でもないぞ!仲間だ!」

(シーダ殿は明久殿の下僕でも家来でもなく仲間だ。)

おっちゃんか女に向かって念話を放つ。

女は特に驚いた様子もない。

あれ?

普通の人はおっちゃんの念話にビックリするもんだけどな。

「どっちだっていいじゃない?!たいした差じゃないわよ。男なら

細かい事にこだわっちゃダメ!」

そーか、これって細かい事だったのか………。

いやいや、仲間を侮辱されてハイハイ言ってられますかってんだ!

それにしてもこの失礼な女の名も正体も知らない。

「あんたこそっ!何でそっちは俺の名前知ってて俺らは知らないん

だよ?」

「真正正銘のバカ?あんたの言うお仲間がさっき言ったじゃない。」

あ。

そーいえば。

(明久殿……)

うわっ。

おっちゃんまでそんな呆れ気味な声出さなくてもいいじゃんか。

確かに聞いてなかった俺もいけないけどさあ。

「連れてく前にまずそっちが名乗るのがスジだろ?」

うんうん。

これは大丈夫。

バカにされる要素ないだろう。

「スジって、何で私があんたにスジ通さないといけないわけ？
……まあ、いいわ。私はリン。大地の調停者よ！」

へ？

あつ。

いい〜つ。

調停者？

調停者ってあのシルスと一緒に？

え。

でも今、大地の調停者とかいってたから人の調停者のシルスと全く一緒ってわけでもないのか？

ってか、俺の中で今だ調停者が何なのかよく分かっていなかったりする。

神さまみたいなものだって事は分かるけどさ。

「リアクシヨン薄い。もつと驚きなさいよね！」

いやいや、十分すぎるほど驚いてますって。

しかし、調停者ってのはシルス然り、美人じゃないとなれない決まりでもあるんだろうか？

俺の目の前にいるリンと名乗る女の容姿もハンパない。

腰まで伸びる黒髪は天使の輪ができまくってる艶髪だし、顔立ちだつて気は強そうだけど、下手なアイドルじゃ太刀打ちできないくらい整っている。

胸元が多少、今まで会った異世界人より少ない気もするけど、スタイルもかなりいい。

どー見ても、八頭身だよな。

もちろん余裕で俺より背も高い。

セシリアと同じか、ちよつと高いくらい。

「訳あってあなたの探しモノを手伝ってあげるわ。ありがたいと思いなさいよ！」

あつげにとられる俺とシーダを取り残しリンはそう高らかに言い放つたのだつた。

ガラキスタ2（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます。
サクサクがんばります。

ガラキスタ3

「手伝うって・・・」

「私、暇じゃないの。こんな場所で長話しは嫌よ。早くついてきなさい。」

スタスタと歩いて行ってしまっリンの後を二人して急ぎ追う。

魔女ばーちゃんはついてこれるのか不安になったけど、後ろを振り返るとそこにはばーちゃんの姿はなし。

どっか道草してるのか？

それが、最初から無理と走ってすらいないかのどっちかだと思う。

俺達は右も左も分からないからリンの姿を見失うわけにいかない。

「ここよ。座りたかったら適当にソファーにでも座って。」

俺達がワープしてきた場所は城下の町から少し離れた場所にあったらしい。

結構なスピードで歩くリンに必死でついて行った俺達は、ごくごく普通のとある民家に案内された。

広くもないし、だからといってリンとばーちゃんの二人で暮らすには十分な広さ。

「疲れたじやろう。アルギダにはないから飲みなれていないかもしれんが、ガラキスタでは一般的なルルー茶じゃ。」

「うえっ!??」

「ばーちゃんじゃん？」

俺らの後方にいたはずのばーちゃんがトレイにお茶を3つ持ってきた。

どーゆーことだ？

「なに驚いてんのよ！ロベリアは、私の家来の一人。人間なわけないでしょ！」

「えっ？」

「だから、人間じゃないのよ。ロベリアも。私も。」

調停者だもんな。

そりゃ、人間離れしててもおかしくないけどさ。

(調停者は元々は人間だと聞いたが……)

おっちゃんが言葉なく驚く俺をフォローするみたいに話しに加わった。

あ、ありがとうおっちゃん。

俺だけじゃ、リンに対抗できないって。

「あゝ。シルスはあるた達にそんなこと言ったの？」
頷く俺。

「私達、調停者は人間だった時の記憶は持ち合わせていないのが普通なのよ。シルスは、調停者になってからも執念で忘れないでいるのね。」

リンは、ばーちゃんの持ってきたお茶を優雅に一口飲む。

「忘れちゃえば楽なのにねえ。だから、地上に降りてこないのかしら？」

独り言みたいにつぶやくリン。

えっ？

調停者って普通はその世界でこんな風に普通に暮らしてるもんなのか？

だったら……わざわざ俺を異世界アルギダに飛ばしてくれなくても自分で探せば早いんじゃないのか？

そんな俺の思いが伝わったのかリンが言葉を紡ぐ。

「……シルスの妹の話は聞いてるんでしょう？それをシルス本

人にやらせるってのは酷な事でしょう?」

妹さんの話はきいてるけどさ……。

本人に妹を探させることの何が酷なんだ?

首をひねる俺。

「なんで……シルスには酷なんだ?」

さ。

おっちゃん、リンに聞いてくれ。

(……………)

あ?

あれ?

何で訳してくれないんだ?

リンがふうんって感じで、おっちゃんの入っている俺のポケットに

目を向ける。

なんだ。

なんなんだ。

二人とも何か言ってくれよ。

長い沈黙を破って、重い口を開いたのはリンの方から。

「だって、アキヒサ……………」

あんたの役目は、その妹を殺す事にあるんだから。ねえ、神剣アル

トそうよね?」

なっつっ!

なにを

っ!!!

ガラキスタ3（後書き）

ここまでおつきあいくださった方々、ありがとうございます。
段々シリアスモードになってますが、最後までおつきあいいただけると嬉しいです。

バスト占いの歌がエンドレスリピートしている今日の頃。でわでわ。

ガラキスタ4

「その様子じゃ、知らなかったみたいね。・・・だから、そんな平和ボケな頭でもやっていけたのね！・・・それから調停者や調停者たる要素のある者にはあんたの言葉、ちゃんと分かるから。アルトの通訳なんていらさないわよ！」

ちよつ。

ちよつ。

ちよつ。

ちよつと。

待ってくれ。

頭が真っ白になって働いてくれない。

くっそ〜！

全く状況が飲み込めてないんだけど。

よしっ。

スーハ！。

スーハ！。

いったん、落ち着こう俺。

えーと。

シルスは妹さんを探してほしいって言うたけど、その後の事には一切触れるような発言をしていないよな。

てつきり俺は妹さんを探しさえすればいいもんだとばかり・・・。しかも、リンの口ぶりからするとおっちゃんはこの事を知ってたみたいだ。

なんだって、そんな大事な事だまつてるんだよ？！

しかも、神剣とか言われてなかったか？

おっちゃんは、元人間でそれまでシルスと一緒にだったって言うた。

確かに嘘はついてない。

けど。

だけど。

おっちゃん。

おっちゃんは、俺に一番重要な事を黙っていたのか!?

探した妹さんを俺が殺す?

妹さんの苦しみ。

死に対する渴望。

あの夢で妹さんの苦しみは分かる。

けど……。

けどさ。

それと、俺が殺さなきゃいけないって事、想像するわけないじゃんか。

俺は今まで日本という平和な国の住人で。

殺人が犯罪になるような場所において、周りの人間の死を経験していないんだよ。

俺と死は対極にある存在なんだ。

それが、この異世界に来て、剣とか普通に使われてる状態だけでもしんどいつてのに。

日本の江戸時代とかじゃないんだよ?

俺が妹さんを殺すって……ありえん。

ってか、まず無理!

ビビって斬れるわけない!

そう。

そっだよ。

無理なんだよ。

おっちゃんだって俺と一緒に旅してたんだから俺がどんなヤツか知ってるはず。

なあ。

おっちゃん。

「おっちゃん。今のホントなのか？」

俺はゆっくりと否定の言葉を期待する。

どうか。

どうか。

違うと言ってほしい。

(・・・明久殿！落ち着いて聞いてほしい。)

「落ち着いてるよ。・・・おっちゃん。」

努めて俺は声を抑える。

うん。

大丈夫。

おっちゃんは俺の味方だって。

そんな俺の思いにおっちゃんが重い口を開く。

(・・・黙っていてすまなかった。明久殿は気に病む必要はない。)

・・・シルス殿の妹の件は、私が明久殿の身体を借りて行う予定

だった・・・)

なっ。

なんでっ。

そんな大事な事、俺に黙って決めてるんだ？！

うつ向く俺。

おっちゃんに対して、裏切られたって思いやら色々な感情が一気に

押し寄せてきて思わず涙がこみ上げてくる。

歯を食いしばって、零れようとする涙を止める。

泣くもんか。

泣いたって何も変わらない。

けど、明るく頭を上げる事もできない。

俺はポケットの中にあるおっちゃんを握りしめる。

そっとポケットから出す。

ポケットサイズになったおっちゃん。
俺。

おっちゃんを信じたかったんだ。
昔は人をいっぱい殺めたって言ってたおっちゃん。
俺と旅するのが楽しいと言ってくれたおっちゃん。

物騒な刃物なのに、おっちゃんは怖いって思った事なかった。
なぜだか分からないけど。

おっちゃんは俺に嘘をつかない。

おっちゃんだけは、何があっても信用できるって思ってしまった。
泣くまいと思っていたのに短刀を見ていたら自然と涙が一滴、おっ
ちゃんに落ちた。

俺は、おっちゃんをソファーにそっと置く。

「おっちゃん。俺には無理だよ。ごめん！」

それだけ言って、俺は立ち上がってリンの家から飛び出した。

「待て！アキヒサ！」

背中ではシーダの止める声があるけど、そんなん構ってられない。

そんな、素直に止まれる余裕ないからっ。

俺は何も考えられなくなって、ただがむしゃらに知りもしないガラ
キスタの町中を必死になって走った。

日本に。

東京に。

俺を帰してくれっ！

「あゝあ。あの子、行っちゃったわよ。」

（・・・ああ。仕方ない。私もシルス殿も肝心なところを明久殿に黙っていた報いだな。）

「私も、あんたも、人間としてあつた頃の記憶なんてとっくになくしてるのに・・・」

（ああ。私が明久殿に話した記憶は全て、シルス殿が私の事を忘れず覚えていてくれた記憶。）

「そうね。・・・死の調停者、アルト。」

（・・・。。。）

「全く・・・シルスもなんで、あんな子に妹の死を託したのかしらねえ？」

（・・・明久殿でなければいけないのだ。・・・明久殿がシルス殿の妹を殺さなければならぬ理由があるのだきつと・・・）
「なら尚更だわ。シルスにとつても、あの子にとつても・・・。」

ガラキスタ4（後書き）

本日、あともう1話あります。
なんとか目星がついたような、ついてないような……。

ガラキスタ5

陽が傾き、夜が来る。
どこをどう走ったのか分からないけど、今俺は原っぱみたいな空き地にいる。

町を抜けたところにあった芝生の広々とした空間。
どーすっかな。

この先の事を考えると気が重い。

っつーか、リンの家への帰り方が分からない。

完全に迷子だ。

「アキヒサ！」

ん？

声のする方に顔だけ向けるとそこに立つシーダの姿。

上半身を起こして仰ぎ見る俺の横にシーダが腰を下ろす。

シーダは、さっきの会話どころかガラキスタに到着してから意味の分からない事ばっかだろうな。

妹さんの件も教えてないし。

黙ってシーダは、俺の横にいる。

今はその気遣いが嬉しい。

「ごめん、シーダ。」

俺は下唇を噛む。

「泣いてもいいぞ。」

シーダの筋肉質な腕が俺を包む。

腕から伝わる鼓動に俺はシーダの胸に顔を埋めた。

涙も鼻水も一緒くたになつてシーダの服に吸い込まれていくけど、
シーダは腕を緩めようとはしない。

「シーダ。ありがとう。」

顔はまだ上げられない。

シーダが子供をあやすように、俺の背中を軽く叩く。

ありがとう。

ありがとう。

ありがとう。

ありがとう。

ありがとう。

ありがとう。

ありがとう。

ありがとう。

俺は心の中でしつこいくらいにありがとうを連呼してみる。

それからどれくらいたったのか。

「アキヒサの探し物は人間だったのか？」

頷く俺。

涙と鼻水が止まった後、シーダは俺に自分の予想を話していく。

やっぱりシーダはすごい。

僅かな会話だけで、その予想は強ち外れていない。

「その人間がさっき言っていた調停者とか言う神の妹？」

「・・・そう。」

俺は再び頷く。

「で、アキヒサはてっきり探すだけだと思っていた神の妹を殺す役目も担っている？」

そう。

そうなんだ。

妹さんがどんな人物だったとしても、俺には人は殺せない。

例え、そのせいで日本に帰れなかったとしても、殺すのは嫌だ。だから、シルスに訴えてみようと思う。

いくらシルスだって俺のへボイ姿を見たら不安になるじゃん？

こんだけ俺が頑なに拒否したらシルスといえども諦めるしかないんじゃないかって思う。

「アキヒサは元の世界に帰りたくないのか？」

シーダが俺の心を読んだみたいに訊いてくる。

俺は首を横に振る。

「帰りたいよ。でも、人を殺めてまで帰りたいという意味を俺は貰けないよ。」

夜風が頬を掠める。

「妹とやらは、死にたいのだろうか？それでも？」

俺の目を見たまま、シーダは問うてくる。

「それでもだよ。」

「……そうか。なら、アキヒサの思う通りに。」

「うん。そーだよな。」

お。

気持ちが出来になってきた。

なんかシーダに話してたら、妹さんを殺さずに済むような気がしてきた。

この異世界でおっちゃん以外に俺が信頼を寄せる人物がそう言うてるんだからって。

シーダと目があう。

俺はいつもの調子の笑顔でシーダの肩を軽く叩いてみせる。

うん。

うん。

大丈夫。

もう平気だ。

妹さんを見つげ出す。

でも殺さない。

いつもの調子に俺が戻った事を知ると、シーダは思いだしたみたい
に突然話しだした。

「そーいえば。いつだったか、アキヒサの腕輪について聞いた事あ
つただろう?」

あー。

そーいえば、そんな事あったような・・・。

頷く俺。

シーダがどこかで見た事あるとか言ってた気がする。

で?

それがどーしたんだ?

きよとんとする俺にシーダはポケットを探り・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「王城で思いだしたんだ。俺の手元にも同じものがあるってな。」
そこから出てきたのは紛れもないシルスの腕輪と同じもの。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

え。

言葉を無くす俺。

待ってくれ。

もしや。

今までのちょっとした事が思い出される。

アルギダの王城ではなく、地方の小さな町からなぜ旅が始まった？

シルスが言っていた妹さんの情報。

妹の魂だけど、女とは限らない。

俺が持つてるのと同じ腕輪を持っている。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

まさか。

………嘘だろうか？

「だって。シルスの妹は、長い間転生を繰り返して、精神に異常をきたした結果、人格を二つにしてしまったんでしょ？」

（と、シルス殿は言っているが・・・。）

「ホント厄介な頼みよね。私だって暇じゃないのに。」

（暇ではなくても・・・大地の調停者は無責任に放り出さないだろう？）

「シルスには借りがあるのよ。」

（・・・私もだ。）

ガラキスタ5（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
探しビトの正体・・・バレバレだったとは思いますが、そこはあえて突っ込まないでください（ー；；）
でわでわ。

ガラキスタ6

「シーダ：嘘だろう？」

声に出してみる。

現実が飲みこめない。

まさかという思い。

だって。

だって。

否定の言葉を探す俺。

横では腕輪を手にしたシーダが俺の様子がおかしい事に気づいたらしく、腕輪を戻すと俺の両肩を両手で持って動揺する俺を揺する。

「どうした、アキヒサ？」

どうしたって……。

どうしていいか分からないんだ。

俺の思い違いって事も充分ありえるじゃんか。

俺は自分が来たであろう方角を指し示す。

「リンの家が分からない……」

もしかしての可能性を消したくて俺は今すぐリンやおっちゃんの家に戻りたい。

けど、現在迷子まったただ中の俺はただ呆然と立ち尽くす。

「アキヒサ、家に戻るか？」

えっ。

びっくりして振り返る。

シーダは俺の後を追いつつ、道まで覚えてたのか？

「リンとか言う女の家なら大体分かるが……」

お願いします。

頭を下げた俺に、シーダは笑って俺の肩に手を置く。

「じゃあ行こう。」

この肩に触れる暖かな体温。

やっぱり、シーダが妹さんのわけない。
俺はシーダと共にリン達のいる家へと歩き出す。

「あら。帰ってきたの？・・・男なら一晩くらい野宿で頑張りなさいよ。」
うぐっ。

リンはそう言うとテーブルにあつたコインを魔女ばーちゃんに渡す。
「賭けはロベリアの勝ちね。」

おいっ！
賭けって何だよ！

（止めるように言ったんだが・・・）
「剣に説教されたって怖くないわよ！」

「まあまあ。腹も減つとるじゃろう？二人の分を作ったから、待っておれ。」

魔女ばーちゃんが、怒りに震える俺を宥めようとそそくさとメシの準備をする。

「ありがたがりなさいよ！私も、ロベリアも食事しないんだから。」
あ。

そーか。

二人とも人間じゃないって言ってたもんな。

おっちゃんも食事しないから、わざわざ俺らのためだけに作ってくれているのか。

もしかして・・・二人とも、心配してなかったわけじゃないんじゃないか？

「さあ、たんとおあがり。」

テーブルを挟む形で椅子に座った俺達の上に魔女ばーちゃんが大きな鍋をどでーんっと置いた。

「これは!？」

中を覗きこんで、思わず叫ぶ。

「どーした。アキヒサ?・・・ところでこれは何という料理なんだ?」

何って。

鍋の中に様々な野菜がこつた煮になっており、ベースは味噌。

更に、薄切りになった豚肉。

・・・と言えば。

「豚汁!」

「トンジル?」

シーダの頭上にハテナが見える。

うわ。

まさか異世界まで来て、豚汁食えるとは思わなかった俺。

やばっ。

勝手にヨダレが。

まだ食べてもいないのにパブロフの犬並みに反応してしまう。

「さあ。早く食べな!」

魔女ばーちゃんの一声に俺はスプーンでちびちび取り皿に盛る。

この家ではお茶を飲むくらいしかリンもばーちゃんもしないからかティースプーンを渡される。

鍋があるだけでも奇跡に近い。

シーダの件は、本人がいる前で確認するわけにもいかないので後に

するしかない。
とにかく食うぞ〜！
シーダの分もよそって俺らはメシタイム突入〜。
うおっ！
ばーちゃんが料理上手な事に驚きつつ、例によって例の如く鍋にあつた大量の食材はあつという間に空になる。

ぷはあ〜。

食った。

食った。

さてと〜。

どーやってリン達に言おう？

もじもじする俺を無視して優雅にソファァーでルルー茶を飲んでいたリンが口を開く。

「さ、本題に入りましょう。そこのおんた！」

リンはシーダに向かって言う。

「俺？」

「アキヒサから聞いたんでしょ？」

「神の妹の話か？」

頷くリン。

もしや。

不吉な予感がかすめる。

「そーよ！シルスの妹！あんたの事よっ！！」
うわっ！

俺が思い悩んだのは何だったんだってカンジに容赦なく言い放つり
ん。

ひどっ。

リンなんて。

リンなんて。

やっぱ嫌いだー！！

ガラキスタ6（後書き）

毎度、ありがとうございます。

感謝感激でございます。

ボツにするのもな〜と思ったので、『さーち』開始の頃、同時に考えてた話をチヨロッとアップしました。

次回の予定は未定なので、じらしプレイお断りな方は見ない方がいいかも……。

ガラキスタ7

「そうよ。アキヒサが殺さなきゃいけないのはアンタなのよっ！」
ひいっ！

ヒドイよ、この人！

俺がオブラートに包んで相談しようとしたのにつ！

「えっ・・・なっ・・・」

動揺して言葉の出ないシーダ。

左手で髪をグシャリと握りしめる。

ほらっ、シーダだってそんな事言われてどんなリアクションとれば
いいか困ってんじゃない。

そりゃそーだよ。

俺だって、突然そんな事言われたらドッキリですか？

カメラどこですか？って聞いちゃうと思う。

「あなたの記憶は改ざんされた記憶なのよ！」
だあっ。

リンの容赦ない言葉に俺は割って入る。

「シーダがそんなわけじゃないじゃんか！だって、シーダは別に世界を
どうこうしようなんて考えてないし、一個人にそんな大それた事
できるわけじゃないじゃん！だからシーダがシルスの妹の魂を持つて
るわけないんだって！」

俺はリンを睨み付ける。

俺より背の高いリンからすると子犬が噛みついてるようには見え
ないのか、しっしっとな俺の睨みを散らす。

「アキヒサだってそれが知りたかったんでしょ？私だけを悪者に
しようっての？」
うぐっ。

咄嗟に言葉に詰まる俺。

リンは大きく溜め息をつく、壁に立て掛けてあったおっちゃんを手に戻ってくる。

おっちゃん！

こーゆー時こそ、重量コントロールしてくれよ！

おっちゃんはすんなりリンによって運ばれてきた。

「アキヒサ！これは、あんたの持ち物でしょう。妹の魂を救えるのはアンタだけなのよ。」

他にもない、アンタだけに許された使命でもあり義務でもあるの。」

「嫌だっ！おっちゃんなんていらなっ！」

リンが差し出すおっちゃんを俺は叩き落とす。

ガシャンと音をたてて床に落ちたおっちゃん。

今まで沈黙を守っていたおっちゃんがゆっくりと言葉を紡ぐ。

（明久殿が私を許せないのは仕方ない。非難も罵倒も甘んじて受けよう・・・ただ、シルス殿の妹の苦しみを明久殿は知ったはず。彼女は本来ならば、シルス殿と同時期に死ぬ予定で調停者の一人のはずだったのだ。それが、ちょっとしたトラブルで死に損なってしまった事から全てが狂ってしまった・・・）

「・・・おっちゃん・・・」

分かってる。

妹さんの苦しみを。

でも。

だからって、俺がシードを殺していいって事にはならないよ。

そんな簡単に生命って絶ってしまっっていいものなのか？

いや、よくない。

例え神様だろうが、人の命を簡単に奪える権利なんてないんだ。

優しくかった面倒見のいいシード。

将来、親衛隊を退いたら田舎で麦を育てて暮らしたいと言っただシ

ード。

妹さんを殺すのは嫌だっと言っただ俺を、肯定し抱きしめてくれたシード。

短いつきあいなのに、ずっと前からいたみたいに俺の中に影響を与えてくれる。

シーダは俺にとって大切な人だ！

殺させることなんてできないっ。

「嫌だ！おっちゃんは俺がシーダを殺して、人殺しになってもいいっつてゆーのかっ!？」

おっちゃん、分かってくれよ！

俺の切実な願いを込めた叫びにリンはキョトンとしている。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

分かってくれたのか？

床のおっちゃんを見つめたまま、俺はただじっと耐える。

「肉体は滅びないよ。シーダとしての人格も消えない。」

沈黙を破ったのは、リンでもおっちゃんでもなかった。

えっ？

顔を上げて振り返った俺の視界に入ったのは……

「シーダ？」

「初めましてかな？」

「えっ……」

なんだ？

すっごい違和感。

外見も声も変わったところは無いのに。

違う。

これはシーダじゃない。

それだけはすぐに分かった。

声なく立ち尽くす俺にシーダの姿をした何かが決定的な一言を口にする。

「ようやく、会えた。異世界の少年。私を解き放つ者。」

「えっ！あ！だって……」

「あんた何を勘違いしてんのよ！私達は何もシーダの命そのものをどうこうしようなんて言っていないわよ！」

パクパクして言葉を発つせない俺にリンが笑う。

（シルス殿の妹の魂を斬るわけで、シーダ殿を殺すわけではないのだ……）

おっちゃんのスィスフォローによって状況を悟る。

な。

な。

な。

な。

な。

な。

な。

な。

な。

な。

な。

な。

な。

な。な。

なにおうっ！

じゃあ、今の今まで俺が必死になって思い悩んでたのは！？
どんだけ泣いたと思ってんだ！

くっそ〜。

みんなして一言どころか二言三言足りないっつーのっ！

ちっくしょー！

散々心中で罵詈雑言を浴びせかけながらも俺は泣いた。

くっそー！

でも。

でも。

でもよかった。

ホントよかった。

昨日、今日で何リットル泣いてんだ俺。

ははは・・・・・・

泣きながら笑う。

頬を伝う涙を拭う事もせず、ただ流れるにまかせて

。

「最初っから、シードの中に妹の魂が入ってる事は分かってたのよ。

ただ、魂を2つに分けてしまった為に妹が表に出る事がなくなってしまうたのよ。・・・表には出ないけれど、もう一つの魂を見続けたの。アキヒサは、妹の苦悩を夢という媒介を通して、敏感に感じ取ってしまったのね。

アキヒサの役目は奥にいったままの妹側の魂を表に出して、もう一つのシーダとしての魂と分ける事にあつたわけ。」

泣き止んだ俺にリンが説明する。

って、そんな事、最初っからちゃんと伝えといてくれよ。

そしたら俺だつて・・・。

「先にそれを伝えてあんた何かできたワケ？」

・・・変に意識されても困るからアルトは黙っていたのよ。」

俺の心を読んだみたいだにリンが言う。

そっか。

おっちゃんは俺の為に変に意識しないように黙っててくれたのが。

俺。

おっちゃんにヒドイ事したかも。

「おっちゃんごめん。」

(いや、私も言葉が足りなかった。すまない・・・)

そんな事ない。

最後までおっちゃんの事を信用できなかった俺がいけない。

「表のシーダの人格が引ッ込んだのは奇蹟に近いわね。」

アキヒサだつて、いきなりあなたの中には他の魂が入ってますって言われて、ハイ分かりましたってならないでしょ？」

確かに。

「じゃあ、とつととやりなさいよ。」

シーダはそのまま、妹も調停者にはなつちゃうけど、いなくなるわけじゃない。

アキヒサの望む誰も死なない未来が残るだけよ。」

さあと行って、リンが床に転がったまんまのおっちゃんを拾いあげる。

今度はおっちゃんをしつかり受けとる。

よし。

やるう。

俺はおっちゃんを鞘から抜く。

「異世界の少年・・・いや、アキヒサ。

彼女達が伝えていない事がもう一つ。」

シーダの姿の妹さんが言う。

えっ。

まだ何か内緒にしてるのか？

「シーダは死なないが歴史の流れは変わる。 姫巫女が予知夢をみる

前に戻るよ。

だから、シーダをはじめ、アキヒサが関わった全ての人の記憶から

アキヒサは消える。」

えっ。

えっ。

えっ。

そんなあゝ。

でも。

でも。

警沢は言っただけじゃない。

シーダやみんなの事、俺が忘れなければいいだけの話。

うん。

大丈夫。

俺はシーダの姿をした妹さんに頷く。

(では！)

おっちゃん的一声で俺は剣を頭上高く持ち上げ

そのまま、引力にまかせて振り下ろした。

おっちゃんからまばゆいばかりの光が溢れる。

あまりの眩しさに目を瞑った俺。

光が俺を包む。

あ。

戻るかも。

バイバイ、異世界。

バイバイ、シーダ。

バイバイ、おっちゃん。

バイバイ、ミレーヌ。

バイバイ、ランディー。

バイバイ、ガルさん。

バイバイ、姫さん。

バイバイ、コールダーさん。

バイバイ、ワイルダーさん。

バイバイ、ミク。

みんなありがとう。

絶対忘れないからっ!!

「あきひさ！おかえり！」

声がして、目を開けると目の前にはシルスの姿があった。

純白の空間。

以前は俺とシルスしかいなかった空間に今日は、もう一人いる。

すらつと背の高い、茶髪的美丈夫。

「明久殿。」

えっ？

この聞き慣れた声は！

「おっちゃん！？」

あんぐりする俺を見て、口元に微笑を浮かべ頷く。

「明久殿。明久殿との旅は楽しかったぞ。・・・そして、ありがとう。」

う。

いやいや。

お礼を言いたいのはこっちの方だから。

おっちゃんがいてくれたおかげで、俺は言葉も命も助かったんだ。

何より孤独感に襲われずにすんだんだから。

「俺の方こそ。おっちゃん、ありがとう。」

おっちゃんと堅い握手を交わす。

「あきひさ！あきひさに、すてきなプレゼントがらいねんあるよ。

たのしみにしててね。」

「プレゼント？」

「ぼくがあきひさをえらんだのはね！あるぎだでじゅみょうをおえたシーダが、あきひさとかんけいあるからだっただよ。」

「え？アルギダで寿命って？シーダはあの後、すぐに死んじゃうの

か!？」

それじゃ話が違う!

勢い叫ぶ俺の言葉にシルスは首を横に振る。

「たがいのせかいはちがうながれがあるんだよ。だからだいじょうぶ。」

あんしんしてね。じゃあね!バイバイあきひさ。」

手を振るシルスとおっちゃん。

ま。

まっ。

まさかつ。

悪い予感の中で、俺の立っていた場所にいつぞやのマンホールみたいな穴があく。

のわっ!

だからこれっ!

この落下を改善してくれえ〜!

穴に吸い込まれた俺は三度、急降下していった

。

カーテンの隙間からさしこむ光が顔にあたる。

「う・・・うん・・・」

意識が浮上してくる。

あ。

朝か。

ん？

朝！？

ガバツと起きた俺の目に飛び込んできたのは、モロ日本の俺の家。

あの日と変わらない見慣れた景色。

アルギダでは二週間ぐらいたってたはず。

急ぎテレビをつける。

朝のニュースを読み上げるキャスターの姿。

これじゃ、日付が分からん。

日付。

日付。

日付の分かるものは……

あ！

ケータイ！

俺はワタワタと背広のポケットに突っ込んだままだったケータイを

取り出す。

「アルギダでの出来事は夢なわけじゃないよな？」

そう。

日付は昨日から1日進んだ数を示していた。

アルギダでの出来事はなかった？

いや。

いや。

夢なんかじゃない。

俺までみんなの事を夢だっけ忘れてたらだめじゃんか。

みんなが俺の事を忘れてしまっても。

俺だけは忘れちゃいけないんだ。

シーダ。
俺、元気にやっってるからっ。
いつもの朝が始まる。

1年後。

「ほらっ、明久も抱っこしてみて。」
母親に促され、俺はおそろのおそろそつと手を出す。

白い布に包まれた小さな身体。

すやすやと眠る赤ん坊の姿に一同の表情はさつきから緩みっぱなしだ。

母親から妊娠を告げられた時にはホント驚いたけど・・・これで明久にも兄弟ができるねって言われたら何も言えなかった。

着床しにくいとかで子供は一人だけと諦めていたのを知ってる。

モデルになつてなかったら保母さんになりたかつたくらいに子供が大好きだつて事も知ってる。

それがまさか44歳で、しかもびっくりするほどの安産で男児を出産なんて・・・。

でも、俺には分かってしまった。

この赤ん坊はシルスからのプレゼント。

しかも、アルギダで寿命を終えたシーダなんだった事を
久しぶり。

シーダ。

今度は俺の方が面倒みる番だからなっ！

【END】

ガラキスタ7（後書き）

ハイッ！無事、ゴールまでおつきあいいただきありがとうございますとございませすっ！

これで終わり・・・・・・・・・・と、思わせつつまだ完結しません（笑）

それとゆーのも、スピード感を重視したばかりに、伏線の回収を故意にほっぽってしまったところが多々ありまして、そこら辺の話をちよろちよろアップしていきたいと思っております。

とりあえず、調停者が何人かいるけど、なんでアルトだけ物なのか？　なハナシからやってきたいと思います。

もう、少しだけおつきあいくださいませ。

でわでわ、よいお年を。

番外編 アルト&シルス1(前書き)

暗っ！

さーちの話でも、一番暗いハナシになってしまった……。

しかもっ、続きものデス。

ほほ、セリフだけの1は読むのしんどいと思います……スミマ

セン(´・`・´)

番外編 アルト&シルス1

ふと目が覚める。

重い瞼を持ち上げるとそこは純白の世界だった。

ここは？

それに、俺は誰だ？

頭の中をすっぽり取り出されてしまったみたいに何も思い出せない。
どうしていいか分からず、立ち尽くす。

俺は？

どうしたらいい？

どこへ行ったらいい？

何ひとつ満足な答えを出せない。

疑問だけが膨れ上がって、恐怖に押し潰されそうになる。

「はじめましてアルト。」
えっ？

突然、背後からの声に驚いて振り返る。

そこにいたのは……子供？

見た目は12、3歳。

成長期を迎えるか迎えないかぐらいの子供が立っていた。
なんで子供がこんなところに……。

それに今、アルトって……。

アルトって誰だ？

俺の事か？

全くしつくりこないその名を呟いてみる。

「アルト……それが俺の名前なのか？」

子供は無邪気な笑みを浮かべ頷く。

「そーだよ。アルトがおにいさんの名前。」

「お前は？」

「ぼくはシルス。人の調停者だよ。」

「人の調停者？」

「そう。……人の世界では偶然とか運命ってよばれてる。」

「偶然？運命？」

「そう。それから……アルトは死の調停者だよ。」

「死って……あの死か？」

「あたり。人の世界では、死神ってよばれてる。」

なっ。

死神？！

自分の事は何ひとつ分からないのに死神と言っ言葉が示す事は分かる。

決して好かれる者ではないという事も……。

「僕は調停者の世界の案内係も兼任してるんだ。」

アルトに、この世界の事や仕事について教えるね。」

案内係？

こんな子供が？

うさんくさいという表情がおもいつきり出ていたらしい。

シルスは、クスリと笑う。

「ここは時空の狭間。ここにいる間、歳はとらない。

とゆーより、自分の好きな姿でいられる。

……だから、ぼくの事も見た目の歳とは思わない方がいい。

……一応、アルトよりは年上だよ。」

なっ。

驚く俺をしり目に、シルスは歩を進める。

どこへ行く気だ？

「思流の石まで行つて、そこで説明するよ。」

シルスはそう言うが、辺り一面が白で覆い尽くされているこの場所をどう行けと？

「ここには地図も無いし、欲しいと思えば何でも出せる。

だから、その場所にも行きたいと思わない限りたどり着かないよ。行きは僕がアルトを運ぶから、帰りはよろしく。

まあ、能力を行使する為の練習だと思つて。」

「能力？」

「ぼくら調停者には、特殊能力がある。それぞれの調停に必要な能力もあるけど

・・・まずは、共通の能力の説明をするね。」

そう言つてシルスは、今までコブシを握っていた左手を俺の前につきだした。

なんだ？

手を見つめていると、その手から赤や白の物体が出てくる。

「はい。どーぞ。」

開いた時には、現実ではありえない大きさの花束になっている。どうやって出したんだ？

驚いたままのアルトにシルスは薔薇の花束を押し付けた。

「これがひとつめ。どの世界からでも、思い描いたものを瞬時に移動させる能力。

これって、移動させてるだけだから、あんまり一ヶ所では使わないように。

怪奇現象だと思われちゃうからさ・・・。

ちなみにこの薔薇は、イセバンドールって国とガラキスタって国、それから地球のブルガリアってトコから少しずつ失敬してきたんだけどね。」

シルスはパチンと指を鳴らす。

途端、アルトの手に握られていた花束が僅かな花弁を数枚残し消え去った。

「慣れれば自由にしたり消したりできる。

人や動物も物をきちんと移動できるようになったらできるはずだから、まずは物で練習してね。」

「・・・ああ。」

「なんか、アルトって落ち着いてるねえ。

今まで僕が世話した調停者達はもつとはじめ動揺してたけど・・・今更この現実を受け入れないなんて事、できるわけない。

実際、この目で見ているのだから。

そうならば、いち早くこの環境に順応する事。

それが、唯一の生き残る術。

ん？

つて、俺は過去にもこういつた状況になった事があるのか？

自分に思考パターンがあるとするとするなら、それは過去の積み重ねによつてできたものだよね・・・。

でも、俺は自分の事が何も思いだせない。

どういう事だ？

「シルス。聞きたい事がある。」

「ん？何？」

「もしかして・・・俺はここにいる以前、人間として生活していたのか？」

きよとんとするシルス。

「ほんとすごいね・・・アルト。

説明する前に・・・、実感ないだろうにそう考えられるのってすごい事だよ。」

「という事は・・・。」

「そう。調停者は元々は人間だよ。寿命を終えた人間の中から選ばれる。」

選ばれる基準は誰も知らない。

ただ、選ばれた人間は転生の輪から外れてしまつから二度と・・・人間や他の生き物になつて生きる事はできない。」

「なつっ」

「・・・だからなのか、調停者には記憶を消す能力が全員にある。しかも、自分の記憶は自分にしか消せない。

思流の石の、場所の記憶だけは消せないけど、つらい記憶や忘れていた出来事は何回でもリセットできるようになつてる。・・・そのかわり、調停者をやめることはできない。」

転生の輪？

人は生まれ変われるつてのか？

シルスがパチンと指を鳴らす。

途端、それまで一面白い空間だったはずの場所からどこかの地下・・・洞窟の様な密閉された場所に俺とシルスは立っていた。

閉塞された空間の中央には、巨大パールのような丸い石がある。

どこだ？

これが、思流の石とか言うものか？

「これが思流の石だよ。手で触れてみて。」

シルスに促されるまま、俺はその石にそつと左手を置いた。

ポワつとほのかに発光して、石の表面にどこかの映像が映し出される。

誰だ、こいつ？

映像に映るのは、とても身なりがいいとは言えない若い男。

片方の手にはスケッチブックを持っているところからすると、絵描きか？

「手、離してみて。」

言われるがまま離すとその映像はあっという間にかき消えてしまった。

何だったんだ？

今のは？

「思流の石は、これからのアルトの記憶を司ったり、調停者の仕事の情報も伝えてくれる道具だよ。」

記憶を消す前に、残して置きたい記憶だけを右手でここに触れて思い描いておけば次回その記憶だけは再び戻ってくる。

けど、それ以外は全てリセットされてしまうんだ。

だから、記憶を消す時は慎重にね。

調停者として自分が受け持つ対象について知りたい時は左手で石に触れてね。

この石は、調停者一人につき1個持つてるものなんだ。」

つて事は・・・さつき俺が見た映像の男。

あの男を殺す事が俺の仕事？

「そう。さつきの映像で出てきた人物こそ、アルトが迎えに行かないといけない相手。」

その場所へ行きたいと強く思えばそのままアルトは移動できるよ。」

「そんな場所に行きたいと強く願えるわけないだろう・・・」

「そうかな。一定期間、対象を放っておくと自動的に他の調停者に回される。」

・・・けど、この仕事からは解放されるわけじゃない。

アルトはずっと何もしないでいられるかな？」

「なに？」

「やりたくないならやらなければいいよ。」

けど・・・いつまで？人間なら、死ぬまでって決められる。

でも、僕達には終わりはこないんだよ。」

僕が知る限り、最初は拒否していたヤツもそのうちやらざるを得なくなる。」

仕事は……救いなんだよ。」

「救いだと？」

「そう。この世の全ての生物は死を恐れるけど、僕達からしたらうらやましいものなんだよ。」

だって、終りがあるから、生に執着できる。

一生懸命何かを成そうとする。

僕達には、終りがない。

歳をとることすらない。

欲望だって持てない。だって、望めばなんでも手に入るからね。

食事も睡眠もとらなくて平気だし。

記憶が無いから、他の調停者との関係を築くこともできない。

そんな中で、自分が必要とされてる仕事って救いじゃない？

みんなそうは思っていないかもしれないけど……僕はそう思うよ。」

「終りが無い……」

呟いてみてもそれが実際、どういふことなのか俺には何も分からな
い。

ただ、この仕事から逃げることはできないという事。

ならば、やるしかないという事。

「……死の調停者ってのは、何をすればいいんだ？」

シルスが微笑む。

「よかった。仕事の話の前に、もうひとつの能力についても説明させてね。……さつき、外見を自由に換えられるって話したよね。」

僕の外見もそうだけど。アルトも思い描いて強く念じれば変われるからね。物や他の生物の外見になることもできるよ。だから、色々なものを見てそれを石に記憶させていってね。」

「わかった。」

「じゃあ、最初の仕事は僕もつきあうよ。」

俺とシルスは、二人して石に左手で触れた。

光に包まれて二人の姿が消える。

番外編 アルト&シルス1（後書き）

ブルガリアは薔薇の生産量世界一だそうです。
ヨーグルト好き。

調子に乗って1リットル食べたら、大変な事になりました（笑）
苦い思い出です。。。。

番外編 ミレーヌ(前書き)

順番間違えました(´・`・`・`・`)

アルト達の前にこっちの方が分かりやすかったですね。

これは、一話完結です。

番外編 ミレーヌ

とある昼下がりに。

(アルギダには、バレンタインってあんのか?)

おっちゃんか俺の言ったまんまを通訳してくれる。

おっちゃん流に訳すと二人はすぐにケンカ調になるからさ。

今、俺とミレーヌの二人は、庭の芝生の上に布を敷いてごろんと仲良く隣あつて座っている。

もちろん俺の隣には剣の姿のおっちゃんもいる。

「ん? なんじゃ、その・・・バタインとかゆうのは?」

ミレーヌが興味津々聞いてくる。

「バレンタインだよ。女の子が甘いものを作って、それを好きな男に愛の告白付きであげるっていう、女にとっても男にとっても一大イベントが俺のいたトコにはあつてさ。」

(バレンタインだよ。女の子が甘いものを作って、それを好きな男に愛の告白付きであげるっていう、女にとっても男にとっても一大イベントが俺のいたトコにはあつてさ。)

今日は庭の仕事もなくて暇だったからミレーヌが訪ねてきたのは調度よかった。

ぶっちゃん、ヒマっつーかさ。

話し相手にミレーヌは楽しい。

さつきから俺らは、ランディーがもつとミレーヌを好きになるにはどうしたらいいかを二人で検討中ってワケ。

「それじゃっ!! わらわも甘いものをランディーに渡したい!!」

ミレーヌがすごい勢いで食いついてきた。

おー。

ミレーヌもまだ幼いとはいえ、女子のノリなんだなあ。

「おしっ! じゃあ、厨房で作るか?」

勢いをつけて立ち上がる俺に続いてミレーヌまで立ち上がる。

「作るのじゃ〜！」
おっちゃんを小さな折りたたみナイフにして、俺とミレー又はバレンタインのためのお菓子作りをする事になってしまった。
アルギダにバレンタインがあるか訊いただけだったんだけど・・・
ま、いいや。

厨房に着いた俺達を見た調理人達がアワアワしている。

あつ。
しまった。

俺はともかくミレー又は超有名人じゃん！

こんな裏方の場所に来る事ないよな！？

「料理長はそなたかの？今から厨房を少し借りたいのじゃが。」
白いひげを鼻下に生やしたいかにも料理長って感じのじーちゃんに
向かってミレー又が言う。

「今ならまだ夕飯まで時間があるので使うのは結構ですが・・・
きちんと許可はとってらっしゃいますかな？」

「許可をとつたら驚かす意味がないのじゃ〜！」
ミレー又がすごい剣幕で料理長に掴みかかって訴える。

料理長がしがみついてくるミレー又の頭を撫でながら引き剥がす。
そしてしゃがんで、ミレー又と同じ視線になって口を開く。

「驚かすとは？・・・ワケを話してくれたら、私達もお手伝いいたしますぞ。」

「そ、そうか。それは心強いほう！」

実はな・・・我が夫へ甘いものを贈って愛を深めるのじゃ。」

ミレーヌが料理長に理由を語る。

一拍の間を置いて、料理長がミレーヌの肩をガシツと掴む。

「分かりました！我々、調理人一丸となって協力いたしましょう。両国の友好の礎となれるならっ！」

えっ。

そんな大ごとに受けとっちゃうのか？

バレンタインだよ？

「おお、それはありがたいのじゃ。では、皆で協力して作るのじゃ！早速、取りかかるのじゃー！」

ミレーヌの一声で、厨房にいた総勢20人余りの調理人達が作業に取りかかるのを俺は啞然として見守るしかない。

だってさ、一部の人間を除いて俺は言葉を話せない事になってるから、今この間違いを訂正する事ができないんだよっ。

どーするよ？

バレンタインの一言がまさかこんな事態になるなんて誰も思わないよな？

ま、大きくは間違ってないし。

菓子はもちろん、自炊もしてない俺にはみんなが何を作ろうとしているのか分からないけど・・・甘いものならいいじゃんか。

ミレーヌも一生懸命だしさ、喜んでくれるといいな。

「完成じゃ！」

今、俺の視界に入ってるのってさ・・・。

うん。

確かに甘いものだな。

けど。

これってさ……。

20人以上で作った甘いもの。

そりゃ、見事なウエディングケーキにしか見えない。

何メートルあるんだこれ。

3段に渡って作られた超大作なケーキ。

うわっ。

こんなのもらっても……正直俺なら困るって。

ホントのバレンタインを知ってるのは俺だけだから、みんなは各自の役割を果たして満足気だ。

「では、ランディーに見つからないように運ぶのじゃ！」

あ……。

今、料理長がしまったという顔したよ？

「重すぎて運べない……。そうだ、騎士達なら力もあるだろうから運べるかもしれん。」

料理長が苦し紛れに言う。

「そうか。では、何人が呼んでくるのじゃ。」

え？

俺？

ミレーヌが指差した先にいるのは俺。

「早く！急ぐのじゃ！」

お、おっっ！

ミレーヌの剣幕に思わず飛び出してきちゃったけど、俺が知ってる騎士っていったらシーダとガルさんくらいしかいないぞ。

どーする俺？！

「ん？アキヒサ、どうしたんだ？」

うわっ。

噂をすれば、いいタイミングでシーダの姿発見！

俺は、廊下のむこうから歩いてくるシーダに向かってダッシュする。

「シーダ！頼む！ケーキ運ぶの手伝ってくれっ！」

（ワケは後で話す。至急、体力のある騎士を5人集めてほしい！）
おっちゃん言葉にただごとでない気配を察知したシーダが頷く。

「分かった。今すぐ集めてくるから、ここにいろ。」
いるいろ。

だから、早くお願いしますっ。

俺は、シーダが急ぎ走っていくのを見守る。

た、助かったあ〜。

シーダのタイミングのよさにホツとして待っていると、あっという間にシーダが戻ってきた。

うわっ！

何事ですか？！

シーダの後ろからは、騎士の鎧みたいのをつけた人達がわらわらとついてくる。

え。

そんな大勢でこられても厨房に入らないって。

「連れてきたぞ！一体、何が起きたんだ？」

シーダが真剣な眼差しで俺の肩を掴む。

何って……。

ケーキだよ。

（さ、早く厨房に向かうぞ！）

「厨房？」

おっちゃん言葉にシーダの眉間が曇る。

あ、そーだよ。

早く行かないと。

俺は厨房に向かってダツシュする。

その後をシーダを筆頭にした騎士の人達が追いかけてくる。

「連れてきたよ！」

俺は、厨房の扉をドンッと勢いよく開けてミレーヌの元へ。

「よし、ではこのケーキを運ぶのじゃ！」

キャスター付きの料理を運ぶ台にのったケーキ。

俺に続いてシーダが扉を開けて入ってきた。

そして動きが止まる。

「なっ、何だこのケーキは?!」

「おお、シーダか。ランディーにあげるケーキが運べなくて困っていたのじゃ!」

これを一階の広間に運んでほしいのじゃ!」

「はあ?」

男前なシーダとも思えないくらい間抜けな顔でそびえたつケーキを見上げる。

ガシャガシャと音をたててシーダの後を追っていた騎士達も勢いよく扉を開けて入ってきた。

が、先頭にいた騎士も入ってきた途端、啞然として歩みを止めてしまった。

それを知らない後続の騎士達が走ってきた勢いそのまま突っ込んでき

た。

あ。

あ。

あ。

あゝっ!!

玉突き事故みたい後ろから押された先頭の騎士が前につんのめって、

鎧を着た体ごとシーダに体当たり。

「のわっ!」

シーダがよろめいて倒れる先には超大作のケーキ。

うわっ!

みんなが見守る中、シーダはコントみたいにケーキに突っ込み、そしてケーキが倒壊。

「ああーっ! わらわのケーキがっ!」

厨房に響きわたる阿鼻叫喚。

ミレーヌの悲鳴にも似た叫びにはっとする。
今からじゃ倒壊したケーキを修復するのは無理。
どこか・・・うまく残ってる部分ってないかっ?！
俺は急いで一番上段のケーキに走り寄る。

あつた。

上段で唯一崩れずに残ったものが！

「ミレーヌ、大丈夫だよ。これを綺麗にラッピングして渡せば思いは通じるよ。」

(ミレーヌ、これを渡せば大丈夫だ。)

「えっ?・・・大きくなくてもランデイーは喜んでくれるかのう?」
「大丈夫だって。ケーキが倒れても割れずに残ったんだ。二人の愛も割れないって事だよ。」

(大丈夫。気持ちが入ってれば。)

そう、上段で割れずに残ったのは、二人の名前がホワイトチョコで書かれたハート型のチョコプレート。

こうして、ミレーヌはラッピングしてもらったチョコを持ってランデイーに愛を告白。

ランデイーは、ミレーヌの可愛い行動に、ますますメロメロになってロリコン度がパワーアップ。

まあ、アルギダでバレンタインってのもたまにはいいよね。

よっ。

明日も頑張って働くぞ〜！

番外編 ミレーヌ（後書き）

まだ、シリアスモードになる前ですね。

そして、その後のシーダは皆さんの想像にまかせるといってことで、あえてスルー。運のない男は健在ってカンジで。こーゆー、適当なハナシって書くの楽しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3203i/>

さーちんぐわーど

2010年10月9日17時49分発行